
元・殺人鬼の日常

鰻河水鹿

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

元・殺人鬼の日常

【Nコード】

N7126W

【作者名】

鰻河水鹿

【あらすじ】

誘拐された5人の少年少女たち。8年後救出されるも、その子供達は既に人の域を超えた、不本意ではあるが、様々な殺人事件を起こした殺人鬼へと変貌していた。

コードネームを自分の名前と本能的に自覚し、まさに超人と呼ぶに等しいような4人と、一人だけ限りなく凡人に近いとされる主人公・「やく」。

そんなほぼ凡人と殺人鬼教育を受けた4人は、16歳の高校生として普通にやっていけるのか!?

しかし、この高校生活は、死神の手の中。

この小説は、数時間ほどピクシブで投稿した後、悩みに悩んでブログに一話のみ掲載。やっぱ投稿する場所ちがうなあ、と思った末、ココに投稿しました。

そんな5人を描いた学園コメディです。

10月現在、その後の物語を準備中。

第一話 早すぎる再会（前書き）

名前がアレだったり、会話文が多すぎたり、説明が不足しまくっているのは、自負しております。以後、気をつけますが、既にワープロによる190ページほどのものが完成しておりますので、そこらへんを・・・まあ^^；

第一話 早すぎる再会

子供の頃の夢は、強くなること。我ながら単純で馬鹿らしい夢だ。だけど、多分それにはいろいろな意味があったんだと思う。他のみんなと違って、何もできない自分。ただ手先が器用。それだけが取り柄だった僕は血など見たこともなかった。みんなの武器を開発し、役に立て。そう、教えられてきたから……。僕はメガネで奥手で、軟弱だ。

だけど、きりと、さつき、しな……。みんなありがとう。そして、ちづる。大好きだよ。だから、いつかまた会えると願っている。きつと、どこかで。

と、僕は八年間暮らしてきた家を離れた訳だ。殺人鬼としての使命に解放されたみんな。帰る場所はバラバラだったけど、こんなに早いとは思わなかった。同じブレザーの制服でみんな綺麗に集合している。

「日本全国に散ったはずだよね」

僕はショートヘアの無表情な女子生徒「ちづる」に言った。

「何だ、やく。貴様は私たちと会うのがイヤか」

「とても嬉しいことだけど……」

心の準備ができていない。運命なのか偶然なのかはわからない。あわただしい中、僕は一応両親の薦めで、東北からはるばる首都圏の全寮制の高校へ通うことになったけど、どうしてこうもこの学校に集まるのかね。すると、いかにも校則違反になりそうなツインテールの女子生徒「さつき」が僕を哀れな目で見た。

「やく、馬鹿だから教えてあげるけど」

何だい、さつき。低脳のくせに人のことを馬鹿と言って。

「あたしたちは元殺人鬼なんだよ？」

教室で大声で叫ばない。他の生徒がびくびくしてるから。ね。い

いこだから。と言いたいが、言えるような年齢ではないので、声には出さない。

「そんなあたしたちが入れる学校なんてろくにないじゃん？」

「はぁ……でも、高校は行かなくてもいいんだけど」

「アホだな、おまえは。元殺人鬼を雇うヤツがどこにいる」

「だらしない制服の着こなし。多分これも校則違反だろう。コーヒ―牛乳をちゅーちゅー飲む男子生徒「きりと」が珍しくまじめなことを言っていた。」

「第一、どうして私たちが一緒の学校で一緒のクラスなのかしら。期待して損したわ。やっときりとの顔が見れなくなっているのに」

「アハハ。しなちゃん、そんなに俺のこと心配だったんだ。嬉しいなぁ」

「黙りなさい、クズ」

長い髪を揺らす女子生徒「しな」はいすに座りながらきりとを罵倒した。

「でねでね、そんなわけで受け入れてくれる高校がここしかなかったんだよねー」

「よくこの高校も受け入れてくれたね」

「そうだ。ここは七川学園。れっきとした私立高校だが、他の私立高校とは少し違ってこの学校は過去に殺人を犯したりした子供でも受け入れてくれるんだ」

「それだったらグレた人とかがいっぱいいるはずだけど」

「おかしい。回りを見ればあからさまに普通のひとだけ。それもまじめそうな奴ら。」

「生徒手帳見た？」

「見てないなぁ」

「あたしたちに説明させる前に生徒手帳きっちり読めよ、だからおまえは馬鹿なのさ」

馬鹿とか君に言われたくないよ、さつき。

「なにになに？」

生徒手帳を開き、僕は驚いた。

「何で文字が修正テープで消してあるんだ富」

「私は知らない」

とちづる。

「あたしも知らない」

とさつき。

「俺だったら『やくのばーかばーか』と書くぜ」

すぐくむかつく。

「私は知らないわ」

しなが言ったことで僕の中で犯人が何となく解った気がする。

「犯人は君たちだよな」

この悪に満ちた行為をいつ実行したのは謎に包まれている。

「……なんでわかる富」「……」

そこ、認めちゃうの？ さつき否定したばかりでしように。

「だってこないじめをするのって君たちしかないだろう？」

「酷いわ。いじめなんて……大げさよ。これは嫌がらせなのに」

嫌がらせはいつかいじめに発展します。

「生徒手帳が見れないのならしょうがないよねっ」

君たちは何がしたいんだ。

「みんな面接したはずだからわかるわね？」

「……………」

僕は目をそらす。

「やく。どうしたんだ？」

「そつえばあたしたちの面接の日は一緒だったから、こう再会しても別に違和感とかないんだけど。やく、いなかったよね？」

面接？何のことだろうね。僕は心の中でやく。

「風邪でもひいてたの？」

「いや、記憶がない」

「は？」

きりとが疑問の声を上げる。

「まさか」

「金の力？」

受験だつてしてないし、面接もしてない。じゃあ、僕は何なんだ。

「そういえば、相当の財力があれば勉強ナシ、面接ナシで入学できるという噂を聞いたことがあるぞ」

「それだぜ！　ちづる！」

「やく。あんた金持ちなの？」

「まあね、世界各国に別荘があるらしい」

自慢っぽくなるけど事実だ。

「別荘って聞いただけで金持ちのにおいがプンプンするわ。もしかしたらあんた特別入学生徒じゃないかもしれないわ」

なんて余計なことをしてくれたんだ。僕は僕の実力で入学したかった。多分、落ちたと思うけど。

「とりあえず、面接で受ければ入学許可。でも、特別入学生徒だから扱いは悪い、ってとこかな？　あ、ちなみに特別入学生徒は最大で十五人だからグレた人で溢れてないの」

特別、かあ。いろいろツツコミどころ満載だけど一番これを言いたい。

「どうして警察にいないの！」

「私たちは悪くないらしい。悪いのは」

僕たちを殺人鬼＋αとして育てた男。

「笹原篤史、か」

彼は八年前の秋、数人の子供を誘拐した。その罪は時効。しかし、その子供たちは殺人鬼や暗殺者となり、日本中で事件を起こした。例えば、某市の通り魔殺人事件。あれはにこにこ笑っているきりが十歳の時に行ったらしい。そして、西京赤城デパートの爆破事件、これはさつきが八歳の時に、実行した。これらの事件は全て犯人が解らぬまま。どうして解らないか。証拠が何一つない。指紋くらい

あるだろうと思うけど、みんなには指紋がない。人体改造を一度受けているに等しい。

「終身刑、だつてさ。」

終身刑ねえ。僕はそういうことには詳しくないからそれっぽいことを言ってみた。

「まあ、当たり前だろ」

きりとが飲み終えたコーヒー牛乳をゴミ箱へ投げる。二メートル離れているが綺麗に入った。

「……名前ってどうなった」

「名前か」

「……やく。何が言いたい」

僕は誘拐されてから、名を変えられてしまった。僕は……

鬼籍 厄

なんて、滅茶苦茶な名前だろう。「きせき やく」というネーミングセンスを疑う。

「やく、あんたはどう？」

「……表面上は元の名前だけど。僕はこれが身に付いちゃったから」

「やっぱみんなそうなのね」

しながら、メモ帳から紙を切り、ボールペンで文字を書く。

書かれた文字は、変えられた名。まるでコードネーム。

悲鳴 死亡

名字はまだしも、名前は当て字。こう書いて「ひめい しな」と読むらしい。

「あたしもだよ」

その紙にさつきも文字をつづる。

辛苦 殺気

同じく滅茶苦茶。これは「しんく さつき」。

「俺たちは、もう二度と普通の人間には戻れない」

静かにつぶやくときりともさつきと同じく文字をつづる。

髑髏 斬人

「されこうべ きりと」。その名の通り彼は、いつも刀を持っていた。人を斬ることが趣味。

「そうだな、私たちは元殺人鬼。何十年も隠し通せる自信がない」
ちづるは青いマーカーで名を書く。

八裂 血吊

ちづる、「やつざき ちづる」と慣れた手つきで文字を綴る。

四人の名が紙にかいてある。空気を読んで、僕も書こう。

横暴で、凶悪な、だけど優しい僕らの、育て親にもらった、いない名前。

鬼籍 厄

もう使う事なんて無いと思っていたのに……。

第一話 早すぎる再会（後書き）

鰻河です。

初投稿作品となります。

いたらない部分が多々ございますが、次回を期待していただけたら幸いです。

第二話 回転寿司事変（前書き）

全寮制なこの学園。

さてと、同室はまともであることを期待したけれど、やはり・・・

第二話 回転寿司事変

七川学園は改めて全寮制である。僕の部屋は、酷かった。

「……何で」

基本相部屋。これは偶然ではなく運命だね。きりと同室だなんて。

「今日から俺たちルームメイト！よろしくね！クソメガネ！」

「随分とハイテンションだねえ」

ルームメイトにクソメガネなんて言葉を飛ばすなんて、さてはこいつ仲良くする気ないな。

「いやぁーん、やくちゃん。照れちゃってえ」

「キモい」

こんな言葉を唯一の男友達にぶつけないけど。

「……あのさぁ」

くだらないことでも提案するのだろうか。

「トランプやらない？」

くだらなくはない。けど、

「トランプってのは大人数でやるものだよ？」

「そうだな」

「僕は忙しいから」

僕は君と違うんだ。

「つれないなあ。忙しいって何だよ」

いろいろ。

「オイ、シカトするな！ころ……」

きりとが言葉を切った。

「きりちゃん！ やく！ 寿司屋いこう！」

部屋のドアを勝手に開けて叫ぶツインテがいた。そもそもここは男子寮だ。どうして女子が入れたのだろう。ここまで安全に来れる訳がない。僕らの部屋は三階の角だが、情報によると二階三階には

心の奥までエロスに染まった多数の男子共の部屋が存在し、隠しカメラに女子が映るものなら、部屋に連れ込まれ、靴下を奪われるらしい。さらに部屋内には、メイド服からSMスーツまでありとあらゆる萌え（？）コスプレが存在し、三分の一の確立でコスプレ画像を撮られてしまうという恐怖の男子寮三階なのだ。

「寿司？」

僕は、さつきのセンスを疑った。ファミレスとか、牛丼屋とかいろいろある中で何故高い寿司を選ぶのかを。

「うん、寿司。回る食べ物なんだって！」

回る食べ物。僕の脳内にくるくると回転する、マグロの寿司が浮かんだ。だが、違う。寿司を乗せた皿が店内を流れるというユーモアあふれるファミリーに人気のアレだと思う。

「その名も回転寿司！」

やっぱり。

「寿司が回るのか！さつき！」

野次馬Aこと、ちづるがやってきた。

「ふっふっふ。回転寿司さ。マグロにイカにハンバーグ！」

「ハンバーグ寿司なんてものがあるのか」

ちづるは言葉と裏腹に無表情で言う。

「チーズケーキとかレモンパイとかあるんだよ！」

「カフェか」

それを聞いたら確かにカフェだと思うけど。

「というわけで、やく」

きりとが手を差し出す。

「小遣いをくれ！」

まてまて、僕も行くはずじゃなかったかい？

「やくは待っているといい」

一番まじめであるちづるでさえ……。

「だめだよ。やくも連れて行かなきゃ」

よく言ったださつき！

「子供だけの入店は禁止だもん」

「高校生だけど」

多分平気だと思う。その前に僕は保護者扱い？

「よし、早速行こう」

「待って！僕お金ないよ！」

「はあ？何言ってる。ないならさつさとATMで下ろせよ」

僕は知っています。このような行為を「恐喝」「カツアゲ」ということを。

「いや、通帳ないし……！」

さつきがドンツと僕を押し倒す。一步、また一步と僕の机に近づく。

「さつき、財布は左の引き出しだぜ」

情報流すな！この馬鹿きりと！

「情報感謝する、きりと二級調査官」

どこの大佐だっ！

「ほ……本当にないから！」

やめてくれやめてくれ。左の引き出しだけは開けないで。ダメダメダメダメ！

「これ……？」

僕の引き出しから、白い猫の顔の形をした財布ガマグチを取り出す。

「ダサ」

さつき大佐は小声でそうつぶやくと、財布を開く。

「万札が、いちまいい、にまいい、さんまいい」

僕いれた覚えはないけど。

「よまいい、ごまいい、ろくまいい……」

この響き聞いたことがある。確か。

「ななまいい、はちまいい、くまいい……」

日本昔話。皿を割った若女将が井戸に身を捨てるといって怪談といってもいいだろう。

「一枚足りない……」

「よし、回転寿司へ行くぞ、やく」

「僕が奢るの？」

「少しくらいいいじゃん！ ええじゃないか、ええじゃないか！」
その、「少し」というのが心配だ。

僕らは夜道を歩く。街灯が明るく、空には満点の星空、耳に響く音痴な歌。

「♪ 本を売るならラッコ寿司っ」

寿司屋で本は売れません。

「そもそもどうしておまえがいる」

ちづるはギリリと長い髪の乙女、否、射殺女王しなを睨む。

「私をさしぬいて寿司屋に行こうなんて自殺行為としか思えないわ」

左手にマグナム、右手にピストル、背中にライフル。現在、彼女は銃刀法違反をしている。だが、警察も怖くて手を出せないだろう。僕ら以外の生物が彼女に逆らうものならば、苦しむまもなく脳天をぶち抜かれるから。

「まあまあ、落ち着いてよ」

僕は必死でなだめる。

「やくが私に一報してくれなかったら、マシンガンを構えて寮内を走り回るところだったわ」

そう、僕は静かに携帯電話でしなにメールを送った。

（これから回転寿司に行くから来て）

メールはすぐに帰ってきた。

（行く）

なんというか、年頃の女子高生らしからぬ返事だ。バラエティ番組で女子高生のメールは顔文字くさん使われているというのだが。

「やく、あんだねえ」

さつきの視線を感じる。さつきとしてはしなを置いていった方が楽しかったのだろう。

僕は思う。この次何かやらかしたら四人は確実に牢獄で何年もの年月を過ごすことになる。そうなれば、みんなの壊れかけの人生も、完全なガラクタになってしまっし、僕もひとりぼっちになってしまっし。それだけは、絶対回避しなければいけない。と、言っても無駄。まず、自覚していない。自分たちが行ってきたことは普通。そういう考えがまだ根に残っているのだろう。だから、僕しかできない。僕が止めなきゃいけないんだ。今や、みんなの運命を握っているに等しい僕は、みんなを変えていき、ゆくゆくは僕の手握られた運命を一人一人に分けなければいけない。格好良く表現するとこうだ。

（僕は四人の運命という種を育み、苗まで育てたら持ち主へ返す、天才植林業者 やく）

なんという、ナルシスト思考。

「お、あれじゃないか？」

耳に聞こえる、きりとの大きい声。

「ラッコ寿司、全品一皿百円。今人気のタイプかあ」

これなら僕の金もつきそうにない。

「あたし、イクラが食べたい！」

さつきは幼稚園生みたいに無邪気に笑う。

「私は、マグロが食べたいな」

お、メジャーなのを選ぶなあ、ちづるは。

「俺としては、玉子かな」

「玉子にも趣があるよねー」

僕は適当に相槌を打つ。

「私は茶碗蒸しがいいわ」

分かってると思うけど、サイドメニューだから。

「やくは、何が食べたいんだ？」

「え？」

そういえば、僕は何が食べたいんだろう。いか？サーモン？いや、ホタテ貝？分からない。自分が何をしたいか、分からない……。いや、

違う。他に何かやることがある？

「僕は」

静かに口に出す。

「…別に、適当なものを食べようと思う」

「何だそれは。寿司が嫌なのか？」

「僕も、分らないんだ」

「…そうか」

気づいたら、すぐ近くに目的の回転寿司チェーン「ラッコ寿司」があった。

「とりあえず、行こうか」

きりとを先頭に、入店。

流れる寿司。度々流れてくるスプーンやポン酢。

「いくらいくらいくら……」

「このいくら、いくら？」

「ちづる、寒い」

ちづるは寒いギャグしか言えない。ギャグセンスに欠けている、というのが正しい。

「ねえ、さっきからいくらいくら言ってるけど、いくらって何の子供なのか知ってるかしら？」

・・・何の子供だっけ？

「誰も答えられないの？」

「やく、わかるだろ？天才やつくんだもんな」

知らない知らない知らない、誰が天才だ！

「しな、いくら！」

ようやくお目当てのいくらをゲットしたらしいさつきは満面の笑みでいくらを見せびらかす。

「いいだろー、羨ましいだろー」

そんなさつきを見てみるとみんな、自然と笑顔になってしまう。昔の彼女は……。

「あ、また流れてくるわよ」

今度は軍艦寿司ではなく、握りのいくらだ。

「ん？」

と、僕は疑問を感じる。いくら握りはないはずだ。となるとこれは、

（とびっこか！）

「あ、本当だ！」

さつきは何も知らずにとびっこを手取る。

「さ、さつき！ それはいくらじゃない！」

僕が言ったときにはとびっこはもうさつきの口の中。しなは不敵にクスクスと笑っている。知っていたらしい。

「……しな。人を騙すなんて、最悪だよ」

さつきの目つきが急に冷たくなった。

「さつき……やめてよ」

「うるさい。やくは黙ってて」

伸ばした手も振り払われる。

「あたしが知らないでも思ってた？ しな、あんたはあたしがとびっこに集中している間にさ」

いくらシャリを二つに裂くと、中身を見せる。

「毒、入れたでしょ」

何という手際の良さ、と感心している場合じゃない。僕には分からないかった。どこが毒なのか。

「ちづる、きりと。二人は……」

「知ってたぜ」「ああ、しっかり見たさ」

さすがも一流殺人鬼。周辺の人物の怪しい動きにまですぐに反応できるのか、すごいなあ。

「しな。食べ物は大切にね！」

さつきはブチギレだ。両手に手榴弾を持っているのがその証。

「あのね、あたしだって無敵じゃないの！」

手榴弾のピンを外し、しなに向かって放り投げた。

「まずい！ きりと！ ちづる！ 警察呼ぶ前にやることがあるっしょ！」

「…え？ ああ！」「了解」

耳に火薬の爆発音が響いた。さつきが手榴弾を室内で投げたらしい。こんな事は日常茶飯事だったから、懐かしいと思う反面、頼むからやめてくれという悲しみと、どうしてまあ火薬なんてまだ持ってるのかが気になる好奇心が交差する。

「逃げろおおおおお！」

爆発を見たら誰でも逃げると思うが、面白がっては困る。だから僕は叫んだのだ。

「逃げないと、殺すぜ！」

だが、きりとは反常識的に逃亡を促す。

「やく！ まずい！ 二人とも頭に血が上ってる！このままじゃ、私らも危険だ！」

気づけばしなはマシンガン二丁流でさつきを射撃。対するさつきは、無数の弾丸に一つも当たらず、リボルバーを構えている。

「さつき！しな！やめるんだ！」

「…黙れ。あたしはコイツの頭をぶちぬく」

だめだ。話が通じない。

「二人とも！今すぐ止めないと、せっかく得たスクールライフがなくなる！」

いや、もう半分なくなってるけど。だけど、今度こそ刑務所へ行かなければならない。

「・・・んなのどうでもいいわよ。私はさつきの血を見るまでやめない」

血を見るまで……？血を……！

「きりと！ちづる！来い！」

「こっちも忙しい！」

「やく！何か名案があるのか！」

うん。あるさ。僕は弾丸にかすりながらも、テーブルに隠れるち

づるに近づいた。

「ナイフ、ある？」

「何する気だい？」

「さつきに投げてほしい。怪我しない程度に」

僕は囁いた。

「はあ。やってみるさ」

ちづるは、不安そうな顔をしながらナイフを構える。

「…やっぱり、あいつらはこっちに気がないな。気を抜いたら死ぬし」

当然だ。彼女たちは「ごっこ」をしているわけではない。殺し合という名の喧嘩。二人の喧嘩は昔からよく見てきた。笑いながら弾丸を交わす、という恐ろしい喧嘩は彼女達しか行わないだろう。

「いくぞ。急所に当たらないことを祈るか」

フツとちづるの腕が高速で動く。

「…スピード、相手の動き、共に計算済みだ」

すばらしい。さすが一流殺人鬼の名は伊達じゃない。

「やっぱ、すごいよ」

と言い終わったとき、さつきの左腕から血が垂れ、壁にナイフが刺さる。

「ヤベエ！警察来たぜ！」

……来るだろうね。

「逃げる！」

第二話 回転寿司事変（後書き）

鰻河です。

実は1年くらい前に書き始めました。

こんな文体でよく応募しようと考えたな、自分。
結果的には長すぎたんだ、これ・・・

第三話 3人の暗殺者（前書き）

入学したその週に転校生とはどういう理屈かは知らないが、まあ色々
と珍しい学校なので、そこはスルー。

しかし、転入生は、特別入学生徒の待遇で・・・

ただでさえ登場人物が多いのにこれ以上多くしてどうするんだああ
あああっ！？

第三話 3人の暗殺者

回転寿司事件の後、二人は警察に連行された。精神鑑定の結果、異常ありと断定。裁判にもなったが、精神鑑定の結果が強く、執行猶予五年という判決。本当に良かったよ。

しかし、問題は続く。事件を起こしてからずっと、学校に来ていない。寮には居るが何も答えてくれない。おかしい。あの二人は学校が大好きのはずだ。きつと。

「えゝ、HRを始めます」

中年の担任教師が、出席簿を眺める。

「辛苦と、悲鳴は報告忘れていましたが、二週間停学です」

……ちゃんと言いましょうよ。

「ああゝ、今日から三人転入生が入ってくるようになりました」

三人とは、随分といきなりだなあ。

「えー、三人とも特別入学生徒ですが、仲良くしてください」

へえ。特別入学……。

「……え」

目の前にいる三人の女子生徒。これが転入生。一人は釘バットを持っていて、もう一人はアイスバーをくわえている。そしてもう一人は究極の校則違反。制服を着ていない。シスター服だ。で、ポニテール。しかも、頭の天辺にはびよこんと癖毛、俗にいうアホ毛が立っている。

（あれ？）

僕は彼女たちを見たことがある。彼女たちは、僕らと同じ人に教育された暗殺者チーム。チーム名は「LAILA」。ライラ、と読む。詳しくは知らないが、多分、「花」っぽい意味だろう。

「ライラ！なんで貴様らがいるんだ！」

きりとが立ち上がり、転入生三人組を指す。

「あ、されこうべくんなのです。どうもなのです。さいかは元気な

のです」

「さいか、貴様は相変わらずだな」

きりとがサバイバルナイフを隠し持ちながら答えると同時に、ちづるが舌打ちを始めた。

「おお！ちづるじゃねえか！相変わらず無愛想だなあ！」

「うるさい。首でもはねてやろうか」

まずい。みんな、ピリピリしてる。

「ごきげんよう、やくさん」

「……お久しぶりで」

僕も彼女たちにだけは会いたくなかった。彼女たちは僕らと会う度に何かを仕掛けてくる。今回も例外じゃないと思う。きっと何かを企んでいる。疑いたくないけど。

「クラスの皆様、初めまして。わたくしはあらし。気軽に呼んでもらってかまいませんわ」

このあらしという女はライラの中心的人物で通り名は「天罰」のあらしこと、

獄舎 安楽死

「ごくしゃ あらし」。コイツも当て字。名前もそうだが、この人はとんでもなく薄幸で。高貴な言葉でしゃべっているが、僕の情報だと実家は貧乏。父親は売れない漫画家、母親は浮気性。可愛そうな娘だ。が、どうして私立に通えるか。それはアイスバーをくわえ、笑う娘、さいかが関係している。彼女は大手ゲーム会社の令嬢。さいかが資金提供したと僕は睨む。そんなさいかの通り名は「煉獄」のさいか。彼女は超能力者で相手の個人情報や心境が読め、机程度のものなら簡単に、念力で持ち上げてしまう。そんな彼女の名は、

破壊 災禍

僕らの中では一番まじめな名前かもしれない。読み方は「はかい
さいか」。

そんなことを考えている間に釘バット女とちづるが、いがみあつ
ている。

「その脳みそなど焼却炉に入れてしまえばいい」

「うつせえ！殺してやる！死ね！」

釘バット女は釘バットを持ち上げ、ちづるの頭を殴ろうとする。
が、

「うぐっ！」

ちづるの方が先に手を出した。釘バットアタックをカウンターし
た、という感じに華麗に回避、格闘ゲームの中国人格闘家の如く拳
を突き出したのだ。

「ちづる、てめえ……」

「正当防衛だから」

この釘バット無双女は人呼んで「屍屋」。そんな彼女の名は

黄泉 狂虎

名前の意味を考えると格好いいのだが、可愛そうなことに女の子
だ。男だったら良かったのにね。

「喧嘩はやめてください」

と教師の声がかかる。

「うるせー！第一、喧嘩じゃねえしよ。これはただの」

「そうなのですよ。きょうこの言うとおり、これはただの」

「きょうことさいかの言うとおりですわ」

そんで声をそろえて。

「殴り合いだ！」「宣戦布告なのですよ？」「私たちが如何にこの
ゲスより勝っているかを見せているのですわ」

ツッコミどころが多すぎる。きょうこの言うこと＝先生の言うこ
とで等式が成り立ってしまうし、さいかの言うことから分析すると

全面戦争を持ちかけているらしい。あらしに至っては、完全に僕たちを罵倒している。

「みんな、仲良くするように」

僕は心の中で叫んだ。

そんなことができるかああ！入学早々、僕のスクールライフにさなる波乱がよぎった。

「どう思うか、やく」

ちづるが僕の目の前でほおづえをついて喋っている。

「いや、壊滅的な学校生活がさらにスタスタのボロボロになるとしか……」

「ふむ。ところできりとはどこへ行ったのだ？」

「HRでは居たよね。さて携帯携帯」

そんなことを話していると、教室中がざわめいているのに気づく。

「転校生が剣道部に道場破りだつて！」「うちの剣道部は強豪だつていうのに、ほんと常識知らずよね。あの子達」「なにせ、特別入学生徒だもん」「ねえねえ、なんか髑髏くんも一緒にいいよ」

なんですと……。あの子達というのはライラの三人？それプラスきりとだつて？まずい、このままでは危険だ！確実に一人は怪我人、いや死人が出てしまう！その前に、部活動は放課後というのを知らないのかあいつらは。

「ちづる！剣道場だ！」

「待て、感情に身を任せるんじゃない」

「え」

「今のおまえが、ミッションしか見えなくなったライラを止められるとは思えない。きりとが居たとしてもさつきとしなが居ない状態では止めるのは至難の業だろう」

ちづるのいうことは正しい。

「でも、このままじゃきりとが、停学になるよ。もしかしたら停学じゃすまないかもしれないし……」

「やく。安心しろ。事はすぐ治まるさ」

「どうしてだよ！」

「もう、向かわせてあるさ。乱闘が始まっている頃だろうな……」

ちづるは窓のサッシにひょいと腰掛けると、体育館の隣にある剣道場を指さした。

「なあっ……」

道場の前、いわゆる渡り廊下で、ちづるの言う乱闘が始まっていた。

「あのツインテはっ」

停学中のさつきが、拳銃片手に走り回っている。

「さつき一人？」

「いや、しなが居るはずだ。屋上に」

「へ？」

そういえばさつき携帯をいじってメールを高速で打ち込んでいたのはこれの為か。

「しなはきつと、現在遠距離設置型爆弾砲を準備しているはずだ」

遠距離爆弾砲？それって、わかりにくいけど俗にいうロケランのことなんじゃ……。

「うおおおおおい！」

ロケラン学校内でぶちまけたらどうなる！ライラもと剣道場に校舎の一部まで破壊しかねない！これが実行されてしまったら死人は一人では済まない。

「ちづる！早く屋上に！」

「ん？私は行かないぞ。忙しいからな」

「何が忙しいんだよ！暇そうじゃないか！」

「私とて女のコだ。女のコはいろいろやらなくてはいけないことがあるんだ」

「例えば？」

ちづるは平然とした口調で答えた。

「ラブレターを書かなくてはいけない」

「へえ。誰に？」

「そんな無駄話をしている間にしなはもう準備完了でいざ撃つというステップに入ってるかもしれないぞ」

「×○□」

僕は、言葉にならない奇声を発すると、屋上への階段へ走り出す。一年生は三階を基本に生活しているため屋上へ行きやすい。

目の前にたたずむ屋上への扉。

「しな！」

扉を乱暴に開ける。

「んあ？」

「何してんの！」

フェンスのない屋上のはじっこで何か大きいものをいじっているしな。

「何って見りや分かるでしょ。ロケランの準備」

「今すぐやめろ！」

「どして？」

どうしてもこうしてもない。常識が通じない人間だ。

「危ないからだよ」

「大丈夫。そんなに強力じゃないし、爆発が広がったとしても半径二百メートル程度よ」

「半径二百メートル？相当危険じゃないか！」

「えー」

「他、危険じゃない武器は？」

くあああと大あくびをするしな。

「ライフルと散弾銃とマグナム。あとは、閃光手榴弾とか、煙玉だけ」

何か古典的なものがでてきたけど、どうすればいいのかな？

「これあの暴動は止められな」「ムリ」「いかな」

反応が早すぎる。

「少しは考えろ！」

「閃光手榴弾でも屋上から落とす？」

「それだ！」

ナイス。ナイスだ！しな！

「じゃ、ちよつとまぶしいから目をつむってくれる？」

「はあ」

いわれるままに目をつむる。

「ほい、投げたよ」

しなは僕の手を握り、歩かせる。

「じゃあね」

何のこと？

「へ？」

しなはぐいつと僕の体を危険な屋上からどんと押して、落とす。

「ばいばあーい」

空気抵抗が半端ねえ！死んじゃうのかな、僕。

ありがとう、みんな

ありがとう、地球

そして さようなら この世界に生きる全ての生命よ……

静かに目を閉じ、脳内で死後の世界への荷造りを始めよう。

ドタン

「痛たたたた……」

声が聞こえた。

「どこか骨が折れると思ったぞ」

ちづるの声だ。そして頭には柔らかいものがあたっている気がする。

「あれ？」

「いい加減重いから、離れてくれないか？」

僕はようやく気づく。ちづるはグラウンドにあおむけに倒れていて、僕はちづるの上に、あおむけになっていることを。

「この柔らかいのは？」

「アホ。私の胸だ」

「……」

つまり、僕はちづるの胸を枕にしているということだ。

「あああああああ」

僕は慌てて飛び起きる。

「うるさい。耳に響く」

よく冷静でいられるよね、ちづるは！

「あれ？さつき達は？」

そういえば乱闘が治まっている。

「風紀委員というものがあるらしいからな。そいつらが防弾チョッキと警官用ヘルメットをかぶって連行していった」

「ちづるが手配したのかあ」

「いや、私はやくを受け止めるためだけに来たのだ。風紀委員とは無関係だぞ」

ん？待てよ。じゃあ、僕が屋上に向かった時点で、落ちて来るというのは分かっていたのか。

「しなが落とそうとするモーションを見てから計算したからな。私は頭が疲れたよ。知恵熱というのか、これは」

何げにちづるは頭の回転が速い。落下速度から墜落地点まで計算したのか。だが、疑問が残る。どうしてしなが僕を落とそうとするタイミングが解ったのか、ということだ。

「さて、では私は監視カメラを回収しに行こうではないか」

そういうことか。ちづるの携帯には変なアプリがごちゃごちゃあるらしいからね。（ルームメイトであるさつき談）

「ちづる！」

僕は、背中を向けるちづるを呼び止める。

「ん？」

当然の如く、無表情で振り向くちづるに僕は言う。

「ありがとう」

ちづるは静かに微笑んだ。いつ以来だろう、ちづるの笑った顔を見るのは。

昼のことだった。僕はちづると一緒に、昼食を食べていたのだが、きりとは午前中の授業を全てサボり、その姿を現したのは昼休み終了十分前のこと。いちごミルクをくわえ、どっかりと僕の目の前の席、大前さんの席に座りだした。そんなきりとの僕が聞いた昼休み第一声は、

「腹減った。ラーメン食いてえ」

「なんだきりと。生きていたのか」

ちづるは無表情でからかうと、自分の鞆からアルミホイルに包まれたおにぎりをきりとに手渡す。

「ほれ、おにぎり」

「ラーメンは？」

「じゃあ、付け足そう。ラーメン風味だ」
さらりと嘘をつくな。

「よっしゃあ。もらいつ」

騙されるきりともきりとだけど。

「ところで、きりとはどこ行ってたんだい？」

「本屋」

「つまり校外に出たのか」

「そーゆーこと」

きりとは、おにぎりにがぶりつく。

「おいしいか？」

「うーん、ラーメンの味が薄いな」

そりやそうだ。ラーメン風味なんて嘘八百だもの。

「ふむ。そうか。研究が必要だな」

「本屋って言っただけど、何しに？」

「剣道で勝てる方法を探りに」

「まさか、本当に道場破りするつもりかい？」

あっという間におにぎりをたいたらげると、もう一個とおねだりするかのようちづるに手を差し出す。

「すまん。もう無いんだ。十八個くらい作ってきたんだが、その全
てがやくの胃の中へ無惨に・・・」

「僕食べてない！」

なんて事を言い出すんだちづる！

「まあ、いいや。購買で焼きそばパン買ってきたからな。いーだろ
ー」

自慢げに焼きそばパンを見せびらかす。

「そういえば、購買のパンって近所のパン屋から取り寄せてるんだ
っけ」

「御名答っ。パン工房『にむら』はここらじゃ、美味と有名なパ
ン屋らしいんだ。で、いつも昼には完売。閉店ガラガラってわけ
だ」

詳しいな。もしかして、本当はここら辺のガイドマップ見ていた
んじゃないか？

「で、勝てる方法は？」

「日本刀でなぎ倒す」

本当に調べていないんだね！

私はベッドに横たわる生命維持装置につながれた人間の手を握つ
た。彼は、呼吸をしているだけ。食事をしていないからだろうか、
随分とあの頃より痩せ細ってしまった。握った手を少しでも強く握
りしめる。私は謝らなければいけない。約束を破ったことを……

第三話 3人の暗殺者（後書き）

鰻河です。

またややこしくなりました。

釘バットが「きょうこ」、エスパーが「さいか」、残りが「あらし」という覚え方でいいかと思います。ぶつつちゃけ、さつきとしなより重要度が高いです・・・

第四話 剣道部と剣道もくそつたれもない乱闘を繰り広げる（前書き）

剣道部との試合は簡単だった。

まさか、普通に試合をしようなどということは想定できない。

となると、もちろんナンデモアリの乱闘で！？

よくもまあ、高名らしい剣道部がOKしたよね？

そんなわけでVS剣道部にきりとたちは勝利できるのか！？

第四話 剣道部と剣道もくそつたれもない乱闘を繰り広げる

桜舞う四月某日の放課後、きりとはどこからか持ち出した日本刀二刀流で剣道部へ道場破りに行く。しょうがなく僕とちづるはついて行く。きりと曰く、ルールは三対三で、先鋒、中堅、大将といったここだけ普通の剣道だ。ここだけ、というのは、日本刀がある時点で反則になってしまうからだ。しかし、きりとも馬鹿じゃない。審判はナシ。相手がひれ伏すまで戦うという、滅茶苦茶なルールを作り上げた。もうこの時点で剣道ではなく、ただのバトルということになる。さらに、きりと側につくのは、ライラの「天罰」のあらし、「屍屋」のきょうこ。ちなみにあらしの武器は革のムチで、きょうこがお馴染み釘バット。剣道場の入り口で、僕とちづるとライラの最後の一人「煉獄」のさいかは体育座りをして、この乱闘を観戦する。

ルールの確認だが、まず初戦は先鋒VS先鋒、次は中堅VS中堅、ラストは大将VS大将の戦いとなる。勝敗は、試合の勝数で決定。引き分けは、今回はナシのようだ。ちなみに、相手をひれ伏せばいいわけで、そのやり方は不問。気になるオーダー表だが、きりとチーム（きりと様万歳軍団というらしいが）は、先鋒・きょうこ、中堅・あらし、大将がきりとようだ。対する剣道部は生徒会通信でもよく取り上げられるらしいエース級の三人（いずれも男子）で、中村というのが先鋒、続いて飯田が中堅、大将が坂本という人物で、全員三年のようだ。一年、それも特別入学生とに負けたら、先輩としての威厳も、強豪校としてのプライドもズタズタに引き裂かれるだろうから、剣道部チームも侮れない。きっと、きりとチーム同様汚い手を使ってくるだろう。その証に、防具をつけていない。

早速、先鋒同士、きょうこVS中村の戦いが始まったようだ。きょうこはさつき述べたとおり釘バット、中村はエアガンのようだ。「エアガンなら勝てるだろうね」

ちづるはガムをくちやくちやしながらつぶやいた。

「でも遠くから射撃されてしまったら手も足も出ませんし、さいかが透視してみたところ、エアガンの域を超えて、一人は簡単に病院送りにできるくらいの改造を施してあるみたいですよ」

その言葉に、剣道部の皆様方の顔が青ざめた。

「釘バットとの相性は？」僕はさいかに何となく尋ねてみる。

「むうー、きょうこに当たったら、いくらきょうこでもヤバいんじゃないですかあ？心配ですう」

さいかは全然心配している様子はなく、むしろひれ伏すのを楽しみにしているようだった。薄情な女である。そんなのが三人集まってライラという暗殺者チームを構成しているのだからしょうがない。

「あれ？」

きょうこの方をじつと見つめてさいかは口に出した。

「釘バット……」

「どうしたんだ？」

「多分、次釘バット振ったときに折れますよあ」

「なるほど。きょうこは負け決定か」

さいかは釘バットの状態を調べていたようだ。そもそも、さいかはターゲットの情報収集などに長けている。釘バットの耐久を見るのも容易なことだったろう。

「あ」

ボキンと釘バットが真つ二つに折れ、折れた先端は不自然にふわふわときょうこに飛んでゆく。そして、きょうこの頭に。痛恨の一撃だ！

「でゅああかがああぎょええぐろうえううううぐぎゅばがああああ」

と、HR後の僕に勝るとも劣らないすさまじい奇声を発する。頭からはだらだらと血が流れ、何というリアルにグロテスクだった。血をろくに見たことのない生徒はトラウマになるはずだ。試合相手の中村に至ってはもう二度とこの剣道場には入れなくなるだろう。

すぐさま近くの救急病院へ運ばれ、美化委員によって血は残らずふき取られた。血痕は残るけど。その後が問題だ。養護担当の先生がこの試合にストップをかけたのだ。当たり前といえば当たり前。剣道部は、「それがいいそれがいい」と、目を赤くしていたが、道場破りを試みたきりとは激しく反論した。

「お前らは、道場をとられたくないだけだろ！負けるのが怖いんだろ！」

と。そう言われては、剣道部も引き下がることはできない。しづしづ先生も承諾するが、警告をした。

「もう一度同じ事があれば、剣道部は三ヶ月の部活動停止、特別入学生徒の一週間停学」

まあ、次はあらだし、そんな事もしないだろうというのは、僕の頭が平和ボケしていたからだったのを悟ることになった。

中堅同士の戦い、あらしVS飯田。あらしは何故か男子更衣室から露出度の高いSMな服を着て現れた。中に男子が居ないのが一番の救いだっただ。というか、何故女子更衣室を使わないのだろう。

「面白いですう」

「よくもあんな事のあとで面白いとか言えるよね……」

五十は軽愉快的野次馬兼観客も今では半数以下に減っている。

「やく。アレは何だ？」

試合相手の飯田はヘンタイとしか言いようがない。女子更衣室からあらしとお揃いのSMな服を着て現れる。もう一度言うが男子だしつこいようだが男子だ。女子更衣室から堂々と胸を張って現れ、ボクシンググラブを両手にはめて試合場へ現れる。

「……ヘンタイ」

そうしか答えることができなかった。

「お、試合が始まるですう」

ムチVSボクシンググラブ。勝利は目に見えていた。だが、僕達は見ただ。飯田が、飯田が……

「ふおおおおお！」

腰を前後左右にいやらしく振るのを！しかも両手は頭の後ろ！これは何を意味しているのか！周囲から聞こえる女子生徒達の悲鳴。その中には一部男子生徒の叫びも混じっている。観客の多くは剣道場から嵐のように去ってゆく。

「やく。アレは何だ？」

もう一度聞かれた。

「ヘンタイ」

はつきりと言える。ヘンタイの部類で示すと、ゲイ。

「やって差し上げますわ！」

パンパンとムチを鳴らし、堂々と立つもう一人のSMスーツ、あらし。

「無茶ですう！例えあらしても、そいつには勝てないんですう！」

と、さいかが笑いをこらえながらの忠告を飛ばした。

「うるさいですわ！」

反論するなり、飯田の背後へ回り込み、ジャンプ。そして背中に格好いい特撮ヒーローのキックをぶちかます。もうこれは女子高生の域を超え、超人じゃないか、と一瞬思ったが、僕のすぐ隣に二人ほど超人が居たのを忘れていた。どうやら僕はこの二、三ヶ月で相当平和ボケしてしまったようだ。

「やく。アレは何だ？」

「え？」

飯田は四つん這い、あらしは飯田の背中に右足を置いて、

「このブタ、ブタ、ブタ！ブタはおとなしく豚小屋でブタの餌でも食べていなさい！」

と、飯田の尻をムチで打つ。

「えっと…その…」

こんなことを聞いてくるなんて。僕だって一応男子だぞ。

「さっさと豚小屋に帰りなさい！」

「うっ、もっとお願いします！」

飯田はこの状況を喜んでいようで、そのドM精神は僕には理解

しがたい。

「何であいつは喜んでるんだ？」

「……ドMだから……」

「じゃあ、私がお前の尻をムチで叩いたら、喜んでくれるか？」

無表情でそんなこと言わないでよ。

「いや、僕はMじゃないし。喜ばないし。尻をムチで打つなんて怖いこと考えないで」

「何を言うか。お前はMだろう」

そんなガセネタどこから仕入れてきたか、気になるから聞いてみる。

「どこの情報？」

「とある世界ワールのアルフェスト大陸、グラン・ド・エルディーグ帝国の地方都市ルチエのサリウオの酒場を拠点とする情報屋からだ」

何かよく分からない言葉がいつぱい出てきたぞ。

「情報屋の名前は？」

「シーナン・クライング」

しなか。後で痛い目にあわせてやる。

「勝利、獄舎あらし！」

これで一対一か。ということは勝敗はきりとの手に委ねられた。

「やく」

「何だい？今度は」

「きりとはどこへ行ったのだ」

「そういえばそうだねえ。さいか見た？」

「知っていたとしても教えないんです」

なんて薄情な人間だ。

「ちなみにどこだ？」

「チアリーディング部の部室に下着を盗みに行ったなんて口が裂けてもいえないのです」

なるほど、チアリーディング部か。

「やく。行くぞ」

「いや、僕は共犯者になりそうだからね」

「だめだ。私だけ乗り込んだらレズビアンと勘違いされるではないか」

全然大丈夫だから。乗り込むわけじゃないし、ただ入っただけでレズとは普通なら断定されない。

「私は純愛主義だからな。知らない女の下着など興味ない。むしろ興味があるのはお前のタンスの中だ」

何を言っているんだ、ちづるは。今日は様子がおかしい。

「そうですう。さいかもやくさんのタンスの中に何冊エッチな本が入っているか気になるですう！」

「入ってないから！」

「ちなみに何冊入っているんだ？」

「軽く五六冊」

「ちづる！信じないでよ、嘘だから、でまかせだから。五六冊も入っているわけじゃないか」

「で、何冊入っているんだ？」

「だから入っていないって・・・」

その時、僕は自分の過ちに気づいた。

（五六冊も入っているわけない、これはつまり、エロ本を持っていることを肯定する事になるじゃないか）

「さいか。頼む」

「五五冊」

「なるほど。制裁が必要だな」

「勝利ですわよ、おーっほっほほほ！」

つかつかとあらしがSM服のまま、歩いてくる。

「あらし、いいところに来た。ムチを貸してくれ」

「いやですわ」

ナイスだ、あらし！

「三百円払うぞ」

「わかりましたわ。壊したら大変なことになりますわよ」
きちんとちづるに手渡しをする。

「え」

「楽しいショータイムなんです」

「冗談だよ」

「命乞いなど私には通じぬ！」

ムチって確か、叩くためにあるんだよね。何故、
「ぐあがつ」

首に巻いて締めるのかな？

私は涙を必死にこらえる先輩を見守るしかできなかった。自分の無力さを痛感する。私にもっと力があれば、こんな事にならなかったのに。どうして、神様はこんなに意地悪なことをしたのでしょうか。ねえ、私はどうしたらいいの？

第四話 剣道部と剣道もくそつたれもない乱闘を繰り広げる（後書き）

鰻河です。

もう、剣道もへったくれもない戦いを繰り広げてしまいました。

純なスポーツマンシップを持つ方、スイマセン。

第五話 もしもの法則（前書き）

失踪したきりとに頭を悩ませるやく。

しかし、そこで携帯電話が鳴り響く！

なんとそれは、自分の弟から。

またもや登場人物が増加する中、きりとの行方がなぜか判明！

第五話 もしもの法則

「やっぱり日陰は涼しいな」

ちづるはムチをゴミ箱に捨てると、僕の背中をさする。現在、きりしが失踪中のため、試合は延期されている。あらしとさいかが探しはじめてから、もう一時間たっている。僕は剣道場の前でちづると二人、缶ジュースを飲んでいる。

「トマトジュースっておいしいか？」

「うん。おいしいよ」

「吸血鬼みたいなことを言うな」

「どこが吸血鬼？」

「吸血鬼が飲んでいる赤い液体は、血か赤ワインかトマトジュースのどれかなんだぞ」

三分の一の確立でトマトジュースということか。

「じゃあ、もしも僕が吸血鬼だったら、みんな近寄ってくれるかな？」

「さつきとしなときりとライラの三人は逃げるだろうな」

「なんか、『もしも』の話なのにすごく心が痛いよ」

「安心しろ。私がいる」

ちづるは僕の目の前にしゃがみ直した。

「私は何があってもお前を放したりしない」

「え？」

「全ての人間がお前を突き放しても私は必ず、お前の側にいる。約束しよう。絶対に守ると」

何なんだ？このシチュエーションは。

「えっと、そういうことだ」

「？」

「もついい」

ブルンブルルルルルル

耳に入る、何かのエンジン音。

「ん？」

何かと思えば、胴衣に袴という明らかに剣道部員と思える生徒が四人集まって機械をいじっているではないか。

「あれは……」

真つ赤なボディ、先端についた刃、そして取っ手。

「芝刈り機？」

「坂本という輩の武器か」

「いくらなんでも、芝刈り機相手じゃ勝つのにムリがあるでしょ！」

「静かに」

やっぱり、ちづるはすごいや。冷静さが欠けてない。

「あれは学校の備品か？」

「それしか考えられないよ。壊したら怒られるよ」

「なるほど。じゃあ、どうやってこの芝刈り機を止めるか」

「刃を抜くとか？」

「それだ。でも抜くとバレてしまう。円状のものはないかな？」

円状のもの？フラフープとか？でもあの芝刈り機は結構小型だしなあ。

「ピザはどうだ？」

「ピザ？確実にバレるよ」

「ポスターカラーでも塗ればいい。美術部へ借りにいくぞ」
剣道部の奴らには気付かれていないようだ。

「タイム。ピザは？」

「・・・あ」

ピザの出所については完全に忘れていたらしい。

「レコード、というのは無いのか？」

「古い」

「じゃあCD」

「小さいから」

「ふむ、ならば刃をすり替える作戦は中止だな」

「中止って・・・」

他に何かあるだろうか。きりと命がかかっているのだ。あの芝刈り機を剣道部の奴らにバレないように、片付けるにはどうすればいいか。

「全て中止だ」

「え？」

「芝刈り機をどうにかすることが間違っていたんだ」

「駄目だ！それじゃ、きりとが！」

グビグビとちづるは缶入りのリンゴジュースを飲み干すと相変わらずの無表情で話す。

「きりとも雑魚ではない。信じろ」

何を言うか。さっき「もしも僕が吸血鬼だったら」の話で、きりとは逃げると言ったくせに。

「芝刈り機相手に負けて、きょうこのように病院へ運ばれる女ではないさ」

ちづるはリンゴジュースの缶をゴミ箱へ投げ入れた。

「根拠は？」

「私たち五人は、ずっと一緒だっただろう。それが一番の根拠だ。きりとは、私たちの中で一番アホで、バカで、マヌケだが、技術面にしても精神面にしても、一番強いからな」

そうだ。僕は忘れていたんだ。平和ボケをしていたんだ。みんな、僕と違ってとても強い。喧嘩っ早かったり、常識知らず（僕も含め）だったりするけれど、結局は強いんだ。

「そ、うだね」

「まあ、ここで問題があるんだが」
「ん？」

問題なんて多分無いと思うんだけど。

「きりとが校内にいないらしい」

「いつそんな情報を？」

「さいかは一方的なテレパシーを送ることができる。そのテレパシ

「は、脳に響くメッセージ、つまりさいかがテレパシー能力を使つて言葉を念じ、相手を特定することでその相手の耳に念じた言葉が届くという方がわかりやすいな。とにかく、それが聞こえたんだ」「僕には聞こえないけど?」

「送ったのは私とあらしただけだというからな」

「それにしてもどうして僕には送ってくれないんだろ?」

「さ、きりとを探そうか」

「校内にはいないですよ」

「で、居場所?」

「僕が尋ねるとさいかは露骨に嫌な顔をし、吐き捨てるように言う。」

「何でそんなことを教えなくちゃいけないですかあ」

「嫌われてるなあ、と思いながらももう一度聞く。」

「で、きりとの場所を調べてほしいんだ」

「現在、ちづるとは別行動だ。ちづるは、適当に校外を歩き回っている。僕は何となくさいかを頼ることにした。」

「どうしてさいかが教えなくちゃいけないですかあ?」

「いや、きりとが見つからないと……」

「試合放棄でもしたんじゃないですかあ?」

「そんなことはない。道場破りをしたのはきりとだし、あいつにはあいつなりにプライドがあるし……」

「何でそんなこと言えるんですか」

「さいかの態度が豹変した。いつもの「ですよ」や「ですかあ」といったかわいらしい口調とは明らかに異なっているのがわかる。」

「それは、僕はきりとの親友だから……」

「馬鹿じゃないですか。あいつの事を何も知らないくせに、よく親友とか言えますね」

「何を言つて……」

「それはこちらのセリフです。親友なんて形だけです。中身なんて何もないはずですよ」

さいかは、きりとに何か恨みでもあるのだろうか。でも、そうだったとしてもそうじゃないとしても、酷い言いようだ。

「ちよっとおかしいよ、さいか。どうしたの」

「さいかのことを全てわかったように言わないで下さい。あなたはいつもそうです。他人の全てを理解しているような素振りをして、実際は何も知らない。胸くそ悪いとしか言えません。さいかはあなたのような人間が大嫌いなんです。ただ綺麗事をならべて、人望を集めているような人間です。いいですか」

言い返せない。さいかの理屈（？）も外れてはいない。

「さいかつ」

だけど、一方的に言われている自分は嫌だ。多分これもさいかの言う「綺麗事」なのかもしれないけれど。

「何ですか。さいかはあなたと話したくありません。では」

その言葉を聞いて僕は、気づいた。さいかは隠し事をしているんじゃないか、何かを訴えているんじゃないか。そんなことを考えているうちに、さいかはもう中庭からいなくなってしまった。

頼みの綱のさいかも手を貸してくれない。僕は落胆してベンチに座った。さあ、どうやってきりとを探すか。この七川学園のある場所は観光地であり、路地が網の目のように張り巡らされている。校外にはいないというヒントのみで一人の人間を捜すのは至難の業だ。第一、この街にいるとは断定できない。この街にやってきて二ヶ月も経たない僕は土地勘がない。

「はあ……」

携帯電話というものがあるが、確かきりとは「俺は公衆電話の気配がわかるのさ。公衆電話が俺を呼んでいる。俺は分かる。公衆電話の訴えたいことを。」携帯電話より、ボクを使って。ボクだってまだ現役だから、ねえボクを使って『そう言っているに違いない！』と深夜一時に叫びだして寮内を駆け抜けた。僕がこっそりその後を追ったところ、寮内の公衆電話に顔をこすりつけ、「公衆電話ちゃん」と変なエロい声を出した後に自分の携帯電話を水に沈め、部

屋に戻って窓から外に向かって投げ捨てた、という行動が僕の記憶の中に残っているから携帯電話に電話をしても無駄だと思われる。なんという資源の無駄。それも今日のことからよく覚えている。四時間しか寝てないんだから。これだけの睡眠時間でよくここまで行動できたなあ、僕。

「ふあああ」

僕は無意識に大あくびをし、ベンチに横になり、目蓋を閉じた。少しだけ寝かせてもらおう。だが僕の幸せな時間を木っ端微塵に破壊したのは携帯電話の着信音だった。それもいつものプルルルというデフォルトな着信音ではなく、大音量のハワイアンなミュージックだ。

誰だよ、と思いながら通話を始める。

「はい、もしもし。やくですけど」

画面に映される通話相手の名前。そこには、僕の弟である人物、万里の名前が存在した。

『兄さん、何かアンタの友達を名乗る人物がいるんだけど』

何ですと？

「名前は？」

『きりちゃん仮面』

きりとの確立が高いが、どうして僕の弟の元へ？

「ちなみに顔は？」

『アホ面』

この弟、性格悪いな。兄のことを「アンタ」だの、年上を敬う姿勢がないのも無理はない。万里とは昔はよく二人で遊んだものだが、僕が誘拐されてからきつとひどい教育を受けたに違いない。僕が受けるはずだった、スパルタな教育を。国際的にも名の知れる、

木瀬家の跡取り息子として恥をかかぬようにと。

そして、僕が戻ってきたものだから最悪だ。僕の実家、木瀬家は

世界各国に鉱山を持ち、石油王としても名を馳せる木瀬コーポレーションだ。その社長は、木瀬家の長男が就任することになっている。だがその長男が死亡・失踪した場合は、その弟。だが、失踪し、戻ってきた場合はどうなるか。その場合は、戻ってきた兄が社長として就任。なんて酷い仕組みだろう。ずっと僕の代わりにつらい思いをしてきた万里が可愛そうだ。帰ってきて早々そんな話を聞かされ、僕はとつさに「万里はどうなる！」と言ったものの、万里は「同情なんていらないよ」という反応だった。それから特に万里とは話していない。

『で、どうする？このカス』

「つか、今どこにいるの！」

『七川フラワーガーデン』

七川フラワーガーデン。僕は聞いたことがある。七川学園の元である七川グループが経営する巨大公園だ。しかも学園とそう遠くはない。

『で、どうすればいい？このゴミ』

「ゴミじゃないから」

『んじゃ、真理奈に取り次ぐから』

真理奈？何だって。妹の真理奈もいるの。嘘だよね。あいつにくっつかれたら三時間は離れられない。さらに語尾があらしとかぶるさあどうしよう。きりとを迎えに行くには真理奈のいる七川フラワーガーデンへ行かなくてはいけない。真理奈を振り切る方法がわからない。それなりの対策を練らなければいけないし……

『お兄さまあーん、あたくし真理奈はお兄さまがいない五日間、退屈で退屈で死にそうでしたわ！』

携帯電話から末の妹、真理奈の声が響く。

『本日は木瀬家がフラワーガーデンを貸し切っていますの。職員でさえいない状態ですわよ。お兄さまもいらっしゃいな。そんな用件でお電話したはずですわ』

用件はきりとの事じゃなかったのか。

「で、あの僕の友達を名乗るヤツは？」

『あのおサルさんのことですか？アレなら万里兄さまのSPが捕獲して動物園へ帰すところですよ』

アホ面↓カス↓ゴミ↓おサルさん、か。ゴミよりかはマシなのか
もしれない。だが、

扱いが本当に動物だ。

「アレ、れっきとしたホモサピエンスだから」

『でもおサルさんに違いはないですよわね』

「その言葉は、自分もおサルさんという意味だから」

僕がそう言つと真理奈はしばらく黙りこくつた。

「とりあえず、迎えに行くよ。きりとを連れ戻したらすぐ帰るから」

『このおサルさん、お兄さまのペットですか？』

さっきの言葉を聞いていなかったのか、この妹は。

「うん、友達だよ」

『なんていうことでしょう。すぐに最高級のバナナを準備いたしましたわ！』

「いいや、ペットじゃなくて人間だから、スパゲティでも食べさせて」

『そうですわね。サルは雑食性でしたわね』

相変わらずサル扱い。人間とはつきり言ったのに……

『ああ、早く来ていただけじゃないかしら。真理奈はお兄さまの顔を見たくてたまりませんのよ。写真じゃ我慢できない、リアルじゃないと意味がありませんわ』

このブラザーコンプレックスめ。万里じゃ駄目なのか。

「じゃあ、準備したら行くから」

『いまリムジンを派遣いたしましたわ。SPも何人かおられますので、校門前でお待ち下さいな』

何だと。対策を練らなくては。

「うん、じゃあね」

『この季節、花がとても美しいですわ。さらに、お兄さまを待つて

いる方もいますのよ。では、ごきげんよう』

プツンと通話が終了。僕を待っている人って誰だろう。さあ、どうしようか。対真理奈用の作戦は何一つ無いぞ。僕はベンチに横たわる。

「どうしたんだ、そんな顔して」

目を開ければいつの間にかちづるが僕をのぞき込んでいるではないか。

「ああ、ちづるか。ねえ、聞いてよ」

「何だ？」

「もしも自分にベタ惚れの異性がいて、しつこくつきまとうてきたらどうする？」

「殴る」

なんて女らしくない答えだろう。

「にしても、何だ。また『もしも』の話か」

「いや、本当の話をアレンジしただけ」

「本当か。で、そのやくにベタ惚れの女性というのは誰だ」

相変わらず無表情。だが、その裏に好奇心があるように思える。

「妹」

「妹いたのか。初耳だな。で、お前の表情から察すると、『お兄ちゃん大好きな妹がうつとうしい』という相談か？」

「御名答……」

僕はぶっきらぼうに答えた。

「簡単な事さ。彼女でも連れて行ってバカップルっぷりを見せつければいい」

「それだ！」

ベンチから急いで立ち上がる。嘘でもいいから、ちづるを連れていこう。これなら妹を振りきれはるはず。

「何か近所にフラワーガーデンっていうところがあるんだけど、そこを貸し切りにして家族がいるらしいんだ」

「へえ」

「何だか貸し切りなのにきりとがいるらしくって……」

「行こうじゃないか」

僕の手を取るとちづるは話を続ける。

「一度行ってみたかったんだ。貸し切りなら静かだろう。私は静かなところが好きだよ」

「じゃあ、お願いがあるんだ」

「何だ？ 膝枕か？ キスでもいいぞ」

ちづるの考えは僕にはわからないけど、言ってみなくちゃ始まらない。

「僕の彼女のフリをしてもらいたいんだ」

ちづるは、にっこりと笑いうなずいてくれた。

最近、よく笑ってくれる気がするのは僕の気のせいだろうか。

俺はわずかな光の射す、じめじめした部屋に一人座っている。たまに食事であるパンが運ばれてくるが、食べる気にもなれない。ただ、後悔の念が俺を襲う。今の俺には何もできない。償いでさえも、助けを求めることもできやしない……………

第五話 もしもの法則（後書き）

鰻河です。

すいません、また新キャラです。

やくの家庭事情とかいろいろとドロツドロなんですけれど、読んでいただきありがとうございます。

続きも読んでいただけたらありがたいです！

読んでくださった方ホントにありがとうございます！

第六話 真つ赤なお花が咲きましょう（前書き）

厨二展開上等なこの作品も第六話！

やくの妹と弟、さらに親父まで参上した上に、

え？ 婚約者？

そんなドッキリな展開にやくは、必殺技を発動する……のか？

第六話 真っ赤なお花が咲きましょう

校門前には早くも黒いリムジンがあり、三人のSPが周辺の人々の視線を買っていた。

「坊ちゃん、その方は？」

黒スーツにサングラス。真理奈が派遣したSPだ。

「坊ちゃんと呼ばれているのか、やく」

「小娘、坊ちゃんを呼び捨てにするとはいいい度胸だ！」

SPがちづるに向かって戦闘態勢をとっている。危ない、やめてくれ。たかが女子高生となめちゃいけない。この場にいる三人のSPはきつとスゴ腕なのかもしれないけど、ちづるに勝てるとは思えない。

「というか、坊ちゃんという呼び方はやめてくれないかな？」

「それはいくら坊ちゃんの頼みといえど、成道殿から、坊ちゃんと呼ぶように言われていますので」

あの父親め。遊び半分に違いない。

「まあ、早く行こうではないか。試合なら明日と話をつけてきたからな。じっくり花見ができる」

ちづるはリュックサックからガイドブックを取り出し、花見ガイドのページを見せる。

「七川フラワーガーデンはこの時期、ソメイヨシノが綺麗というらしいじゃないか。生まれてはじめての真面目な花見をお前とできるのは、私の一生の思い出になる」

「ちよつと待て。坊ちゃん、少しこちらへ」

僕はSPの一人にリムジンの方へ寄せられる。

「あの小娘誰なんですか」

「……彼女」

おどおどしながらも答えると、SPは驚愕の表情で、僕とちづるを順番にチラチラ見る。当たり前前の反応と言えば当たり前前だけ。

「坊ちゃん、脅されて付き合ってるんですね」

「いや、僕から」

そう答えると今度は一人ふらついた。

「坊ちゃん、よくお聞き下さい」

「はあ」

「フラワーガーデンには坊ちゃんの婚約者がいるんですよ」

……え？知らないよ、僕初耳だよ。フィアンセなんて知らない。

「どうするんですか、白石グループの令嬢ですよ」

白石グループ、それは木瀬コーポレーションに並ぶ国際的にも有名な会社だ。その婚約、断ったら失礼すぎる。だが、僕はちづるとカップルでいられるこの日がとても幸福で、ずっとこのままだったらしい、と思う。だから、口に出してしまった。

「ほっとけばいいんじゃないかな」

ちづるはガイドブックを眺めていて、こちらのことは気がつかないようだ。

「なんて事を言うんですか」

「うるさい。それより早くしてくれないか。本人には僕が言うから、つい強気になってしまったが、こうじゃないと相手は退いてくれないだろう。」

「はっ」

「小むす…お嬢さん、どうぞ」

ちづるはその言葉を聞くと「ありがとう」と一声かけてからリムジンに乗り込む。

「リムジンって本当に広いな。まさか本当に乗れる日が来るとはな」
続いて僕、そしてSPが二人乗り込み、もう一人は運転手席へ。
「そうだ」

隣に座るちづるがつぶやいた。その時にエンジン音がかかり、車が動き出す。

「膝枕をしてやろう」

「え、何で？」

「理由なんかいらぬ。彼女が彼氏に膝枕するのは普通だろう」

「ああ、うん。じゃあおねがい」

僕は横になり、ちづるの膝に頭を置いた。

（そういえば今日、横になる回数が多いな）

「眠いだろう。きりとが睡眠妨害をしたせいで」

「え、何でわかるの？」

「風の噂だ」

そつと僕の髪を梳かすように手が触れた。

「夢だったんだ」

ちづるの口から、言葉がこぼれた。

「少女漫画幸せそうな恋愛シーンを見るたびに私にもこんなことができる日が来るだろうか、そんなことを思っていたよ。まさかこんなにも早いとは思っていなかったけど」

そして顔を赤く染めながら言う。

「こんなことを言うのはアレかもしれないが」

「ん？」

「何か、形に残るサプライズをしてくれないかな？」

形に残るサプライズ、かあ。

「考えておくよ」

我ながらあいまいな返事だ。

その後は、特に何も話すこともなく時間が過ぎていった。カーテンがあるから外の景色はわからない。だが、山道を走っていることはわかる。

「坊ちゃん、まもなく到着です」

「あ、うん」「もう到着なのか。はあ」

ちづるは不満そうにため息をついた。

「どうして？」

「本当に馬鹿だな、お前は」

「坊ちゃんなんて事を！今すぐ別れた方がいいです！」

「何を言うかSP。私ほどやくにぴったりの彼女はいないぞ」

確かにそうだろうけど、まあSPの言うことは普通の人間の考えだ。こんなにも羞恥心の少ない女の子なんて見たことないだろうし、そんな娘を彼女にしたらその彼氏が色々大変だからね。

「まあいいさ。膝枕ならベンチがあればできる」

膝枕以外にやることはないのだろうか。にしても、彼女の演技方が上手い。ちよつと変わった彼女だけでも、これだったら違和感もないと思う。騙しきれんんじゃないか。

「桜を見て、きりとを連れてすぐ帰ろう」

「うん」

僕はまだ知らなかった。七川フラワーガーデンが戦場になることを……

正面ゲートをくぐれば、そこはもうフラワーガーデンの名に恥じない立派な巨大庭園が広がっていた。そして、

「お兄さまぁーん、真理奈はこの瞬間を楽しみにしていましたわぁ」

頭の側面にくつつく縦ロール（あれは地毛らしい）の少女、木瀬真理奈が、予想通り僕に向かって走ってくる。

「やあ、真理奈、久しぶり……」

それでもって、僕の体にくつついて、胸元に顔をスリスリ。やっぱりこの子は苦手だ。

「相変わらずお兄さま、いい匂いがしますわね」

あれ、昨日お風呂に入ってたっけ。

「あたくし、そんなお兄さまが大好きですの……」

真理奈の言葉が途切れた。

「うむ、すばらしい景色だな。やはり花は春に限る」

僕より少し遅れて正面ゲートをくぐってきたちづるに気づいたからだろう。

「誰ですよ、あなた」

「人に名前を聞くときはまず自分から名乗るべきじゃないかな」

「そうですね。あたくしは木瀬真理奈。木瀬やくの妹ですわ」

「そうか」と一言つぶやくと、真理奈の頭に手を当て、なで始める。このままだといつか僕に被害が来るからとりあえず少し離れたベンチへ逃げるとしよう。

「礼儀正しい妹だな、やく。私にもこの子と同じくらいの妹がいるんだが、乱暴者だよ」

妹いたのか。

「一般常識ですわ。それで、あなたは？」

「おっと、失礼。名乗るのを忘れてしまったよ」

ちづるの作戦は僕には目に見えている。真理奈に自分を信じさせて、後から彼女と言っても受け入れてくれるように、とまずは仲良くなる作戦か。

「私の名前は松崎千鶴。千の鶴と書いてちづるだ」

なるほど、ちづるの本名は松崎千鶴なのか。まあ、こんな正式っぽい場であの名前を出すのも気まずいからね。

「いい名前ですわね、あたくしの名前の意味は真実、という意味ですわ」

「こう褒めてもらうのははじめてだ。感謝する」

「で、お兄さまの何ですの？」

「げ。こんなにも早くその質問が来るとは。」

「やくのクラスメイトだ」

「そうですね。お兄さまとは仲がいいんですわね。これからよろしく願いますわ」

だが、僕が安堵したのもつかの間だった。

「ああ、私は彼女だからな。ちなみに告白はやくからだぞ」

瞬間、真理奈の目つきが変わった。よかった、離れていて。

「ジャスティーズ、つまみ出さない」

「ハッ」

SP五人出動。ん？アレは……木瀬家最強SP軍団ジャスティーズじゃないか！まさかジャスティーズが全員正面ゲートにいるとは。

気づかなかった僕も不覚だ。ネーミングセンスはアレだけど、腕は一流。さすがのちづるでも厳しいんじゃないか。

「ちづる！危険だ！」

いつのまにか僕の周辺にも何人かSPがいる。

「私を信じる。私はそこらの無能なSP共の数千倍イケてるからな」
自信過剰もいいところだ。このジャスティーズは一人であらしくらいの戦闘力はある。それが五人。

「そうだ。やく。おまえの好みの女の子はどんなタイプだ？」

「そりゃ、僕を特別扱いしない子に決まっているじゃないか」

「よかった。ここで『弱気で病弱なかわいい女の子』とでも答えていたら私はこのマグナムをおまえの頭に向けて放っていたぞ」

いつの間にかマグナムををかまえている。しかも両手に一丁ずつ。マグナムは両手で打つものだよ。

「なっ、警察を呼ぶぞ！」「この娘、何者だ！」「目指すはミッシェンコンプリートだ。いいか」「抵抗するものならば、そのお命頂戴する！」「女の子に乱暴はしたくない。おとなしく退いてくれな
いか」

ジャスティーズでもこの状況はびっくりだろう。だけど、アレは左手がエアガン。そして右手のマグナムは、いつしか僕が改造を施した無駄に殺人能力の高い実銃だ。

「お、その目は気づいたらしいな」

「当たり前だよ。銃口の近くに大きい傷があるからね。自分が付けた傷を忘れるはずじゃないか」

ちづるも知っていたようだ。あれは僕とちづるの思い出の品でもあるからだ。

「撃っちゃだめだよ」

「わかってるさ。まあ、死にそうになったら躊躇なく撃つがな」

つまり、左手のエアガンだけで戦うということだ。

「小娘！撃つぞ！」

「ふむ、それはピストルか。当たり所が悪かったら死ぬなあ…」

ピストル所持はまずいでしょ。ピストル所持は。どうして、僕の周りには銃刀法違反者ばかりいるんだ。

「今からでも遅くない。携帯電話で警察呼んでもいいんだぞ」

通常なら、もうこの時間に警察がいてもおかしくない。だが、いないということは誰も通報していないということ。それはなぜか。実銃所持者がいるから、呼んだら捕まってしまう。

「……っ」

「まあ、私も馬鹿ではない。警察が来たら困るのは一緒だからな。ポリ公なしでいこうじゃないか」

ちづるが一步、5人でかたまるジャスティーズに近づいた。

「ジャスティーズ、か。ジャスティーズの意味は正義だっけ。正義なら来い。正義は悪を倒すのだろう?」

ゆっくり歩きながら言うと、左手に持つエアガンをジャスティーズの一人に向けた。

「はあ、こんな気持ちになったのは久しぶりだよ。私から怯える人間、私から逃げようとする人間。ゾクゾクするねえ。でも、あいつには及ばない。あいつほど殺しがいいのある人間はいないだろうよ」

ある程度近づくとも今度は右手の実銃を他の一人に向けた。

「さあ、最初に死ぬのは誰だ」

五人横一列に並ぶジャスティーズを右から順に見つめてゆく。

「ちづる！冷静に！」

「何を言う。私はいつも冷静だ」

いや、ちがう。ずっと違っていたんだ。彼女は冷静じゃなかったんだ。暴れたい、狂いたい、殺したい、そんな気持ちを内に秘めていた。そしてそれを「何か」で抑えることで偽りの冷静さを保っていた。静寂なる狂気、それがちづるの本質ではないのか。まだ、ちづるの心の中には狂うことの快感と暴れることの喜びが残っていたのだ。

もしもそうだとしたら、他の殺人鬼、暗殺者も何か偽りがあるんじゃないか。クールなしな装っているだけなのかもしれない。アホ

なきりと、無駄に元気なさつきも、高飛車なあらしも、強さを誇示するきょうこでさえ、ただ演じているだけじゃないのか。あの、非情で攻撃的なさいかは何なのか。やっぱり、何か重要なことを知っている。

スパアン

ちづるの居る方向から銃声が聞こえた。

「ちづる！」

撃たれたのはどちらか。それを理解するまでに時間がかかった。あまりにも不条理だからだ。ジャステイズの内二人人が倒れていて、ちづるは血を流して倒れているのだ。銃声は一発だけだった。一発でこれだけの人数が倒れているとは考えがたい。だが、その謎を解くのは少し考えれば簡単だった。ちづるが倒れているのはジャステイズのすぐそば。

そしてちづるだけが血を流して倒れているのだ。撃たれたのはちづる。そして、倒れているジャステイズの二人は血を一滴も流していない。それどころか足をおさえている。まるで足の骨が折れたかのように。ピストルを握っているのは一番左のジャステイズの男つまり、ちづるは突如、右から順に肉弾戦を挑み二人の足の骨を粉碎、三人目狙おうとしたところに銃で撃たれたということになる。僕は、とまどうSPを押し退けてちづるに近づいた。

「大丈夫かつ、どこに……」

僕は血の出所を見て絶望した。左胸だ。左胸から血が出ている。

「誰か！救急車を！」

だが、僕の叫びに帰ってきたのはあまりにも非情な言葉だった。

「お兄さま、その方はもう助かりませんわ。静かに見送ってあげるべきですわ」

真理奈は得意のポーカーフェイスで言う。内心、悲しんでいるのか笑っているのかはわからない。

「真理奈」

僕はちづるの右手に握られているマグナムを取り上げ、真理奈に

向けた。もちろん両手構えだ。

「何をなさいますの」

「警察を呼ぶんだ」

僕は真理奈に近づき、銃口を頭にあててやった。

「お兄さま、あの女とあたたくし、どちらが大切ですか？」

「え？」

いきなり何を言いはじめるんだ。

「答えによつては呼んで差し上げますわ」

「答えたら、真理奈は悲しむと思うよ」

「さつさと答えなさいな」

答えは決まっている。

「ちづるに決まっているさ」

「そうですね」

残念そうにつぶやくき、さらにこう言う。

「お父様」

僕は左に見える食堂から現れる大柄な男を発見し、すぐさま睨む。

「父さん」

男の名は木瀬成道。僕の父親だ。

「よるひさ」

父さんが呼んだ名は僕の本名だ。夜久、でよるひさだ。だが、みんな『よるひさ』と呼ぶのはめんどくさいので『やく』と呼んでいる。僕だつて『よるひさ』という名前は気に入らないし、十一年間、『やく』で過ごしてきたから。

「面白いじゃないか、その娘。だがな、政略結婚を申し込まれてしまったのでな」

父さんの後ろから現れたのは白い和服を身に纏う僕と同じくらいの美少女。

「白石天音さんだ。お前の婚約者だぞ」

僕は親に強いられる人生を送らなければいけないのか。恋でさえ、自由に行えないのか。

僕はちづると出会えなかったらそんな人生を歩んでいたかもしれない。でも、教えてくれた。自由を、意志を。

「初めまして、白石天音です。これからよろしくお願いします。やさんのことは父や母から、いい人と聞いています」

だから、僕は答えよう。

「悪いけど」

—— そんな弱気じゃ何もできないだろ ——

「僕は」

—— 他人を説き伏せるには傷つけるぐらいの言葉を使え ——

「君には興味がない」

これは、ちづるが僕に教えてくれた自分の意志を貫き通すための言葉のテクニクだ。

「やく！」

父さんが一喝しに歩いてくる。

「政略結婚？ いつの時代だよ」

「どうしてお前はっ」

「何を言うんだ。僕には魅力の欠片も感じられないよ」

これもちづるが教えてくれた。

「そんな息子に育ってしまったんだ！」

そして、これは本音だ。

「父さんと再会してからまだ一年も経ってないのにね」

僕は顔を怒りの色に染める父さんを鼻で笑ってやった。

「白石さんが、固まっているだろうが！」

「だから、どうしてその人を気遣わなくちゃいけないんだい」

「女の子を気遣うのは紳士として当たり前のことだ！」

この男は馬鹿だ。言っていることと行動が矛盾している。

「じゃあ、ちづるを助けてよ」

「くっ……」

「あれ？」

一定のリズムで鳴り響くサイレンの音。次第に近づいてくる。ピュ

ーウピューウという音とピーポーピーポーという音。後者はきつと救急車。なら前者は、パトカー。

「まずい！」

ちづるのマグナムをブレザーの内ポケットにしまい、叫んだ。

「きりと！」

どこかにいるはずだ。こんな騒ぎがあれば、どこかに隠れているはず。

「ひゅーう」

いた。食堂の上でサルのように座っている一人の男。きりとである。きりとは食堂から宙返りしてやくの元に下りてくる。恐ろしい身体能力だ。

「ちづるなら救急車に任せるんだな」

僕はとまどいながらも頷く。

「また、ポリ公に何か問われると今度こそ停学だぜ」

「確かに」

「何も知らないフリして部屋でのんびりババ抜きすっか」

僕に手を伸ばすきりと。その手を取る僕。

ああ、一番冷静なのはきりとかもしれない。こんな血みどろなフラワーガーデンでも、いつも通りだ。

「兄さん」

背後から声が聞こえた。

「万里」

「兄さんは、幸せ？」

「ああ、今はすごいシヨックだけど、日常は楽しいよ」

「そうか、でも覚えておいて」

万里は僕を恨むかのように言った。

「今の幸福は誰かの不幸の上に成り立っているということ」

その声は悲しみも混ざっていた。でも僕は、万里の顔をよく見ないうちにきりとに手を引かれてフラワーガーデンの奥へ進む。

ごめんなさい、兄さん。僕は、帰ってきた兄さんに冷たくあたっ
ていました。兄さんは卒業式の日、動かなくなってしまうした。
その日、ボクは兄さんに言おうと思っていた言葉がありました。言
えなくて、ごめんなさい。本当にごめんなさい……………

第六話 真っ赤なお花が咲きましょう（後書き）

鰻河です。

毎回毎回めんどくさいところで終わらせてすみません。

でもきりのいいところが見つからないんですorz

一読ありがとうございます^^

第七話 アンティークハウスと死神の間（前書き）

急激なシリアス展開。

唐突なる新キャラクター。

学園なのにどこか違う。

ひび割れる世界。

そんな世界は、死神の手の内。

第七話 アンティークハウスと死神の間

きりと連れられた場所はあまりにも神秘的な場所だった。桜の花びらの舞う、緑に生い茂る木々に囲まれた野原、そこに人為的に建造されたような洋館。その洋館はあまりにも古びていて最近造られた訳じゃないようだ。考えてみるとこの洋館の周辺を花々で飾った、というのが正しいかもしれない。

「これは？」

「秘密基地だ」

胸を張ってそう言うが、秘密基地のはずがない。そもそもここは七川フラワーガーデンから五分ほど走った場所にある。

「フラワーガーデンじゃないぜ。といつてもすぐ隣だが」

桜の花びらはきつとフラワーガーデンのものだ。それが風によって飛んできたのだろう。

「で、ここまでの道のりがわからないんだけど」

「フラワーガーデンの一番奥に、柵があるんだ」

「いあ、奥じゃなくてもあると思うけど」

「百聞は一見しかず、だっけか？まあ、聞くより見た方が早い」

きりと指さす、僕らが走ってきた方向には、綺麗な白い柵が、見事にねじ曲げられていた。ねじ曲げられた柵の間は人間が簡単に入れるくらいの大きさ。

「気づかなかったよ」

「バカだな。ほれ、行くぞ」

「どこに！」

「秘密基地だが、何か」

「あの洋館？」

「イエス。きりと様のアンティークハウスだが、何か」

「マジで？」

「マジだが、何か」

さつきから何か何かってうるさいなあ。

「アンティークハウスって……」

「昔々」

いきなり話し出すきりと。僕はあ然としながらもそれを聞く。

「あるところに馬鹿なガキがいました」

昔話、か。

「馬鹿なガキは裏の山の探検が大好きでした」

よくある話だ。

「ある日、馬鹿なガキは山の中に洋館を見つけました」

というかガキという呼び方をどうにかしてほしい。

「その家には鍵がかかっていませんでした。だからガキはその家に入っていました」

不法侵入だ！だが声には出さない。空気につつこんじゃいけない気がしたから。

「中は本と中世をイメージしたものであふれていました」

きりとは語りながら洋館に近づいていく。

「そして、フランス人形のような格好をした女の子が本を読んでいました」

ドアノブに手をかける。

「馬鹿なガキはフランス人形の少女に言いました。『君は誰だい』」

女の子は答えます。『あなたこそだあれ？お客さん？』ガキは『コイツ、頭がおかしいな』と思いました」

作り話だろう。にしては現実味がある。

「すると女の子は洋館の奥に消えていきました。ガキも興味を持ってついていきました。女の子がいたのはキッチンでした。そこで水筒からお茶をコップに注いでいました。ガキは女の子に聞きました。『君、名前は？』女の子は答えます。『マリーアントワネットよ。』

マリーと呼んでね』やっぱりガキは『コイツ、頭がおかしいな』と
思いました」

さつきと行動は違うけれど、何となく同じようなことを繰り返している。

「女の子は二人分のコップを持って違う部屋へ移動します。ガキもついていきます。女の子は移動先の部屋のイスに座りました。そして、ガキに正面のイスに座るよう促しました。ガキはおろおろしながらイスに座りました。そして目の前に出されるコップ。ガキは女の子に聞きます。『君、いい加減名前くらい教えてよ』女の子はコップのお茶を静に飲み、答えます。『マリーアントワネットよ。マリーと呼んでね』女の子はどこかズレていました。ついにガキは怒ってしまいました。『それは聞いたよ！マリーアントワネットなんて名前の人、日本人にいるわけじゃないか！』女の子はそんな怒りにも笑って答えます。『名前なんて自分でかってにつけちゃえばいいのよ』と」

きりとはドアノブをひねりドアを開いた。鍵はかかっていないようだ。きりとが僕が来る前に開けておいたのか、もともとかかっていなかったのかはわからない。

「ガキはまた質問をします。『本当の名前は？』女の子は言います。『教えないよ。本当の名前嫌いだもん』ガキはそれを聞くと残念そうな顔をして言います。『じゃあ、俺は』女の子は自分の名前を名乗ろうとするガキを制して言います。『あなたは、ルイね。あたしはマリーアントワネット』今度は不満そうな顔をするガキを見て、女の子は話を続けます。『本当の名前を知ってしまうと、つまらないでしょ』どこがつまらないのかガキにはわかりませんでした。ガキはお茶を飲み干し、イスから立ち上がり、帰ろうとしました」

洋館の中はアンティークグッズでいっぱいだった。もしかしたらきりとの語っている物語は、この洋館をイメージした話なのかもしれない。

「そんなガキに女の子は言いました。『また明日も来てね。ルイ』

と、合い鍵を渡されたのです」

きりとは土足で上がりこむなり、床に散乱した飾り物を片付けつつ、窓際の本棚に歩いてゆく。

「続き聞きたいか？」

「あーうん」

僕は曖昧に返事をする。と洋館の階段に腰掛けた。

「ガキはそれから学校が休みの日は毎日その洋館に来るようにになりました。ガキと女の子が出会ってから一ヶ月経った日のことでした」

きりとはその本棚をじつと眺めていた。

「女の子は来なくなりました。ガキはずっと待っていました。しかし来ませんでした。心配になってしまいました。だから、ずつと行つてはいけないと言われていた、二階へ足を運びました」

本棚の一番下に目当ての本があつたらしくその本を取り出すと、本についたほこりをパンパンとはらい中を開く。

「ガキは二階の書斎へ行きました。そして、はじめて恐ろしいものを見ました。書斎には血が飛び散っていたのです。書斎のイスに座っていたのは白骨化した人の死体でした。カラカラに干からびていて骸骨としか言いようがありませんでした。ガキは合い鍵を持って逃げました」

きりとは本をゆっくり閉じて、やくの隣に座った。

「まさか、それ、フィクションだね？」

「さーね。確かめて来いよ」

そう言われて、階段を上り、書斎と書かれた看板のひっかかった部屋の扉を開く。中にあるものが気になった。ただの興味だ。だけど、胸の鼓動が高鳴る。

「！」

目の前に誰かいた。

「なっ」

ショートヘアーの女子高生くらいの少女は驚いた声をあげ、窓から逃げていく。顔は見えなかったが、相当の身体能力だと思う。

「そのガキ、どうなったと思う？」

背後からきりとの声がした。

「てゆーか、さっきのは誰？」

「住人じゃね？」

「住人って、住んでる人いるのかよ！」

「いいや、もう廃屋に近いが、一応この家には所有者がいるらしい」
「所有者って…さっきの人が所有者なら話をしなくちゃ…」

きりとは窓の外を指さす。いつの間にか空はだいたい色に染まっていたのだ。

「夕方だぜ。行こうか。きっと近くの救急病院だ」

「ちづるが心配だ」

どうしてすぐに救急病院へ行かなかったのかは、察するとして、書斎のイスには誰もいない。きつと、作り話だろう。にしても、きりとにあんなに不思議な話を作る脳なんてあったかな……

僕は病院のエントランスで、事務の女性に、ちづるについて聞いた。

「松崎さんですか、少しお待ち下さい」

お願いします。神様、ちづるを助けて下さい。

「松崎千鶴さんの御家族の方でしょうか」

「いえ、友人です」

きりとがさつと言う。何だか今のきりとはすごく頼りがいがある。
「そうですか。現在、面会遮断の状態ですので……………」

「っ……………」

ふと頭痛がし、僕はその場でうずくまり、倒れた。

「やく！やく！どうしたんだ！」

きりとの声はだんだん小さくなってゆく。目の前がフェードアウトしてゆき、僕は眠るような感覚に陥ってしまった。

——キミは、信じるかい

気づけば僕は知らない場所に立っていた。

——世界の不安定さを

耳に響く誰かの声。周囲には誰もいない。ただ、ドーム状の天井を支える柱の他には何もなく、海が存在した。

——いいことだらけの偽りの世界を

「誰だ…」

僕はその声に答える。

——ボクは、サイカイ

「サイ…カイ？」

視界を霧が埋め尽くす。が、その霧はすぐに晴れ、霧が現れる前にはいなかった誰かが存在していた。

「ボクはサイカイ」

サイカイと名乗った、白い布を身に纏い、ぶかぶかの黒いズボンを履いた少年は言う。

「誰なんだい」

「いつかわかることさ」

その雰囲気は、何となく万里に似ている。

「見た？」

「何を？」

天井には六枚の肖像画と、他の肖像画と同じ額縁に入れられた真っ黒な絵。肖像画に描かれた人物の何人かは見覚えがあった。

「あれは、しな？」

僕から見て正面の肖像画には、長い髪の美少女。だが、その顔は今より少し大人びている。

「そつだ。まあ、二年ほど後のことだが」

その右隣の肖像画はボブカットにドクロのピアスをした美女。

「あれは、誰？」

僕はサイカイに聞いた。

「いずれわかる事さ」

そのまた右隣はツインテール。これはすぐにわかった。さつきだ。

だが、しなと同じく少しだけ大人びている上、表情がいつもの明るい表情ではなかった。どこか、悲しい顔をした、見たことないさつきの表情だった。

「さつき、だよね？」

確認のため、聞いてみる。

「さつき、か。それも正解かもしれないな」

さつきらしき人物の隣は、口元のみ見えるヘルメットをかぶった人物。そして首から肩にかけては鉄板のようなものを纏っていた。まるで、サイボーグのようだ。

「何、コレ」

「人間だ」

「ウソだよ、人間のはずがない」

「人間であり、人間でない存在さ」

また、しなの肖像画に視点を戻し、そこから左に肖像画を見る。

しなの左隣には、うつろな目をした髪の長さが首くらいの女性。年齢は二十代前半だろう。

「ちづる？」

「そうだ」

肖像画だが、はっきりと感じる、この世への絶望と、絶大な悲しみ。

「何で…」

ちづるはいつも喜ばしいとも悲しいともいえない無表情のはずだが、このちづるの表情は悲しみそのもの。

「どうして」

その左は、前髪のまっすぐそろった、この肖像画の中では一番優しい表情をした女性。なぜか、他の肖像画とは違い胸まで描かれている。その胸の大きさといったら異常。

「誰、さいかな？」

「さあね」

サイカイはぶっきらぼうに答えた。

「にしても、誰だろう」

そして最後の真っ黒な絵。

「これは？」

「考えればわかる事さ」

この肖像画は何を意味しているのか。ちづる、しな、さつき。そうきたら…

「この人達は全員ぼくの周りの人物？」

「いいカンをしているね。では、三つまで質問に答えてやろう」
サイカイはその場にあぐらをかき始めた。

「この人達は僕の周りの人物なんだよね」

「今、一つ消費してしまったぞ」

「え」

「冗談だ。何せ答えていないからな」

冗談で本当によかった。

「君は誰？」

僕はサイカイの正体について尋ねた。

「ボクか。ボクはサイカイ。さっきまで君がいた世界の創造主」

「意味が分からない」

「いつか、また来るときがある。その時に聞いてくれればいい。さ、次の質問は？」

次の質問か。次の質問は…

「あの黒い絵は何？」

「あの黒い絵か。あの黒い絵は、囚人。意味、わかるだろうね」

僕だって馬鹿じゃないさ。

「じゃ、最後。この質問を答えたら、君はしばらくさっきの世界に戻ることになる」

なるほど、質問内容をよく考えろと言う意味か。

「早くしてよ、ボクだって暇じゃないんだ」

そもそも、答えがアバウトとすぎる。囚人って、誰が囚人なんだ。どうして、最後にあんな言葉を付け足したんだ。別の意味が混ざっているのではないか。サイカイは、何が言いたいんだ。

「あのさ、聞いてる？」

「あ、うん。最後の質問は」

正直、あのヘルメットと美女は後にしておいていいと思う。だから、聞く。

「あの、優しそうな女の子は誰なんだ」

「あの子は、ボクの自己判断で消した子」

サイカイは僕がさっきまでいた世界の創造主。さっき、ということとはこの世界はどこなんだ。第一、僕がこうも簡単に世界の創造主に会えるとは思えない。

（いいことだらけの偽りの世界を）

ここにやってきたときに響いたサイカイの言葉を思い出す。偽りの世界ということは、さっきの世界は夢なのか。どうして早く気づかなかったんだ。もう質問できる回数は残っていない。

「さようなら、やく」

サイカイは手を振り、言う。

「不必要な日々は、思い出として脳に刻まれる」

待って。どうやってさっきの世界に戻るんだ。

ガシャン

その時、世界がひび割れた。パラパラと世界の欠片が落ちてゆき、全てが落ちたとき、僕はここに来たときと同じ感覚に襲われた。

第七話 アンティークハウスと死神の間（後書き）

鰻河です。急にシリアスになってすみません。

また次からほのぼの（？）やらせていただきます。

意地悪なサイカイが、個人的に好きです。

第八話 イベント予算は僕のサイフから（前書き）

季節は移ろい、十二月下旬。

突然、ちづるがクリスマス大作戦というベタな作戦名を叫び始めた十二月。やくと、きりとは乗るつもりだったが、さつきとしなのでこぼこコンビは露骨に嫌な顔をしていた。

その昔のクリスマス、事件はあったから。

第八話 イベント予算は僕のサイフから

「雪だ。初雪だな」

やっぱり、気がついたら僕は教室の自分の席に座っていた。目の前にはちづるが弁当を食べている。

「う……」

頭の中に何か流れ込んでくるようだ。

「どうした！」

テストで好成績を残したこと、体育祭、文化祭、詳しくはわからないけど、数々の思い出が脳裏に浮かぶ。

「なんでもないよ」

僕の意志とは関係なく、体が動いた。

「そうか」

流れ込んできたのはサイカイの言ったことと同じだ。不必要と判断された日々の思い出だろう。

「にしても、どうだ？私の手作り弁当は」

あー、目の前の弁当はちづるの手作りなのか。可もなく、不可もなくってところだった。

「あ、うん。おいしいよ」

そう答えると、ちづるはにこっと笑った。

「ちづるっ。ずりーぞ！」

廊下からきょうこ登場。購買で買ってきたらしいコッペパンを片手に僕の隣へやってきてヤンキー座りをし、コッペパンをかじりだす。

「きりとは？」

「きりとか。あいつなら焼きそばパン食ってたぞ」

きりとの道場破りは失敗に終わったっぽい。芝刈り機を目の前にして土下座をした、という馬鹿な負け方だったらしい。

「さつきとしなは？」

「ふあふふいふおふいふあふあら、ふえんふあふいふえふ」

何言ってるのか全くもってわからない。

「下品だぞ、きょうこ」

ごくんと口の中のを飲み込むとききょうこは言い直す。

「さつきとしななら、喧嘩してるつつたんだよ」

「相変わらず理性のない奴らだ」

「ちづるだって、春に左胸に弾丸うけたじゃないか」

「私とて人間だ。完璧じゃないさ」

はっはっは、と笑うちづるは、雪の降る外を眺める。

「そういえば、明日はクリスマスイブだな」

「あ？」

「クリスマスだよ、あの一大イベントの」

「ちづる」

きょうこがちづるをキツと睨んだ。

「クリスマスは祝わないって約束しただろ」

「いや、今年は祝ってみせる。ずっとトラウマに引きずられていて

は親友の私が困ってしまうよ」

「ねえ、ちづる」

僕はちづるを振り向かせる。

「ちづるは、何がしたいの？」

「無論、楽しいスクールライフを目指しているだけだ」

楽しいスクールライフ、か。

「その為には、過去にとらわれず、今を生きなければいけない。な

んとなく格好良く言ってみたぞ」

「どうして、そんなことを？」

「やらなければいけない気がする。それだけだ。みんなが今を生き

れば、楽しいスクールライフがもっと楽しいスクールライフになる

だろう？」

「まあ、そうだけどさあ」

僕がそう答えると、ちづるは、無邪気に笑った。それは、普通の

女の子の笑顔。

「クリスマス大作戦っ」

ちづるは僕ときりとの前でクラッカーを持ちながら大声で言った。
「えー、クリスマス大作戦とは、過去にとらわれず今を生きるためにみんなをなごなごさせるイベントである」

「はい、質問があります」

きりとが挙手した。

「何だ、きりと。文句があるならさっさと見え」
質問って言ったのに。

「クリスマス大作戦の結果何が起こるんですか」

「知らん。宇宙人でも来るんじゃないか」

クリスマス大作戦↓宇宙人飛来。どうしてそうなるかが僕には理解できないや。

「クリスマス大作戦の予算はいくらですか」

「予算？ああ、それならいっぱいあるからな」

ちづるは僕の机の引き出しをあさり、サイフを取り出した。

「ねえ、勝手に他人のサイフから万札を抜かないで」

「別にいいだろ、万札の一枚や二枚」

「よくない！」

非常識すぎる！

「まあ、明日電車に乗って東京へ行こうと思う。帰宅予定時刻は二十五日の午前四時」

ここから東京へ電車で行くのにだいたい一時間くらいかかる。つまり、深夜まで遊んで、眠くなったら帰りましょう、という魂胆か。
「で、目的地は？」

「西京百貨店。あそこはクリスマスセールがやっているんだ」

西京百貨店？まさか、そこは……

「六年前のクリスマス、笹原篤史氏の実の娘であり、私たちと同じ殺人鬼である笹原つぐみが、死亡した場所だ」

そんなところに今更何をしに行くんだ。

「そして、さつきの精神異常が発生した場所だ」

「え？」

初耳だ。さつきに精神異常なんてあったのか。

「さらに、しなに精神異常が発生したのもこの時期、つぐみの死亡時期と重なるって事だ」

きりとが口をはさむ。僕が惚けた顔で聞いているとちづるが氣を使う。

「覚えていないか？」

ええ、知りません。

「まあ六年も経っているんだ。無理もない」

いや。むしろ僕はあの頃ライラのいる関西へ留学っぽいこととしていたから。

「んじゃ昔のさつき、覚えてるか？」

「ああ、何となく。相変わらずツインテだったはず」

「そこじゃなくて性格だ」

そういえば、誘拐されて三年経つまではさつきとしなとはあまり関わったことはなかった。

「さつきは冷酷で高慢、しなはおっとりしていて、殺人を好まなかった」

「今のほぼ正反対だぜ」

今の二人とは大違いだ。そもそもしなが、おっとりしているなんてあり得ない。

「そんな二人が豹変してしまったのは、つぐみの死が関係していると思う。特にしなはつぐみと仲がよかったからな」

そういえば、さつきはつぐみと一緒に仕事をするが多かった

「どうしてつぐみは……」

「さつきの些細な情報ミスさ」

「情報ミス？」

「あの日、さつきとつぐみは、一緒に西京百貨店へ爆弾を仕掛けて

いた。その後、つぐみが爆弾を監視、さつきが遠くから起爆スイッチを押すという役割だった。つぐみとさつきが爆弾を仕掛けたのは、関係者以外立入禁止の六階と店舗である五階をつなぐ階段の裏。そこに西京百貨店を取り締まる社長がやって来たときに起爆する、という作戦だったらしい……」

「何話してるの」

「何って……」

背後にさつきがいた。きりとでさえ、話すのに夢中で気付かなかったのだ。

「いつからいたんだ、さつき」

「答える必要なんてない。そもそも、先に質問したのはあたしだよ」「そうだったな。何を話しているか？クリスマス大作戦についてや」
くに説明してあげていた。これでいいかな？」

一瞬ちづるが、クレームに対応する業者の人に見えてしまった。

「クリスマス大作戦ねえ。クリスマスでも祝うつもり？」

「無論、そのつもりだ。クリスマスに街を練り歩いて、ケーキの食べ歩きをする。楽しそうだろう」

「そりゃ、よかったね。あたしは行かないよ。あんた達みたいに暇じゃないしさ」

さつきはそう吐き捨てると、僕達を冷たい目で見つめ、僕の部屋からつかつかと去っていった。

「あー、どうしようか。さつきとしなの為なのにな。なあ、きりと」

「いや、俺に言われたって困るし」

「まっ、しなでも騙して連れていけば、寂しくなって追ってくるはずさ」

「そうとも思えないけど……」

「来なかったらどんまいだ」

それで終わるのかい。

「とりあえず、きりと。携帯をよこせ」

「どうして自分の携帯を使わないんだ……」

「いやー、一ヶ月五百円までは無料になるサービスを利用しているんだが、あと二十円で五百えん突破しちゃうんだな。五百円を携帯電話の通話料金に使うなんてもったいない」

「はあ」

「五百円あれば何を買えると思う？」

「ワンコイン定食」（僕） 「月刊ラブ・マイ・ボーイ」（きりと）

「おい、やく。遂にきりとがホモに目覚めてしまったぞ」

「今月号は、『底なしの魅力、眼鏡男子』特集で、来月号は『部活に燃える、輝く青春男子』特集なんだぜ」

やけに詳しいな。

「そうそう、これら全てはしな情報だ」

まさか、しな……BL趣味だったのか。

「しなだけ、一人別室だからな。そこまで知らなかったよ。というか、どうしてそんなことをきりとが知っているんだ」

「ある日、しなが俺に告げたんだった。『きりと、お前は…その…やくを襲ったりしないのか』と」

「ごふっ」

思わず吹いてしまった。

「汚いぞ、やく」

「ごめんごめん」

「そして俺は答えたんだ。『残念だが、俺はそんなことはできない』と」

絶対「いやあ、俺もそうしたいんだけどさ」と言うつもりだった。

「するとしなは『どうして？』と聞いてきたから、今度は具体的に答えたわけだ。『俺はこの学校でも指折りの清純男子で、イケメンだろ。学校中の乙女達が俺に憧れを抱いている。校内でも三大イケメンの一人に入る男子生徒が寮内、もしくは校内で男子生徒にセクシャルハラスメントをして、他の生徒に見られたら、俺の名前は地に落ち、乙女達からの熱い視線が変態を見るような視線に変わって

しまうだろ』ってな」

「それってただのナルシストだから」

「第一、お前の名声は既に、最底辺だ。さらにお前が廊下を歩くと『きりと菌』がまき散らされるという噂まであるんだぞ」

きりと菌って何。僕はぽかんとした顔でちづるを見た。

「何だ、やく。きりと菌も知らないのか。辞書で調べれば出ると思うんだが……」

多分出ない。いや、確実に出ない。

「ちなみに辞書って……」

「ちづる様万々歳辞典」

「正式名称は？」

「ちづる脳内辞典」

つまり、形としてはこの世に存在しないわけだ。

「まあ、きりと菌というものは実在しないがな」

「……」

全て嘘っぱちだったのか。信じかけた僕が馬鹿だった。

「きりと、携帯電話をよこせ」

それはきりとに言うもんじゃないと思うんだよね。

「馬鹿なことを言っな！」

やっぱり。

「なぜだ、きりと」

「公衆電話を使え」

「公衆電話だと。あんなものつくに時代遅れだ。あれはな、携帯電話を持たぬガキンちょが使う物なんだ。第一、現在この寮に公衆電話はないぞ」

「は？」

「どういうこと？」

きりとがブルブルと震えている。

「撤去されていた」

「公衆電話ちゃあああん！俺も今すぐ君の元へ行く！」

「行き先は…スクラップ工場だな」

「ストラップ工場だと？じゃあ、あの公衆電話ちゃんストラップになるのか？」

「ストラップじゃなくてスクラップだよ、きりと」

公衆電話をストラップにできるわけがない。

「スクラップってなんだ？」

「俗に言う、ゴミ」

「どうあああああつ！マイハニー！マイワイフ！」

彼女なのか妻なのかどっちかにしてほしい。

「リサイクルされるのかな？むー、プラスチックや金属はリサイクルされると何になるんだ？」

「やっぱり、またプラスチックと金属になるんじゃないかな」

「とりあえず、やく。携帯電話をよこせ」

「ああ、うん」

「あと、きりと。うるさいぞ」

フローリングの床にドンドンと拳をたたきつけながら号泣するきりとをちづるは哀れな目で見ていた。

「えと、まず。きょうことさいかだな」

ちづるは僕から携帯電話を受け取ると、指を少し動かし、携帯電話を耳に当てて通話を始める。

「あ、もしもしきょうこ、今暇か。いや、暇じゃなくても来てもらわなくちゃ困る。ああ、きりとの部屋だ。え？やだ？なんだよ。んじゃ、やくの部屋でいいか。わかった。待ってる」

あの、きりとの部屋＝僕の部屋なんだけど。言い方を変えただけできょうこは来るのか。

「さて、次はさいかだ」

また指を動かし、耳に当てて通話を始める。

「さいか。やくの部屋に來い。來なければ、その首、飛ぶと思え」
完全に脅迫だ！

「うし、最後はしなだ」

またまた携帯の電子音をびっぽつぽと鳴らして、通話を始める。
「やあ、聞いたよ。君、BL好きなんだって？まあ、文句があるなら口の軽いきりとても叱りにやくの部屋へ来ておくれ」
堂々とチクったよ。きりとはただじゃ済まないな、と思いつつ横になる。

私は病院の窓から外を見ていた。ピンク色の花卉がひらひらと舞っている。

「今日は、日曜日だね」

ベッドで人工呼吸器やら点滴などにつながれながら、眠っている彼に話しかけた。

「あの時は、お花見ができなかったから、今度改めてフラワーガーデンにお花見に行こう？」

一瞬、答えを期待したが、返ってくるはずはない。

「春は好き？私は好きだよ。いや、春といっても三月は嫌いかもしれない」

だって、彼が意識のない、植物状態になった季節だから……

第八話 イベント予算は僕のサイフから（後書き）

鰻河です。わりとギャグが入ったかと。

ギャグはいると会話文ばかりになってしまうのが悪い癖。
レビュー等、ひまだったらお願いします。

第九話 その美少女は早月さん（前書き）

クリスマス。

やくは駅のホームで美少女と遭遇してしまった！

そんな、優しくておっとりしていて、心の広い美少女に告白された。

「一日でいいから、私と付き合ってください」

美少女に告白されて、あなたはふることができますか。

第九話 その美少女は早月さん

「きりと。一度冥土に行つて来るといいわ」

「何で、そうなる」

「私に屈辱を与えたわね。言つておくけど私は全然BLじゃないんだからね」

しなはきりとモデルガンに向けた。

「BL漫画つて面白いのか？」

「面白いですよ」

「さいか読んだことあるのか。感想を聞かせてくれ」

何だかんだいって、少しずつBL談話に近づいている気がするの
で僕は言う。

「あのさ、あらしは？」

「金がないから不参加だぞ」

何だその答え。

「じゃあ、あらしの分は僕が負担するからさ」

「じゃあ、私も金がないからやくに奢ってもらおう」

「いや、あらしは特別だよ」

「でゆーか、あらしはいないですう」

「え？」

まさか、一人でどこかへ……

「毎年クリスマスの前後はミサがあるんだつてよ」

ミサという言葉聞いて、僕の脳内に魔女が集会をしている様子
が浮かんだ。

「じゃあ、本質的には六人か」

「あとは、さつきが来るかどうか」

「あのさ、どこへ行くのよ。私知らされてないわ」

しながきりと胸ぐらを左手で掴み、右手でモデルガンをきりと
の頭に突きつけている。

「ちょ、やめ、さすがに俺でも死んじゃう」

「死ねばいいわ。冥土のメイドカフェでも行つて来なさい」
なんてツンツンした女だろう。

「ああ、行き先としては東京」

「のどこよ」

「デパート、観光地、百貨店、グルメ。いっぱい行くのさ」

「そう」

それだけ言つて、しなは黙りこくつていた。

時間が過ぎるのは早い。あつという間に次の日だ。駅集合ということなので、僕はただ一人道を歩いていった。きりとは、あと一時間とむにやむにや言つていたので置いてきてしまったから一人。まあ、これも静かですがすがしいが。

あちらこちらにクリスマスセールもののぼりが立っている。郵便局、消防署に警察署を過ぎれば駅前のデパートが見えてくる。そこを通り過ぎれば駅の看板が目に入り、僕は切符売り場へ走った。券売機で切符を買い、改札口から駅のホームへ向かったまではいいのだが、そんなに広くない駅のホームにはちづるやしならしき人物はいない。そして、ベンチに座る季節はずれな麦藁帽子と、シャツ風のワンピースに桃色のカーディガンを羽織った僕と同じ歳くらいの少女。麦藁帽子からはみ出す長い髪が特徴だ。僕は、その娘を知っている気がした。

「隣を失礼します……」

と言つて、隣をキープ。そして、何となく顔を覗く。

「あたしの顔に何かついていませんか？」

似ていた。あまりにも似すぎていた。だから、聞いてしまった。

「あの、名前を伺つても……」

「えっと、神来早月と申します」

かみく・さつき。名字は違つとはいえ、名前まで同じとは、何かの予兆だろうか。

「神が来ると書いて『かみく』って読むですよ。珍しいですよね」
脳内で字を書いてみる。神が来る、神の別の読み方はシン。やっぱり、別人とは思えない。シンク・サツキと神来早月。だが、同一人物には思えなかった。第一、性格が正反対。礼儀正しいし、優しい。そうだし、何せ可愛いと思ってしまうた。

「あの、あなたは？」

「あ、僕は木瀬やく。本当は夜に久しいって書いて『よるひさ』というらしいけど、みんな『やく』って呼んでます」

なぜこんな事を言っちゃったんだろう。初対面なのに。

「そうですか、でも『よるひさ』も格好いいと思いますよ」

それは、きつと知っているからだ。

「ねえ、あたしたちどこかで会ったことがありますかね、よるひささん」

『よるひさ』さんなんて呼ぶ人はじめてだ。

「うーん、僕も思ってたんですよ」

「面白いですね。これって駅のホームでばったり出会った二人が恋に落ちてしまうという、ステキなシチュエーションですよ」

早月さんはにっこりと笑っている。

「そういえば今日はクリスマススイブですね」

二人して敬語のおしゃべり。これが普通の生活か。

「そうですね。にしても今日は暖かすぎる」

「あ、そうかもしれません。もしかしたら異常気象かもしれませんよ」

「あー、天気予報見てくればよかったな」

すると早月さんは、くすくす笑いながら言う。

「残念ながら今日の天気予報大はずれです。雨って言ってました」

「天気予報がこうも大きく外れるとは」

「それはですね、あたしがてるてる坊主をいっぱい吊しておいたからです」

こう話しているうちに早月さんのことがもつと知りたくなった。

「あの、女性にこういうことを聞くのは失礼だと思っていますが、早月さん年齢は……」

「十六です。よるひさんはいくつ？あたしより年上かなあ」

「同じですよ……」

「わっ、偶然。これって絶対運命です。きつとあたしとよるひさんは、運命の赤い糸で結ばれているんです」

「でも早月さん、彼氏いるんでしょう」

「いやあ、あたしは一人者です」

信じられない。こんな美女で、優しくて可愛い人に彼氏がいないだなんて。

「あの、あたしも失礼ですが、言ってもいいですか？」

顔を赤く染めて早月さんは言った。

「あたしと一日だけ付き合っして下さい」

恋が成就した。僕は、早月さんのことが好きかもしれない。だが、どうして一日だけなんだろう。

「やくっ！」

やべえ。来ちゃったよ。早く答えなきゃ。

「わかりました」

背後に近づくちづるの足音をよそに僕は答えた。

「ありがとうございますっ」

「やーく。なーにしてるんだ」

「ちづる、ちょっと来い」

僕はちづるの袖を引っ張り、ホームの隅に連れていく。

「何だ」

「急遽、僕の彼女が参加することになった」

「はあ、何を言っているんだ。お前の彼女は未来永劫私だぞ」

「いや、そんなことは言っただけ、アレはあの時だけだから」

「何だと、私以外にお前の彼女に相応しい女がいるはずない」

その自信はどこから湧いてくるのだろうか……

「あのね、言いくいんだけど、今日一日彼女ができました。許し

をもらえないでしょうか」

「そうか、でその彼女は？」

「あの、麦藁帽子の子」

「むう、さつきそっくりだな。あの子の写真をさつきに見せたら面白そうだ」

「で、答えはイエス？ノー？」

「ノーに決まっているだろうが、このたわけ」

「いや、ノーじゃ困るんだ」

「ノーじゃ困るって。イエスと言ったら私はお前の浮気を許す事になっちゃう」

「浮気って…。彼女でもないのに何を言うか。」

「交換条件を出そう」

「何だ。今度は。愛と恋と選挙は金で解決することではないよ」

「二十五日の夜に、ちづるの言うことをなんでも一つ聞く」

「本当か」

「さあ、願いを言え。」

「じゃあ、私の未来永劫彼氏になってくれ」

「…わかった」

僕はちづるの袖をもう一度引っ張り、早月さんの元へ連れていく。

「あ、どうしたんですか？急に違う女の子とどこかに行っちゃったから、心配しました」

「ああ、この子は僕の義理の妹なんだ」

「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」

僕の隣で袖を引っ張るちづるが真顔で言う。

「変わった妹さんですね…」

「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」

これって、妹というか弟分に近い。

「あー、わかった。カップ麺ならいくらでも買ってくるから」

「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」

「カップ麺は健康に悪いですよ」

「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」
「ちづる？」

「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」
「どうしたんだ？」

「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」
何で、さっきから「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」
を連呼しているのだろう。

「早月さん、少し待ってて」
「ああ、はい」

僕はもう一度ちづるをホームの隅っこに連れていくと、言う。
「さっきからどうして同じ事しか言わないんだ…」

「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」
「あのさ、ふざけてるの？」

「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」
おかしい。様子がおかしすぎる。これはどうしたことが。

「さいか」

僕はつぶやいた。こんなふざけた事するのはさいか以外いるはずがないし、こんな事はさいかしかできない。

「よくわかったですう。褒めてやるですう」

下から声がする、と思ったら、線路の上に一人少女が立っていた。
少女は童顔で、にっこり笑っているが性格はどす黒い。

「ちづるに何した」

「いやあ、操ってただけですよ」

「操るって…変な事しないですよ」

「ちょっとした悪戯ですう」

「今すぐ戻せるかい？」

さいかは不機嫌そうな顔をしながら話す。

「戻せないことはないですう」

「じゃあ、戻して」

「戻すにはかの有名な伝説のコインが必要なのですう」

「はあ」

どこのゲームだよ。

「でもそれは今さいかの元にはないですう」

「で、そのコインはどんなのだい？」

「茶色で、側面にギザギザしたコインで、裏には歴史的建造物の絵があるですう」

つまり、古い十円玉と。

「あるかなあ」

僕は鞆の中からサイフを取りだし、小銭をあさる。

「げ」

「ないですかあ？」

「何これ」

ギザ十が、いっぱいある。ギザ十で溢れている。なぜかは知らない。

「何枚必要？」

「一枚ですう」

「じゃあ、さいか。こっちに来て」

「そっちが来ればいいのですう」

危ねーよ！どうしてこの安全なホームから危険な電車の通る線路に行かなきゃいけないんだ。

「二枚あげるからこっちに来て」

「二枚もあるですかっ」

目を輝かせ、僕の方に近寄ってきた。よしよし、それでいいんだ。

「三枚あるから……」

その時、さいかが不自然に飛んだ。翼でも生えたかのように、フワフワとホームに上がってきたのだ。

「ギザ十！」

「その前にちづるをどうにかしてよ」

「兄貴、カップラーメンが食べたいでヤンス」

「ギザ十が先です」

「ちづる」

「ギザ十」

「ちづる」

「ギザ十ですう！」

「ちづるだ！」

っ…埒があかない。

「お願いだから、ちづるを先にどうにかしてくれないかな」

「早くギザ十をよこさないとその細い首を時計回りにねじるぞコラ、ですう」

死ぬのはいやだな。よし、退こうじゃないか。

「ほら」

僕はサイフの中のギザ十を三枚さいかに手渡しする。

「確かにギザ十です。受け取ったです」

「待って、ちづるは？」

「もう戻ってるですよ」

待てよ。もしかして、ちづるを元に戻すのにギザ十は必要なかったんじゃないか…

「……私は何をしていたんだ…」

「おお、元に戻ってる」

「お兄ちゃん、早くしないと電車来ちゃうよっ！膝枕する約束だったでしょ！ちいはずっとこの日を心待ちにしていたんだからね！」

と思ったらまたおかしくなっちゃった。つか、「ちい」ってその年で自分のことを指しているのか。年齢的におかしい。

「さいかつ！」

「こ…今回は違いですよ。いつもさいかが悪いとは限らないんです」

「嘘つけっ！」

「そのちづるは妹キャラを作っているだけです！あくまで演技ですよ！さいかは無関係ですう」

何ですとお、という言葉が脳内で響いて止まない。

「お兄ちゃん、何をぼーつとしてるの？」

「ちづる、素のままでいい」

「何を言ってるの。今日のお兄ちゃんちよっぴりおかしいよ？」

「おかしくない。おかしいのそっちだから」

「もー、お兄ちゃんったら」

「萌え萌えの妹を演じているのかい？」

「萌え萌えは嫌なのか」

戻った。このままでいてほしい。

嫌っていう訳じゃないけど……」

「おかしいな……。きりとが『やくはシスコンだから、妹の真理奈に
は甘い』っていつていたんだが……」

あの野郎、ガセネタを流しやがったな。

「まあ、いいか。今日はずっしりこってり妹キャラを演じさせても
らう。どんな妹かはお楽しみだ」

すごく怖いんですけど。ツンデレとかだったらどうしよう。

「やく！事情はさいかから聞いたぜ！」

「……………」

さらに恐怖が増した。

「俺も妹として参戦する！」

「それは困る」

「もう、どうしてにーにーは外になると真面目になるの？」

いと気持ち悪きこと、この上なし。

「やくさん？」

「あー、早月さん。ゴメンね。コイツ、僕の悪友で……」

「されこうべきりこーにーにーをよろしくね！」

「にー……にー？」

この馬鹿。混乱してるじゃないか。

「決して妹じゃありません。ただの悪友です」

「悪友とは失敬な。君を犯罪から救ってきたのを誰だと思っている
んだ」

「ちがうよ！僕はそんなことは一度だってしたことない！」

「前だって錠剤を鞆の中に……」

「え、まさか、薬ぶ……」

「ただのお菓子だよ！錠剤型のお菓子あるでしょ！あれだよ」

帰ったら……潰す。

「お兄ちゃん、ずるいよつ。ちいも混ぜてえ」

ちづるがそう言った後に、声は出なかったものの、口パクでこう
いつていた気がする。

「お兄ちゃんに近づく悪い虫は、ちいが全部排除するんだから」
ブラッディクリスマスにだけはしないでね。

「よるひさんには愉快なお友達がたくさんいらっしやいますね」

「愉快なんかじゃありませんよ。奇怪です」

「あたしはお友達、少ないから……」

悲しそうにそう言うと、元の笑顔に戻った。

「でも、今は一番楽しいです。すごく楽しいです」

「よかった。電車の時間はあと十五分……」

そういえば、彼女はどこへ行くつもりだったのだろう。

「あの、どこへ行くつもりだったんですか？」

僕は、彼女に問いかけた。

「あたし、ですか」

「はい」

「あたしは、西京百貨店へ行くつもりでした」

「面白い物で？」

「いえ、古い友人に会いに行く予定でしたが、そんなのはいつでも
できます」

彼女は、本当に何者なんだろうか。

「僕の友人にさつきって子がいるんですよ」

「本当ですか？会ってみたいです。きっと元気で優しい子なんだろう
な……」

元氣、というのはあっているが、優しくはないと思う。暴力的で、

爆弾愛好家の異名を持ち、ちょっとしたことで怒る低血圧の上サドだからだ。

「でも、それは叶いませんよね…」

「今すぐ呼びましょうか？」

「大丈夫です」

「おい、ちづる」

遠くから声がした。改札口から走ってくる長い髪をゆらす美少女。

「しな、来てくれたんだ」

「当たり前よ。暇なもの…って、さつき来てたの？」

「彼女は早月さん。同名だけど、別人。そっくりだけど別人」

「ふーん」

しなは、早月さんの顔をじろじろ見ると視線をやくに移す。

「あー、そうそう。そこ、危険だから」

「え？」

「くたばれやああ！このクソメガネエエ！」

上空から、釘バットを持った少女が。スカートで。スカートの下には下着以外何もはいていない。スパッツくらい履いてよ…もう。

「きょうこっ」

僕は声をあげた。そんな、こんなエロいアングルがあるか…

「さっさとコンタクトレンズに変えろよ、この地味男！」

きょうこは僕の顔面に向かって釘バットを突き出す。

「ぬあっっ」

思わず声をあげてしまった。

「どうだ、特注品だじえ。金属バット+釘で、きょうこ様の金属釘バットさ」

金属のバットに釘のくつついた一風変わった釘バットは目前で止まったものの、黒い笑みを浮かべるきょうこは、本当に突き刺してきそうで怖かった。

「後で試し殴られさせてやる」

試し殴られて、僕が殴られる方かよ。

「それは困るね」

「拒否権はないからな」

「人権というものを知ってるかな？」

「人権？何それ」

……こいつの腐り果てた脳みそをどうにかして復活させる方法はないかな。

「人権というのはね…（中略）だから、覚えてないといけな…、ちよ、ま、何で釘バットを僕に向かってかまえているのかな？不気味に笑ってないでよっ！怖いから。マジで怖いから、タイム！タイムタイムタイム！」

きょうこは僕の必死の説明をよそに釘バットで僕の顔面を潰しにかかる。

神様、ありがとうございます。僕は天国へ旅立ちます。父さん、母さんありがとう、僕を産んでくれて。僕をみんなと出会わせてくれた運命に

ありがとう……

「お兄ちゃん、死ぬのはまだ早いよ？」

「よかった、ちづる」

ちづるが素手できょうこの釘バットを受け止めていた。

「お兄ちゃんを守るのはちいだもん。お兄ちゃんは弱いからちいが守ってあげるって言ったでしょ」

「…妹口調はやめて」

「それは無理だよ、お兄ちゃん」

「どうしてだい？」

するとちづるは不気味に笑った。

「お兄ちゃんにくつつく悪い虫を駆逐するのはちいじゃないとできないし、普通に駆逐してるんじゃない面白くないでしょ？」

「面白いとか面白くないとかじゃなくって…」

「にしても、お兄ちゃんバンソコない？ちいの右手から真っ赤な液体がでてるから…」

「バンソーコーじゃどうにもならないから」

僕は駅員さんに包帯をもらおうと、改札口の窓口に行く。駅員さんはかなり驚いた顔だったが、快く包帯と消毒液をくれた。優しい人でよかった、と思いながら、ちづるの手に消毒液をたらした。

「お兄ちゃん、痛いよお」

「我慢する！」

つい、ノリで言ってしまった。

「お兄ちゃん、きついよお」

「きつく巻かないと止血にならないし…」

あつという間に応急処置完了。さすが僕。

「お兄ちゃん、ありがとう」

「ありがとう、とか感謝する前にその妹口調をどうにかして」

「え？お兄ちゃん妹萌えじゃないの？」

「うん、妹には萌えないね」

僕がそう言うときちづるは五秒くらい固まった。

「さつきから妹口調はやめてって言ってたのに…」

「俺の妹だったらどんと来いだぜ」

「私は断る。きょうこ、きりとの妹をやれ」

きょうこが妹だとしたらさすがのきりとも死んでしまう。少しでもぼーっとしていたらすぐに殺されてしまいそうだ。

「おう。…コホン」

きりとに人生のエンディングが流れ始めた気がする。

「ふう、どうしていつも兄さんは…」

「おや？普通だ。」

「戦争で解決しようとするのかしら。話し合いで解決する方法だってあるはずなのに…」

「何だか、スケールが無駄に大きいぞ。」

「私たちセインの民は人間と比較しても優れてもいないし、劣つてもない。人間殲滅なんて馬鹿なことをやめて、人間と共存する道を選ぶことはできないのかしら」

「こ…これは…」

「キアラ、だからこそ僕ら『レジスタンス』がいるんじゃないか。セインの民も人間も関係なく、手を取り合って平和を創っていける世界を僕らで創るんだ」

と、ちづるが言う。そもそも、どうしてあの有名なファンタジー漫画『SAIN〜セイン〜』のワンシーンが出てくるのかがわからない。

「シグノ、あなたは何もわかってないわ。そんな簡単に平和な世界ができるものじゃない。セインの民も人間達も戦争をすることで頭がいっぱいな。少数の人々があがいたって、何も変わらないのよっ！」

このシーンは人間である主人公シグノが、セインの民という上級民族セインの民であるヒロイン、キアラの悲しみをときほぐし、人間VSセインの民の戦争を止めるために本格的に動き出すシーンだ。僕はさつきに借りたから読んだことがある。

「それは違うよ。キアラ」

シグノ「ちづる、キアラ」きょうこ、という役割らしい。

「え」

「僕は大勢の人があがいたって少数の人があがいたって一緒だと思う。君の兄さん、カスト二ウス將軍だって、考えを改めてくれるよ。そういえばセインの民を指揮するのはキアラの兄だったかな。

「兄さんはすごく意志の固い人なの。そう簡単に考えが変わるとは思わないわ」

「やってみなくちゃわからないだろ」

「やる前から結果は分かっているわ。きつとどちらかが滅びてしまう運命なのよ……」

ああ、妹「『SAIN〜セイン〜』が思いついちゃったのか。

「どうだ、私たちの暗記力はずば抜けているだろう」

漫画のセリフとかよく堂々と駅のホームで言えるなあ。そんなものを覚えるなら英単語の一つでも覚えたらどうだろう。

「ちづる、てめえセリフ少なえクセによく自慢できるな」

「で、どうだ？」

そう聞かれても答え方に困る。

「早月さんはどう思う？」

「隅で聞いてましたが、あの漫画あたし大好きなんです」

この人に話を振ってよかったと心の底から思う。

「おお！早月さんっ。話が分かるぜい！カストゥんたら將軍のあの『じよりじよりおひげ』ってめっちゃくちや萌えるよな！」

どこに萌えてるんだよ、この釘バッター。

「私はカストニウス將軍のペンダントに映るあの娘が気に入った」

「そりゃ、妹のキアラだろ」

「ほお、初耳だ」

あんなに台詞を覚えておいてそれはない……。

「あの、よるひささん。もうそろそろ電車が来ますよ」

「ああ、ホントだ」

遠くからガタンゴトンという、電車の音が聞こえ、それは次第に近づいてくる。

「きょうこ！いくですよお」

「わかった！作戦だな！」

このライラ共は何をする気だ。事件のにおいがプンプンする。やがて電車は目の前で止まり、自動ドアが開き、人々が降りてゆく。

「乗る人優先だあ！」「下りる人は後ですっつ！」

「あんたら馬鹿？ 下りる人優先に決まってるでしょ。ルールというものがあるのよ」

真面目な人間が僕以外に存在したことに安心した。

「ふっふっふ甘いな」

降りる人そっちのけで座席に座るとききょうこは叫びだした。

「ルールとは破るためにあるのさっ」

刹那、きょうこの首から赤い液体がちろりと垂れた。

「大丈夫ですかあっ」

笑いながらさいかがきょうこの頭を揺さぶる。返事はない。だが、しなの手には麻酔銃が握られていた。

「何してるんだよ……」

「何って少しだけ眠っててもらってるのよ。当たり所もよかったし、身体に悪影響は多分無いわ」

「多分って……」

「それだけ」

今はその言葉を信じるしかない。

私は窓の外に見える葉桜を眺めていた。

「桜、散っちゃったね」

「うん、そうだね」と返事してくれることをどれだけ待ち望んだことだろうか。頷いてくれることをどれだけ望んだことだろうか。

「こいのぼりかあ」

遠くに見えるこいのぼり。ふわふわと空を泳いでいる。

「ねえ、今どこにいるの？」

答えてくれたなら、すぐに飛んでいくよ。だから、答えてよ。眼を閉じたままでもいいですよ。私を見てよ。私の手を引いてよ。お願いだから、目を覚ましてよ……

第九話 その美少女は早月さん（後書き）

鰻河です。

ちづるがすごく理不尽な目にあっています。

まるで不幸少女・・・

第十話 死に際接吻（前書き）

いつものことだが、ちづるはKYである。

今回はそのKYが、命を脅かすことになるとは・・・

ていうか、まだみんな隠し持っていたんだね、拳銃とか。

第十話 死に際接吻

「がったーんごつとーん」

きりとは窓の外を眺めながら、幼い子供のように笑っている。周りの人の目線が痛い、と思ったのだが他の人は全員違う車両へいつてしまった。

「きりと、静かにして」

「おお、ワリワリ」

僕は早月さんとちづるに挟まれて座っている。正面に座るさいかはきょうこに膝枕をしている。

「がったんごつとーん」

今度は少し小声で、同じようなことを言うきりとを、しなはまるでファーストフード店のチキンをついばむハトを見るような目で見ている。

「馬鹿じゃないの」

もう一度麻酔銃を構え、トリガーをひく。

「がったーんごつとーん」

そしてガクンと横になる。

「よし」

「ちなみに解毒は？」

「一つだけ」

「どうするのさ」

「この麻酔はそんなに強力じゃないわ。すぐ起きるわよ」
「すぐつて？」

麻酔銃の銃口に息を吹きかけると、しなは言った。

「自分で体感すればわかるわ」

「え？」

ダァンとう銃声の音と共に僕の意識が飛んでゆく。

「私の好きな音、教えてあげるわ」

視界はだんだんと暗くなってゆく。

「お察しの通り、銃声よ。あのワイルドで格好いい音…。だから私は銃を撃つのよ」

それだけ聞こえた。僕は眠った。強制的に眠らされた。

そして気付けば、ガタンゴトン揺れている。どれだけ時間が経ったかはわからない。

「しーちゃん、どうしてこんな事をするの？」

「あなたには関係ないわ。そんなに抵抗するならあなたも撃つわよ」意識は曖昧だが、しなと早月さんの声だけが聞こえるということ
は…

みんな眠らされた

「随分変わったものね、あの孤高の女王気取りの少女が」

「あの時のあたしはそうだったけど、しーちゃん。さすがにやりすぎだと思うよ…」

目をパチンと開ければ、この意味の分からない会話は途切れてしまっただろう。悪いけど、盗み聞きさせてもらおう。

「黙りなさい。マグナムをぶっ放つわよっ！」

珍しい。あの冷静沈着、冷酷冷静なしながらムキになっている。

「いいよ、撃ちたいなら撃てばいいよ」

「じゃあ、撃つわね」

カチャリとリボルバーに弾を仕込む音。

「百発百中とうたわれた私に逆らうなんて、いい肝してるわ」

片目を薄く開く。しなが構えているのは確かにマグナム。それも、威力改造に手ぶれ補正改造が施してある。一度改造した銃を僕が忘れるはずがない。

「その肝、もらおうじゃないの」

撃とうとしてる。冗談じゃない。今度こそしなは独房に入れられる。

「だめだ！」

動きにくい体で必死に立ち上がった。

「あら、起きてたの。随分と早いわねえ」「よるひささん…」

「しな、今度こそ牢獄行きだよ」

僕の必死の忠告をよそに彼女は平然と言う。

「それが何？」

僕は思わず絶句。

「さて、こんなゴミ、放っておきましょう」

「……百発百中って言いましたよね」

「そうよ」

「その自信を粉々に砕いて差し上げます」

早月さんは胸を張っていた。本当にこの人の正体は分からない。何なんだ、一体。誰なんだ、この人は。

ダァンッ

重く、強い銃声が鳴り響いた。しながトリガーを引いたのだ。

「早月さん！」

床に転がる僕は叫んだ、がすぐに状況が理解できた。

「どうですか」

存在するはずの血だまりがない。そして、早月さんの左手の人差し指と親指に収まっている、弾丸。

「……やっぱり、さつきね」

やっぱり、早月さんは「さつき」だ。マグナムの軌道を素早く察知し、弾丸を指二本で止めた。常人ではあり得ない。これが何よりも証拠だ。

「そうですが、あたしはあの子とは違います」

冗談ではないことは、彼女の目が証明している。いつもの「さつき」ならば、確実に目先が泳いでいる。だが、早月さんはまっすぐしなを見つめていた。

「アーハッハッハッハ！」

そして、車両内に響く高笑いをあげる。

「冗談も程々にしなさいよ、演じてるんでしょ、静かな優しい女の子を演じてるんでしょ！クリスマスで、つぐちゃんに会いに行くか

ら、おしとやかに演じてるんでしょ？ 実に面白い話ね！ あんたの精神は相当イカれているようね！ 精神病院でも行つて来なさいよ！ したら、真面目でもつとまともな人間になれるわよ！ 演じる、じゃなくって本当にね！ 演じるなんてやめなさいよつ、素でいればいいじゃない！ 私みたいにね！」

遂に狂った。

「しな！」

「言いましたよね、素でいればいいって」

「早月、さん？」

僕の方を見て頭をペコリと下げる。

「ごめんなさい」

早月さんはしなに一步、また一步と近づく。

「こつちが静かにしていると思つたら大間違いです！」

と、怒るとしなのほつぺたをパチンと平手打ち。

「何するのよ！ 今度は至近距離で撃つわよつ」

「ご自由に。あたしは負けないですよ」

もう一発、ダアンツという銃声。とつさに耳を塞いだから鼓膜が

破れずには済んだ。

「どうしてよつ！ あなた何者よ！ さつきでさえそんなことできないわよ！」

「だから言つたでしょ」

今度は両者の差が一メートルも無かつたのだが、血しぶきはない。

「殺す殺す殺す殺す殺す殺す殺してやる、殺さなくちゃ気が済まないわあつ！」

「しな！ もうやめ……」

「黙ってるよ、クソメガネ。死にてえのかつ」

駄目だ、頭に血が上っている。しなは、今早月さんを殺すことしか考えていない。

「あたしは、あの子とは違います。けど、いつもあの子を見てきました。しーちゃんの変わり様も知っています」

対する早月さんは異常なほど冷静。

「私のことを知ったように言うなあああ！」

今度はピストル二丁を持ち出した。彼女のウエストバッグの中にあったのだろう。

「月日というものは全てを変えてしまいますが、あたしは思うの」「僕はさっきからずっと耳を塞いだままだが、それでも大きく聞こえる、数発の銃声。」

「また、一緒に遊べたらいいなあって」

早月さんはそんな事を言いながらも全ての弾丸を弾いてゆく。

「しな！」

「うつせえな！ぶちのめしてやる！」

そう言って、僕に構え直す。

「やめて！よるひさくんには手を出さないで！」

「だあつつ」

早月さんが叫んだ瞬間にしなが勢いよく飛んでいき、他の車両とをつなぐ扉に身体をぶつけた。

「な……」

「言っただろう。お前は私が守ると」

「ちづる……」

「にしても、早月、といったか。しなをここまで怒らせるとは私も驚いた。見ていて楽しかったよ」

「あたしも予想外です。キレるとは想定外で……」

この人達、やっぱり超人だ。

「さて、どうやってこの暴走自動車を止めようか。私らの中で唯一知能派のやく。良い案はないか」

「はあ、どうして僕にそれを言うかな。まあ、ここは王道の作戦を。」「気絶させる……とか？」

「なるほど。やってみるか」

「あの、どうやって気絶させるんですか？」

それについてはちづるもノーコメントを貫きつつ、僕に答えを求

める顔をしていた。

「えっと、まず、悪いけど早月さんが囿になってちづるが気絶させるくらいの攻撃をする、とかは？」

「軍師殿、相変わらず策を練るのが早いすな」

「軍師って…」

照れるじゃないか。軍師とか格好いいRPGみたいなこと言われたら。

「まっ、とりあえずその馬鹿みたいな初歩的な作戦で行こうか」
確かに馬鹿みたいで初歩的な作戦だけど。

「では、早月。行け」

「了解です」

床を蹴って高く跳躍。

「ここです！」

「殺すっ！」

予想通りピストルを撃ってきた。

「ちづる！」

「ほい」

そう返事をするとなんとなんという軽やかな音と共に、しなへ走ってゆく。

「ってちよい待った！」

「何だ」

「どうしてだよ！」

「何がだ」

「どうして正面突破なのさ！」

そう、着地した早月さんを突き飛ばして、しなに向かって爆走したのだ。

「正面突破で何が悪い」

「馬鹿だよ」

「……ば…馬鹿はアンタよ。いつも私の気持ちなんて気付いてくれないもん。私、アンタの為にいっぱい可愛くなっただから、ア

ンタにいったいアピールしてたんだから…」

「いきなり態度を変えるのはやめてほしい」

「八年ぶりに再会した幼なじみというものを演じてみたが、残念ながらお前は萌えないらしい、引き続きこいつの萌えポイントを探る、報告は以上だ」

「ちづるちゃんっ!」

早月さんの叫び。ちづるの左胸に銃口が突きつけられていた。

「腰を打っちゃったから立つのに時間がかかったわ。あと、さつきが近くにいると弾かれちゃうから、タイミングを見計らうのが大変だったわ、このゴミ虫があ!」

まずい。マジで殺す気だ。どうにかして止めなくちゃ…

「ヤメテ、殺サナイデ、食べテモ美味シクナイヨ」

「遺言は済んだかしら」

「しな!駄目だ!」

「じゃあ、死ぬ前に一つだけさせてもらいたいことがあるんだが、やっていいか?」

「内容によるわ」

死ぬ前に一つだけやりたいこと?

「えっと、キスが、したい…」

「アウト」

「やめてくれ! しな!」

「黙りなさい」

というか、接吻くらいさせてあげたつていいんじゃないか。

「じゃあ、最後に一つだけ」

「さ、その言葉があなたの最後の言葉よ」

「大好きだよ、私の友人よ」

「……何よ」

しなの膝が震えはじめ、やがて床へ座り込む。

「何なのよ」

「私はしなが大好きだ」

「じゃあ、やくと私どっちが好きなの」

「決まってるじゃないか」

僕と早月さんは呆然と立ちつくしていた。

「ホント？」

「ああ、本当だ」

「ちづる…」

ちづるはしゃがみ込み、しなの頭をなでた。まるで妹を慰める姉のように。優しく微笑んでいた。そしてその唇から、こぼれるように言葉が発せられる。

「やくの方がしなより八兆倍くらい大好きだ。むしろ愛しているぞ」
馬鹿だ！この人間駄目だ。空気読めよ。この場面でこんなこと言ったら、せっかく鎮められたしなの殺人魂がわき上がってしまうじゃないか。

「そう…そうね…ちづるはいつも…私なんて二次だもの」

「そうだ、おまえはやくがいないときの暇つぶしにしかない」
最悪だ。人間性がゼロだ。しなをおもちゃ扱いしてるよ…

「あんたなんて死ねばいいわっ」

「おお、死ぬ、か。そりゃ初体験だ」

笑ってた。無邪気に、天然に。

「ちづるちゃんっ」

「まあ、見とけい」

ちづるはひゅうと口笛を吹くとしなの胸ぐらを掴み、左手のピストルを蹴り落とす。

「まあ、しなのことは大好きだが、やくは越せないことは覚えておけ、よっ」

そして、拳を一発、腹に。ちづるの筋力は僕を遙かに超え、きりとをも凌駕する。きつと相当の力を込めたんだろっ。しなは枯れるように倒れた。

「ぐっ…」

「撃つ気が無かったのでしょうか」

「え？」

僕は早月さんの言葉に耳を疑った。

「しーちゃんは私のことはバンバン撃ってきましたけど、ちづるちゃんにはいつぱいスキがあったはず。なのに撃っていない。撃てなかったんです、怖かったんです」

「でも、死ね死ね殺す殺すとか暴言を吐いてたけど……」

「嘘ですよ。だって、しーちゃんは大切なものを失う怖さと悲しさと空っぽになってしまった心を一番知ってるんですから。弾筋にも出てました」

「でも、どうして早月さんを撃ちまくったのかが僕にはわからない」とすると早月さんは天使のような笑顔で笑う。

「それは私の強さを計り知れていて、この人なら死なないだろうって思ったからだと思います」

やっぱり、早月さんは元殺人鬼だ。そして「辛苦殺気」だ。だけど、「辛苦殺気」ではない。考えられるのはただ一つ。

「早月さんは、二重人格ですか」

自然と言葉になっていた。思い出した昨日のちづるの言葉。『さつきの精神異常』。多分これは、二重人格のことだ。

「はい。あたしは二重人格です。いつもあたしはあの子の裏にいます」

「で、どうして今日だけ？」

カッソカッソというちづるの足音。

「それは、つぐみに会うためだろう」

「でも、それだったらあたしでもさつきでもどっちでもいいんですよ」

「そうか、迷宮入りだな」

迷宮入りも何も、本人に聞けば解決することでしょうが。

「早月さん、どうして僕の彼女になったんですか」

「あたしはずっと、彼氏と一緒に並んで歩くのが夢だったんです」

「それは私も一緒だ。だからといって他人のダーリンを奪うとは鬼

畜にも程があるぞ」

何げに被害妄想激しいな、ちづるは。そもそも、僕は君のダーリンじゃないから。

「はい、今解りました。よるひささんにはれっきとした彼女がいたことを。愛してくれる異性がいることを。私の自分勝手に、ちづるちゃんを不愉快にしまっただんです」

「ああ。すっげえ不愉快だ」

「ちづるは、もう何も喋らなくていいよ」

「……………」

「だから、よるひささんはちづるちゃんといっぱいイチャついて下さい。あたしはきりとくんで我慢します」

「きりとはああ見えてスカートめくりが趣味だから、ノーパンの早月は半径一メートルには入らない方がいいぞ」

さつき注意したばかりなのに。つか、下着つけていないの前提かい。

「スカートめくりなんて面白いじゃないですか。スパッツを履いて相手を絶望させることができますよ」

「ほう。なら、スパッツを履いていると見せかけて、下半身にボディペイントするのはどうだろうか、相当めんどくさいがな」

「ナイスです」

なんつー話をしてるんだとも言えない僕は静かに呟いた。

「そんな話を男子の前でしないだよ」

二人はにやはたと笑った。

ザーツというノイズのような雨音。私にはそれがうるさくてたまらなかった。世の中には雨の音には趣があるという人がいるのだからうけど、私はそう思えなかった。

「雨ってうるさいね。六月って私は嫌い」

やっぱり返事はない。雨音に混じり聞こえる心電図の音。かれこれ七年間真っ直ぐになったことはない。普通の家の人だったら金の無駄だといって、数年間意識の無いような人は、火葬されてしまう。だが、彼の命を繋ぎ留めているのは、彼の弟、万里の願いだ。彼を逝かせた方がいいという過激派と、意識の回復を見込む保守派。保守派の中心は木瀬コーポレーションの次期社長である木瀬万里で、過激派の中心は過去に兄である彼を過度なほどに慕っていた（愛していた、ともいう）、妹、真理奈。今では「あんな人、さつさと死んでしまえばいいのです」と辛辣極まりない言葉を発している。とても残念だ。

「どうして、いつも私の気持ちに気付かないの？」

第十話 死に際接吻（後書き）

鰻河です。

読んでいただきありがとうございます。

がんばって超スピードで更新していきますので、続きもよろしく願
いします。

だからあとがきが短いのだ！！

第十一話 早月さん考察（前書き）

謎の美少女で臨時彼女「早月さん」

やはり、この人、「さつき」にちがいない。

そんな早月さんに関しての考察ばかりで短い第十一話。

第十一話 早月さん考察

「どうして警察一人いないのさ」

きょうこが駅のホームでばやいた。

「知りません。どこかで大事件でも起きたんでしょっか」

「あらし、大丈夫ですかねえ……」

「……痛すぎるわ。あの、怪力め」

「警察なんざ、このきょうこ様のネオグレートスペシャルインフィニティダークネスグラビティネオファイナルレジェンドオブアングロイネイルオンバットで粉碎してやるよ」

名称が長い上に「ネオ」が重複していた。

「公務執行妨害宣言をしないでね……」

「うつせえ、警察が正義だの世間様は言うがな、本当の正義はきょうこ様さ。釘バット無双伝説をお前に琵琶を持たせて語らせてやるよ」

釘バットを持って「警察粉碎」と言い放った奴は決して正義じゃないし、琵琶とかいつの時代だよ……って、ん？

「何を不思議な顔をしているんだ」

と、きょうこ。

「おかしい。気のせいだといんだけど」

「きょうこから怪しい気配がプンプンするですかあっ」

「いや、きょうこの日本史知識が中二レベルに達しているとは思わなくって」

琵琶を持たせて弾き語り「平家物語。たしか、鎌倉時代の物語だったはず。」

「これはやくだから言えることだな。私は」「ああ、俺なんか0点だぜ」「さいかは透視でカンニングがバレてから、一人遠い別室でテストですう。がんばっても十点前後しかとれないですう」「私もさいかと同じく別室テストよ。カンニング防止のためね」

ちづるは数学以外全くもって出来ないし、きりと至っては何もできない。さいかもしなも、残念な数字が並んでいたらしい。

「嫌味に聞こえるわ。自分が点数いいからっていい気になってると、額をぶち抜くわよ」

「悪気があつて言ってる訳じゃないんだ」

「その善人面がむかつくんだけど。ぐちゃぐちゃにしていいいかしら？」

やめて、僕、お嬢に行けなくなるから。

「へえ、『やめて、僕、お嬢に行けなくなるから』ですかあ」
「読むなっ」

待て、お嬢に行く前に元殺人鬼とつるんでる人間をもらってくれる家があれば奇跡だ。

「安心しろ、やく。顔面が複雑骨折になつても、動けなくなつても喋れなくなつても、ゾンビになつても、私はずっとお前の傍にいる」

「はあ、でもちづる。世の中には僕より立派な人間がいるよ」

「何を言うか、やくほど最高の男はいない」

いや、テレビに映るタレントや、大物政治家など、僕より全てにおいて勝っている人間は星の数ほどこいる。

「さつきから聞いてるんだけど、ちづる。クソメガネはやめておきなさい。結婚して後悔するわよ。こんな弱気でMみたいにふるまってるけど、ハッピーウェディングの夜に狼になって襲ってきて、アンハッピーウェディングになるから」

「断定しないで」

「ほお、その日が待ち遠しいな。指切りげんまんだ」

「しないし！」

そんなことを話しながらみんな笑っていた。そう、笑っていた。こんな日がずっと続けばいいと誰もが思っていた。

駅から徒歩四分という立地条件の良い場所に建っている、西京百貨店。八年前に爆発事故が起きたとは思えないほどの賑わい。中で

もイチャつくカップルが目立つ。

「賑やか…ですね」

不安そうにしなに話しかける早月さん。それにしなは、相変わらずぶっきらぼうに答えた。

「行きなさいよ、ほら。待ってるんじゃないかしら？」

「でも、どんな顔して会ったら…」

もじもじする早月さん。やっぱりわからない。同一人物説は合っているから、二重人格か。八年前の今日、ショックで生まれた人格だ。しかし、どうして「笹原つぐみ」を知っているのか。ならば、考えられる現象は一つしかない。

——早月さんが、元の人格だ——

だが、この一番有力な仮定にも弱点がある。どうして早月さんを封じ込めて、さつきは行動しているのか。わからない。たしかに早月さんは、あの元気なさつきに身体を委ねるような性格だ。だが、どうして今日だけ早月さんが出てきたのだろうか。それは、「笹原つぐみ」の命日だからだ。だが、今日までどういう心境で過ごしてきたのだろうか。疑問が続く。

「もう、あんた本当に駄目ね」

しなの態度が一変し、早月さんの腕を掴んでビル街に消えてゆく。

「きょうこ、スポーツ用品のセールやってるみたいですよ」

「ん？バットは安いのか、木製バットだ。なるべくそのままの木の色がいいなあ。そうのが釘バにしたときに雰囲気出るんだ」

そこ、釘バットをスポーツバッグみたいに略さない。

「きょうこ、釘のクリスマスセールやってるみたいだぞ」

「なんだとお？釘も最近不足していたんだ」

ちづるは広告を眺めながらきょうこに語りかける。そもそも、釘ごときにクリスマスセールをやる意味がわからない。子供がサンタクロースに釘をプレゼントしてもらいと思っているのか。

「サンタさんよお、きょうこさまの靴下いっぱい釘をプレゼントしてくれい」

訂正。居ました。釘をほしがる子供、いや、女子高生は子供とい
うのか。サンタクロースは、何歳までの子供にプレゼントをしてく
れるんだろうね。

「その疑問の答えは簡単です。サンタさんを信じていれば四十代
のおっさんもクリスマスプレゼントがもらえるのです」

「心を読まないでよ。もう」

「馬鹿なことを言うんじゃないです。相手の心を読むのがさいか
のお仕事なのです」

「そんなエスパー事業やめて、アルバイトでもしなさい」
するとさいかはちつつちと指を振った。

「アルバイトなんて金にならないです。エスパー事業はいいです
よ。一回の読心術で千円稼げます」

「ぼったくりも程々にしてね。というか、今日の依頼者は？」

「匿名希望です。Y・Cさんです」

Y・C、つまり八裂血吊。ちづるか。

「こら、さいか、ばらすな！」

「ごめんなさいです」

「その前に、きりとは？」

「「「え？」」」

さつきから気になっていたんだが、いないのだ。

「あ、エスパーで調べます？人の居場所を調べるのはお値段張りま
すけどお」

「いくら？」

ガマグチ財布から二千元を準備。

「えー、エスパー代が千三百円、手数料が七百円……」

よし、二千元で足りる。

「んで、消費税が百円……」

消費税払うのかい。サービスで税込みにしてほしい。

「さいかの大嫌いな人を捜すからプラス七千円です」

「半端すぎない？お友達サービスで五千円にしてくれないかな？」

「何を言ってるんですかぁ？いつからさいかとのクソメガネはお友達になったですかぁ？中途半端が嫌ならば一万円にしてやるですう」
「だあつ、もう！この悪女め！」

僕は財布から一万円札を取り出して渡すと、さいかは「毎度ありがとうございましたあ、へっへっへ、今日も儲かったぜ」とにやにや笑っていた。

花瓶には、一輪のミニヒマワリ。一ヶ月前とは違い、耳に入るのは雨音ではなく、ミンミンというセミの鳴き声。

「すつごく暑いね。これも地球温暖化のせいかな」

ベッドの上でなんだかよくわからない機械につながれている彼に尋ねた。もちろん、返事など返ってくるはずはない。この部屋に入る前に、起きあがって本を読んだり、窓の外をじっと見つめていたりしないかと考えてしまう。だが、入ってみれば、現実を突きつけられる。そんなのは慣れっこなのだが。

「ねえ、地球温暖化が進んだらどうなるんだろう」

見知らぬ人が私を見たら、精神に異常のある人間と誤解されてしまっただろう。

「人間は火星にお引越しかな。でも、私はずっと待ってるよ」

私の元へ来れないなら、手紙でも電報でも何でも送ってよ。私が、行くから……

第十一話 早月さん考察（後書き）

鰻河です。

やっぱり文章下手・・・orz

それでも、読んで頂けてまじ感謝ああっ

第十二話 早月さんのイニシャルのSはサディストのS（前書き）

きりとを探して三千里、とまではいかないけれど探すのは苦勞する。
サイカイするなり、妄想をブチ当ててくるのはいい迷惑だ。
そんなきりとの妄想からスタート・・・？

第十二話 早月さんのイニシャルのSはサディストのS

きりとはどこにいたかというところ、西京百貨店の書店だ。

「何読んでるの？」

「暗黒大王の犯罪理論」

「なんという……」

「でも、つまんねえな。犯罪理論なんて書くのこいつには一億光年早いぜ。犯罪を犯したことのない人間が犯罪理論なんて書けるわけないのに」

「何だかわからないことを語ってないで、さっさと戻ってきてくれないかな」

「へっ。俺様に物申すとは一億光年早いんじゃないか」

一億光年って言葉が気に入ったらしい。そんな言葉どこで知ったのだろう。発達途中のきりとの脳みそに無駄な知識が入ってしまった……。

「あのねえ、みんな待ってるんだよ」

「何を？大魔王パラディーンがやってきて、勇者キリトンが退治をしてくれるのを？」

何故に大魔王の名前がパラディーンとかいう聖騎士みたいな名前前で、お前が勇者なんだよ。

「馬鹿なこと言ってるじゃないで、早くしてくれないかな？」

「そうか、勇者キリトンを導く妖精ヤック！」

「僕を勝手に登場させないでくれよ」

こいつはもう駄目だ。既に夢の世界ワンダーランドへの扉を開いてしまっている。

「では行くぞ、ヤック。大魔王にさらわれた王女シーナを助けに魔王城へ！」

「行き先間違ってるし」

「そうだったな」

「お、正気に戻ったか……？」

「大魔王を倒すためには四つの精霊石が必要だったわけ？」

「阿呆っ！」

僕はつい拳を振り上げ、きりとの頬を精一杯の力で殴った。

「痛てえよ！このメガネザル！」

「やっとな正気に戻った？」

「何を言っているんだ。俺は常に正気だぜ。さっきの『勇者キリトン伝説』は俺が必死で考えたストーリーで、決してふざけていたわけじゃないんだ」

じゃあさっきのは僕の幻覚幻聴だと信じたい。

「じゃ、帰るか」

きりとの腕をぐっと掴んで外に居るみんなと合流するなり、ちづるが言い放った。

「え？他にやることは？」

「ないけど」

「ち……ちづるちゃん。遊園地とかはどうですか？近くにあるみたいですよ」

早月さんがおどおどしながら言った。

「遊園地？」

「ジェットコースターとかメリーゴーランド、観覧車とか……。ほら、遠くに観覧車が見えますよ。夜になるとライトアップとかされるかなあ」

そういえば、案外近くに観覧車が見える。

「絶叫マシンは嫌いなんだ。第一私は帰ってやくとおもいつきりイチヤつくのだ」

メリーゴーランドと観覧車は絶叫マシンじゃありませんっ！でも、

「いいんじゃないかな」

でも、入園料などはきつと僕の財布から出るんだろうね。

「なあ、やく」

「ん？」

「私とやくはカップルだよな？」

「そりゃ違うね」

正式に僕はちづるに交際を申し込んだ訳でもないし、ちづるも僕に交際を申し込んだ訳ではない。

「なんで？」

「最初に言ったよね、僕と早月さんは一日カップルをするから、それを黙って見ていられたら、僕はちづると正式に交際を申し込むと多少アレンジしたけど、内容的には変わらないし、いいか。」

「よるひさん……」

「こいつはもう『しょうがないからきりとで我慢する』って言ったじゃないか」

「それは早月さんの一方的な意見で、僕はそれを承諾したわけではないよ」

だって、早月さんの正体を知りたいもの。真意が知りたいんだ。

「よっ！色男！」「この女たらしが。少しはひかえやがれですう」

「少女漫画？」

と三名の声が左耳から右耳へと抜けていく。

「だから、今日の僕は、早月さんと一緒にいたい」

「……………」

それを聞くとちづるは黙りこくってしまった。想像していた結果だが、心が痛い。

「馬鹿。大嫌い。顔も見たくない」

そして、観覧車とは反対方向へ歩いていく。

「止めないんですか？」

「いや、今止めても無駄だと思うんだよね」

というか、どうして僕はちづるに怒られる必要があるんだろう。

「ですよ、見てる限り昔と全然変わってませんし」

待てよ。今『見てる限り昔と全然変わっていない』と言った。あの事件以来、さつきは無駄に明るく振る舞ってきたはず。それは早

月さんではないということ。これは、早月さんが元人格ということ
を裏付けている。確かめるべきか、これは。

「早月さん」

「ん？どうしたんですか」

他の四人も早月さんと僕を見ている。

「早月さん、あなたは、あの無駄に元気すぎる『さつき』の元人格
ですよ」

堂々過ぎるような気もするけど、これが一番だと思う。

「よるひさん」

「はい」

僕はこの答えに自信を持っていた。早月さんはクスツと悪戯に笑
いながら、

「それは、あなたの推測ですね」

と、一転真面目な顔で僕に言った。

「え、はい」

「あなたの推測は間違っています」

「何だつて？」

そして、唐突に世界が割れた。

「サイカイ」

「やつ、久しぶり」

目の前に真っ白な布を巻き、ぶかぶかの黒いズボンを履いた少年、
サイカイが立っている。

「前は答えがアバウトすぎたから、今回は、じっくり説明してあ
げよう。まあ、今回は、知らないがな」

「そりゃよかった」

ということは今も、三つの質問が許可されるのか。

「じゃ、一つ目の質問を、どうぞー」

一つ目の質問、か。まずは、

「今僕がいる世界と、さつきまで僕がいた世界は何？」

「おお、考えるね。同じような質問をまとめるなんて」

気のせいだろうけど、サイカイの機嫌がいい。

「えーと、答えよう。今いる世界も、さっきまでの世界も僕が創った。名称としては、この世界は『狭間の世界』、別名『死神の間』」

「なんか名称が怖いな。『死神』って、サイカイ？」

あくまで適当。正解したら、自分のあてずっぽうをこれからは武器にしていきたい。

「御名答。僕は『死神』サイカイ」

当たった。何だか複雑な気分だ。これから、「あてずっぽう」を武器にしなければいけない。でも、まあ、いつか。

「で、さっきまでの世界は君の過去の記憶からボクが創った『いいことだらけの世界』」

「いいことだらけ？」

にしては、ちづるが撃たれたり、しなが電車内で暴れ回ったりしている。

「さっきの世界は、僕の夢の中？」

「あーうん、そうなるね。だいたい察してと思うけど、夢の世界である『いいことだらけの世界』があるなら現実世界だってある。

現実世界の君が死んだら、『いいことだらけの世界』も消えて、君も本当にご臨終だから。あー、ちなみに言うけど、タイムリミット近いから、早く抜け出した方がいいよ」

「タイムリミット？」

「うん、美的に表現してみたんだけど、ぶっちゃけて『もうすぐ現実世界の君は死にます』ってことかな」

「ぐは」

サイカイは笑顔だ。薄情者め。

「じゃあ、第二の質問。ばっちこーい」

やっぱり機嫌がいいようにしか見えない。

「『いいことだらけの世界』から抜け出すにはどうしたらいいのかい？」

「ふむ」

サイカイは僕に手を差し出した。

「何もないけど？」

「いや、これを見てほしい」

サイカイの手の上には、金色の鍵。赤い宝石の装飾が施されている。エスパーか何だかわからないけど、手の上でくるくる回っている。

「RPGでいうとキーアイテム、かな。こんな鍵を三本集めればいい」

「その鍵はどこから？」

「鍵を入手したら僕の元に送られてくるからね。君は既に一つ鍵を入手したっていうことじゃないの？」

「いつ鍵なんか入手したんだろ。サイカイ自身はわかっているんだろ。うか。」

「じゃ、最後の質問、さあ！どうぞ！」

「その前に、今回機嫌が良いのはどうして？」

「機嫌は別にいいわけじゃないけど？」

「じゃ、前回は悪かったのか」

「イエス」

サイカイは、気分屋なのかなと、実感する。

「最後の質問、いくよ」

「あの肖像画の『囚人』とは誰のことだい？」

「ほお、今度はすごくどうでもいい事を聞いてくるね。答えようか」
サイカイは肖像画を指さした。

「あれは、肖像画って言うより、風景画に近い」

「風景画？何の？」

「牢屋の中にいる囚人を描いたもの」

その中にいる囚人は……もしかして……

「あそこは堀の中。囚人の名前は『佐古部桐斗』」

佐古部きりと。それが、きりとの本名なのか、って……

「何できりとが塀の中にいるんだっ」

「犯罪したから」

「でも、あの温厚なきりとが塀の中にはいるほど凶悪な犯罪をするなんて考えられない」

「温厚？証拠は？」

「……ないけど……」

でも、僕はきりとを信じよう。

「まあ、そろそろ帰る時間だ。がんばってね、鍵集め。八十九番目の、木瀬やく」

ガシャン

また世界がひび割れた。次はいつへ行くのだろう。少しだけ、楽しみだなあ……。

希望はすぐにしぼみました。回るコーヒークップの中にいる僕。

そして目の前にいる早月さん。このシチュエーションから経過時間は約一時間から三時間。

「ぐぼほっ」

んで、僕は急激な乗り物酔いに襲われた。

「よるひささん？」

「うぐう」

不覚。まさか、僕がこんなにも回る乗り物に弱かったとは。電車ばかり乗っていたからわからなかった……。

「楽しいですねえ」

あと何分続くんだ。この回転地獄は。メルヘンな見た目の割にかなり鬼スピードだ。

「終わったらもう一度乗りましょうよ」

「……む……り」

残る命を振り絞って声を出した。

「えー」

「頼む……ぐふっ」

早月さんのイニシャルのSはドSのSだあああああつ！
僕の意識は晴天の冬空へ飛んでいった。

「はっ」

「おお、やく。いい夢見れたかい？」

僕はベンチに横たわっている。目の前には、きりと。

「……早月さんは？」

「きょうこらとジェットコースターに行った、ほら」

指さす先は「キャー」と叫び声が聞こえるジェットコースター。

出発するとすぐ坂がありそこを上っていき、急降下。その後、上がったり下がったりの坂。そして、一回転があつて、回転地獄が待っている。そんなジェットコースターだ。見るだけで鳥肌が立つ。

「まつ、俺達はボーイズトークで盛り上がるんじゃないか」

「何そのガールズトークみたいな響き」

「気にすんな気にすんな」

あ。そうだ。サイカイは言った。「犯罪したから」と。今のきりとを見れば、そんなことをする人間には見えない。

「春」

「ん？」

いきなりきりとが言った。

「春に話したよな。あの話」

「馬鹿なガキの話？」

「ああ。そうだ」

「馬鹿なガキって誰なの？」

とりあえず、情報収集だ。サイカイのいうことが本当なら、ここから脱出しなくちゃいけない。タイムリミットも近いらしい。

「いや、知らん」

「まさかフィクション？」

「ノンフィクションだと思うが、残念ながら記憶にないんだ」

「記憶にない？ 忘れたの？」

「ん、まあ、そうなるかな」

あんなに詳しくリアルに覚えていて登場人物が誰なのか覚えていないのか。こいつの脳みその一部はミミズと同等だ。

「じゃあ聞くけど、何できりとはあの家を知っていたの？」

「……………ほ」

「ほ？」

「本能？」

サル科きりと目の生物の本能ですか。よくわかりました。

「……………アホか」

君が人外の生物だということが！

「今更何を言うんだ、やく。俺がアホだということはきみがよくわかっていないじゃないか！」

「なるほど、それもそうだね。僕がおかしかった」

そうだ、本能でアンティークハウスへ向かうこいつの脳みそはミミズ同等、公衆電話フェロモンに引き寄せらる人外の生物、『KIRITO—Ah』というUMAだ。

「じゃあ、マリーアントワネットと名乗った女の子は？」

「その子のことはわりとよく覚えているんだよな」

「ロリコンかあ。うん、ロリコンね」

将来が心配だ。もしかして、きりとが囚人になった原因って、まさか女兒誘拐・監禁なのかも。

「お、俺はロリコンじゃないからな。断じてロリコンじゃないんだからな！」

まさか、女兒誘拐の上、ツンデレに教育し直したとか。というか

……

「話を戻そうか」

「馬鹿、おまえがロリコンネタ振ったんだろうが」

「ああ、そうだったね」

珍しくきりとが僕につっこんだ。

「でさ、その子はどんな子だったの？」

「なんつーか、すごく優しい子だった」

「会ったことあるの？」

「それがわからないんだ」

馬鹿か、と思いながらやくは遠くを眺めた。相変わらずジェットコースターは騒いでるし、人々の笑い声、叫び声、中には泣き声も聞こえる。

「ねえ、きりと。世界って終わるのかな」

あれ。何で僕はきりとにこんな事を言っているのだろう。意味なんてないのに。「鍵」集めなんてきりとに言っただって解決しないのに。

「世界に何もなくなったら終わるんじゃないか」

「はあ」

めずらしくまともなことを言う。「世界が終わったら、きりと様万歳 ワールドになるに決まってるだろ」とか、突拍子もないことを言わなくて本当に良かったと思う。

「にしても、やく」

「なんだい？」

「世界滅亡でも企んでいるのか？」

それについては僕は無言を貫いていた。まさか……

「何か言えよ」

コイツにそれを言われるなんて……。

「世界滅亡なんて考えてないさ」

「ほお、じゃあどうして目をそらしているのかな？」

「そ、それは……」

何だ、この展開。いかにも僕が異常みたいじゃないか。

「それは？」

「え……」

それから先は声が小さくなってしまった。「えっと」と言っただけだ。ずだったんだけど。

「え？」

「え…… エリンギが空を飛んでいたんだ」

我ながらおバカな答えだ。

「エリンギ？」

「そ、そうだよ。エリンギだよ」

そもそも、どうしてエリンギが空を飛ぶんだ。

「あつはつはつはつは」

いかにもわかりやすい愛想笑いだ。

「エリンギ？ 何じゃそりゃ」

エリンギがわからないというのか、このサルは！

「飛行機の名前か？」

ENGINE 89とかいう飛行機があっても僕は乗りません。

「キノコだよ」

「毒キノコの名前なんてよく知ってるな！」

「食用だから」

知識の浅い男だなこいつ。

「キノコマニアーク！」

くそつ。どうにかしてキノコの話から話を逸らすのだ。

「そいやキノコって漫画でよく、下半身のア……」 「ストップ。下ネタ言うな」

畜生。エリンギを知らないのに下ネタを知ってるとは、教育が悪すぎる。下ネタよりものの名前を覚えようか。

「そうだ」

「いきなり何を言い出すこのKY太郎」

「悪かったねKYで」

「でさでさキノコが……」

おまえがKYだ。

「キノコネタはもういいから」

「そうか、じゃあどんなネタがいいのかな？ 寿司ネタかな？ 下ネタかな？ 下ネタ下ネタ？」

「いつからおまえは下ネタを連発する中学生になったのかな……」。

僕が言いたいののは」

「下ネタアア」

ゴツン バタン キュー……

「痛い」

「将来の話」

「将来？」

きりとがベンチに横たわりながら目をぱちぱちしているのを確認すると僕は続ける。

「そう。将来の夢とか。何げに話したことなかったから」

「おまえ、女の子みたいだな」

「真正正銘の男です」

ふうん、とにやつきりと。なにやら危険な臭いがする。

「何だよ……」

「証拠を、見せてみる！」

ベンチから跳ね起き、僕の目の前に移動するなり股間を凝視し、両手を伸ばしてきた。

「バカか！」

そして僕はきりとに俗に『みぞおち』と呼ばれる部分をグーでパンチ。

「ぐはっ」

ここからが予想外だった。後ろに倒れるものだと思っていたが、僕の方へ倒れてくるとは。

きりとと両手はベンチの背もたれに。僕の頭はきりとと両腕の間に。ということは……

「きりとー、やくー！」

この声は……ちづるかっなんというタイミングに来てしまったんだ。

「何してるんだ……っ」

そもそも、何故にちづるが。

「不純だ！男同士でそんな……」

「いや、僕の意志じゃないんだ、てかきりとは何でそんなにニヤニヤしてるのさ！キモいよっ」

その後、ちづるの誤解を解くのに三分ほど要した。

八月下旬。猛暑である。先月に引き続きセミがうるさい。でも最近「ミンミン」から「カナカナ」に変わりつつある。

「うっさい！だまれセミ！」

病室で叫んだ。

「病人の前で大声で叫ばないでよ。迷惑だろう？」

と、そこで寝ている彼がむくつと起きて半ば呆れ顔で言ってくれるなら私は何でもしよう。

というか、私は何やってるんだろう。にしても、彼はこれからどうなってしまうのだろう。彼が入棺され、その棺桶が土の中に埋められるところは見たくないし、そんな式があるのなら私は出席しない。そして一生独身を貫く。これは彼の人生についてのが安楽死という最悪の判決を下された場合である。

じゃあ、彼がずっとこのままだったらどうしよう。その場合は私がずっと見守ればいい。

最後に、彼が目覚めた場合。その場合はいっぱい遊ぶ。花見に行つて、プールに行つて、ショッピングに行つて、その後、本当の幸せを掴む。よし、ハッピーエンド。

なんてポジティブな考えが本気で出来れば苦労しない。残念ながら私はネガティブな人間だ。その上嫉妬深い人間で、すぐ怒り、すぐ背を向ける弱い人間だ。だから、彼を守れなかった。約束したのに。約束したのに。破ってしまった。彼に女の子らしいところを見せたかった、なんて甘えは通じないことを全てが終わった後に悟った。約束を忘れていた、なんて言い訳をするつもりはない。ごめん

なさい、謝って解決しないことはよく知っている。過去は変えられない。タイムマシーンがあつて、過去に行けたとしても私は行かない。過去を改竄して、戻つてきても私が求めていた彼とは違うから私が求めているのは、彼が起き上がつて、「やあ」でも「おはよう」でも「愛してる」でも何でもいいから、私に笑いかけてくれること。そして、そのときの条件というか理想がいくつか。ひとつ、病院の服であること。ふたつ、彼が痩せ細っていること。みつめ、彼が私を覚えていてくれていること。最後。条件というか願望。彼が私の夢を叶えてくれればいいなあ。ただそれだけ。

第十二話 早月さんのイニシャルのSはサディストのS（後書き）

うながわです。

前日の夜にあとがき書いています。

眠いです。

オレ、この作品全部投稿したら短編を書くんだ・・・

第十三話 誘拐犯の娘（前書き）

きりと、やく、ちづるの三人が夢を語っていると、空気を読まない死神・サイカイがまたも出現。今回の質問コーナーの旨は、ドクロピアスのお姉さん！？

第十三話 誘拐犯の娘

「将来の夢？」

ちづるは僕に尋ねるともじもじしながら言う。

「……さん」

「ん？」「なにさん？」

両手をアライグマのように擦り合わせながら、

「お嫁さん」

お・よ・め・さ・ん？

つまり、誰かと結婚すること。うん、その時は盛大に祝ってあげよう。

「ちなみにきりとは？」

「決まってるだろ」

歯をキラーンとさせる漫画のキザなキャラクターっぽいポーズを
すると、

「体操のお兄さん！」

と意気揚々と言い始め、人々から冷たい目で見られていた。

「おまえには無理だ。諦めて着ぐるみの中に入ってる。それが一番だ。おまえみたいな人間の出来損ないが子供の前に出たらどうなるかわからない」

ぼくもちづるもきりとも笑っていた。サイカイに見せられた肖像画が嘘みたい。そうだ、サイカイは嘘を言ってるんだ。この世界が夢の中であるはずはないし、未来のちづるが悲しい顔をしてるなんて嘘八百だ。きりとが殺人を犯したなんてのも冗談だ。全て冗談なんだ。だから、今を楽しもう。そして……

また世界が割れた。

『死神の間』と呼ばれる場所で『死神』サイカイは立っていた。不機嫌そうに。僕をチラチラ見て、その度に舌打ちをする。ああ僕

があんな事考えてたから怒ってるのね。オツケー。理由はだいたい
わかった。だから、

全力でごめんなさい。

「君が考えてることは知ってるよ。『ああ僕があんな事考えてたから、怒ってるのね。オツケー。理由はだいたいわかった。だから、全力でごめんなさい』だよね？」

「あーはい。全く一緒。褒めたくなくなるくらい」

「あのね、ボクは決して嘘はついていないから」

台詞だけ聞くと一瞬ツンデレと誤解しそうだが、顔を見れば一目瞭然。真面目だ。これは、本気の目だ。

「ボクを疑った罪状で今回の質問コーナーは一つ」

「えー」

僕は不満の声を漏らしたが、すぐにサイカイにキツと睨まれ「なんでもありません」と前言撤回してしまった。

「ほれ、残り時間三秒」

「じゃあ、肖像画のあのお姉さんの正体はっ」

「どのお姉さんだい、あと二秒」

「えええつと、ドクロピアス」

「ドクロピアス、ああ」

サイカイは床にあぐらをかいて座ると話し始める。

「彼女はゴーストマスター。死神の敵である幽霊の頂点に立つ女だね。一度見たことがあるけど、自由人だったね。うん、すごく自由人。見るだけで嫌気がさしたもん。死神の本能かな。近くにいただけでイライラするんだよね。ちよつと、一発殴ってきていいかな」
死神に敵がいたのか。幽霊と聞くと死神の下働きのような感じがする。

「世界中を探してもあんなに自由奔放で、嫌らしい女はいない」

「そんなに嫌いなんだ……。ならどうして肖像画なんて飾っておくの？」

「……うるさいな。死神の仕事なんだからしょうがないんだよ。わ

かったかこのゴミ虫めが」

僕は聞かない方が良かったと心の底から思った。

「第一あの女はボクに会う度に色々と罵ってくる。『包帯だらけのミイラめ、やーいやーい』とか、これは死神の中でもトップクラスの死神だけが装着を許されるんだ。階級も何にもない平和ボケした幽霊共とは違うつて証拠だよ。なあ、八九番目のやく」

「いや、僕死神じゃないんでそういうことわかりません」

そもそも、そのファッションはミイライメージじゃなかったのが驚きだ。その上、サイカイがトップクラスの死神だなんて。冗談にも程がある。

「でさでさ、あの女狐がよ、今度は何て言ったと思う？『ちびっこガキ』だってよ。まじふざけんなっつーの」

はあ、そんなに愚痴られても困りますよ、僕。

「はつきりいつて目障りなんだよね。目障り目障り目障り」

「あの、で、誰なんですか」

「ゴーストマスターだよ。ゴーストマスター。幽霊の頂点に立つ自由人。色仕掛けしてくるわ誘惑してくるわ、もう嫌なとこばかりだよ」

こいつ、僕の話聞いてないな。

「ん、そろそろ時間だね」

サイカイはパチリと指を鳴らす。

世界が割れた。

「あー、楽しかった」

僕はベンチに座っていた。何分かわからないけれど、時間はそれなりに経っているようだった。

「ちづる、戻ってきてたの？」

「か、帰ってもやることはないからな。仕方なくきたんだ。決して羨ましいわけではないぞ」

ツンデレ台詞を言う場所が違いますよ。

「ほへえ、じゃあそろそろあれに行きますか」

早月さんはにつこりと笑う。その女神の微笑みとは裏腹に、早月さんが指す方角には、悪魔の建物があった。

地獄の刑場

看板には恐ろしい字体でそう書いてある。

「お化け屋敷？」

「ええ、お化け屋敷です。和風お化け屋敷じゃないみたいですよ」
なるほど。絶叫マシンよりはマシだが、極力入りたくない。

「ふーん、お化けなど、このきょうこ様が粉碎してくれるわ！がっはっはっはっはっは」

その割にはきょうこさん、足がガクガクブルブルの生まれたての子鹿ちゃんですね。強がりもいい加減やめようか。

「さいかはぜーんぶお見通しですよ。入って徒歩十五秒のところ
に上からろくろつくびがでてきて」

はいはい。未来予知はやめましょう。

「ふん、お化けなんて無いに決まってるじゃない」

さっきのちづると同レベルのツンデレ。

「お化けか。やく。怖かったら私の胸に飛び込んでくるがいい。ど
んと受け止めてやろう」

「あーうん」

「しな、俺臆病だから、怖かったらしなちゃんの胸の中で失神する
よ、てへっ」

刹那、きりとの幸せそうな顔の右頬に拳が飛び込んだ。きりとの
顔は左向きになり、口からは汁が出ていた。

「うっ……」

コンクリートに膝をついて、殴られた頬をさすりながら、涙を浮かべながらしなを眺める姿は、継母とその連れ子にこき使われるシンデレラのように、正直気持ち悪かった。

「嘔泣きしたって無駄よ。この大根役者が」

殴られた上に、冷たい目で見られるきりtoには同情してしまう。

「ひ、ひどいわつ。お姉さまったら」

今度はきりとの頭に靴を置く。周囲の人々がざわついている。

「黙れサル。私是不機嫌なの。これ以上不機嫌にさせないでくれるかしら」

見ている方がつらい。何もしないで見ているだけで罪悪感がする。

「あーうー」

「聞こえないの？」

「しーちゃん」

背後で声がした。早月さんだ。何て立派な人だろう。こういう子が日本中にいっぱいいるのはなくなるんだろうなあ。

「何よ、偽善者」

彼女の言葉にはなにかと棘がある。

「『ああつ、愛しの姫君しなよ！ 姫君には棘はあるが、花はどの花にも劣らないほど美しい』と、やくが思っていますよ」

「変な風に形容するな！」

それじゃ僕がキザみたいじゃないか。てか、何故わかったんだ。

読心術をもつのはさいかだけじゃなかったのか。

「それって馴れ合いですか、それともいじめですか」

何て大人なんだろう。

「これは体罰よ」

このツンツンにも色々と問題があるけど、発端はきりとのキザ発言だ。

「友達にそんなことしちゃいけません！」

「はあ？」

まるでドラマのグレた女子高生のよう。

「だから、きりとくんが可愛そうです」

「アンタって面白いわねえ。サルに同情するって事は、同じサルだということ自分を自分から言ってるようなものよ」

あ。じゃあ僕もサルだ。

「知りません。きりとくんはサルじゃないし、あたしもサルじゃない

い」

ここまで言われて引き下がらないのは一生に一人しか見れないかもしれない。いや、多分五人くらい見れる。というか、もう見ている。

「しーちゃん。いつからそうなっちゃったの？」

早月さんの言葉に言葉を詰まらせる。

「あたしが言える事じゃないけどさ。あたしが全部悪いのは知っている」

ああ、そうだ。

僕は関西なんて行っていなかったんだ。

何があつたのか。

はつきりと。

今ならわかる。

「あたしは罪を償いに来たんです」

それは、雪の降る十二月二十四日。ホワイトクリスマス。

さつきとつぐちゃんこと笹原つぐみは、任務があつた。西京百貨店の爆破及び社長の殺害。爆死させるのが目的だ。

なぜ、さつきとつぐみなのかというと、二人は爆発物の扱いに長けていたからである。

僕はその日、ライフル銃の組み立てを行っていた。僕にとっては日常。

ちづるは十歳の女の子らしくらず、バーベルを持ち上げていた。

ちづるにとっても普通の日だ。

きりとでさえも、日常を過ごしていた。

笹原篤史はというと、やっぱり日常を過ごしていた。娘の任務なんてものは何度も経験しているのだらう。

しなはというと、一人趣味の手芸をしていた。暇な時間があればそんなことをしていた。

午後四時ぴったりに、さつきとつぐみを見送った。

「つぐちゃん……。気をつけて……」

と、おどおどしながらしなは言つと、手にもつお守りをつぐみに手渡す。

「なあに？」

「お守り……」

そのころのしなは奥手で弱気だった。

「お守り？ アンタまだそんなものを作っていたの？ 相変わらず根暗ねえ。馬鹿じゃないの。お守りなんて迷信。信じてるなんてガキみたい」

つぐみの隣で仁王立ちする、ツインテールは弱虫な少女を罵った。

「……………」

「んじゃ行つて来るから」

そのツインテールこそ、さつきだ。相手が何を考えていようと関係ない。孤高の女王様気質だった。

「つぐちゃん、帰ってくるよね」

年上の割には、年下のつぐみを支えにして生きているようだった。

「うん。帰ってくるよ。絶対帰ってくるから！ まってて、姫ちゃん！」

笹原つぐみ。元気な僕らのムードメーカーだった。ハイテンションで、しっかり者で、すごく立派な少女だった。その上、しなのことを名字が可愛いからという理由で「姫ちゃん」と呼んでいたこともあり印象的だ。

「約束だからね……」

しかし、笹原つぐみは死んだ。爆発に巻き込まれたのだ。作戦はさつきが立てた。一方が階段の下に爆弾を仕掛け、社長が降りてきたときに合図を送り、もう一方が遠くから爆破させる作戦だった。

つぐみが前者の役を担い、さつきが後者を担った。

任務自体は大成功だった。つぐみが死んだ原因は二人の情報ミスだった。

階段の下にガソリンがあったのだ。

木箱で隠れていたため、見えなかったのだ。

予定の爆発ではつぐみは死ぬことのない安全な位置にいたが、ガソリンに着火したため、大爆発となった。

巻き添えとなってつぐみは死んだ。

実の父である笹原篤史はつぐみの死について何も言わなかった。むしろ、さつきに「よくやった。任務は大成功だ」と褒めたのだ。だがさつきの心は罪悪感でいっぱいだった。

この事件で、先に豹変したのはしなだ。さつきがしなに一言謝った。甘かった。しなのことだから責めないだろうと思っていたらしい。そんな彼女から出た言葉は、

「さつきが死ねば、つぐちゃんも死なずにすんだ……」

それからしなは一ヶ月と九日、誰とも関わらなかった。

次の日、さつきが変わった。

「今日はクリスマスだ！しかしサンタさんはあたしたちのもとへ来ない！それは何故か！真面目に会議しよう！」

まるでつぐみようになってしまった。

きつと、しなのためにつぐみの代わりになろうと、決意したんだと思った。

その日からさつきはしなに明るく接し、心を開こうと努力していた。

「今日はお正月だから福笑いをしよう」とか「花札しよう」などと誘っていたが、しなは微動だにしなかった。

二月三日。口を開いたしなは変わり果てていた。

「しな！ 鬼は外、しょう！」

「……………れ」

僕はそんなさつきを見ているのが日課だったから、切実に覚えて

いる。

「ん？」

「くたばれ……」

一ヶ月と九日ぶりに聞いた言葉が暴言だったとしても、さつきは動じず、手をさしのべた。

「しな、そんな汚い言葉使っちゃダメだよ。みんなで豆まきするから、一緒にやろう、ね？」

その言い方といい素振りといい、つぐみと似ていたのだろう。だから、しなはその手を取った。

待てよ。罪は十分償ったじゃないか。なのに、今更どうしてもう一度罪を償おうとする？

パズルのピースは揃った。

ようやく解った。

早月さんとさつきの関係が。

今までの推測を条件に従って消していくと、残る物がある。

元々、二重人格だった。

二重人格だが、そんなに変わりはない。

意識を共有する二重人格。

あの事件の後、早月さんとさつきは変わった。

早月さんはおっとりとしていて、さつきは元気に。

しなを一生懸命誘っていたのは、さつき。

そして、事件を起こしたのは早月さんではないのか。

さつきは早月さんの罪を償い続けている。

しかし早月さんは、自分で罪を償おうとし、

今日現れた。

早月さんは、何をして罪を償おうとするのか。

「しーちゃん」

他の人は皆黙っていた。本当にありがたいと思う。

「『辛苦殺気』のこと恨んでるでしょ」

静かに首を縦に振り、そのままうつむく。

「でも、さつきの事は責めないであげて」

しなは顔を上げ、早月さんをじっと見つめる。

「もう、いいんだよ。強がらなくなつて」

きつと、言葉が出ないのだろう。早月さんが、あまりにも「笹原つぐみ」に似ているから。

「あたしは罪を犯した自分を罰せなきゃいけない」
わからない。

早月さんの自分への罰とは何か。

「あたしがいなければこんな事にはならなかったもの。もっと早くこうするべきだったんだよね」

早月さんは本当はいてはいけないのか。

早月さんはさつきの別人格。

「……え」

しなの小さな口から言葉が漏れる。

「しーちゃん。あたしね」

「……………ん」

震える声は聞き取れないほど小さい。

「これだけはもう一度言いたかったの」

「な…に？」

早月さんは背伸びしてしなの頭をなでると、涙を浮かべながら言う。

「ごめんね……………」

それだけしか聞こえなかった。そして、ふらつく。

「さっちゃんっ！」

しなが早月さんの元へ駆け寄り、その身体を受け止めた。

「もう、いいのに」

その時僕は久しぶりに見た。しなの頬を伝う涙を。誰かを抱きし

める姿を。

「うっ……」

早月さんの身体を抱きしめていた。冬の遊園地で、人の目も気にせず。

「さっちゃん……！」

ガシャン

また、世界が割れた。

やっぱりサイカイだった。

「おめでとう。二本目の鍵だよ」

サイカイの手の上にくるくる回る鍵。赤色の宝石が青の宝石になっていること以外は、前の鍵と同じだ。

「……そうそう、残念なお知らせ。君の余命はあと二ヶ月だそうなの？」

医者から『残念ですが君は三ヶ月生きられないかもしれない』と言われるなら現実的だが、死神に『君の余命はあと二ヶ月だそうなのなんて言われたら非現実的だ。死神は死にそうになった人の魂を狩りに来るっていうから……。うーん。迷宮入りだ。』

「だから、現実世界の君は、あと二ヶ月で死ぬんだ」

「え？」

「まったく、物分かりが悪い奴だな。入棺されるの」

「それってつまり」

サイカイは満面の笑みを浮かべる。

「魂だけさまようことになる」

「え」

「で、ボクが君の魂を狩る」

死神のお仕事ですか。魂を狩っていた方が死神っぽいかもしれない。ついでに鎌とか持ってたらもったいいい。

「んじゃ、僕の魂はどうなるんだい？」

「無になる」

僕が消える、だと？そう考えると怖いな。

「まあ、消えてもらった方がボクにとっては好都合なんだけどさ」

この薄情者！

「では恒例の質問タイム！」

「三つ？」

「今回も一つで」

気分屋さんにも程がある。

「どんなことでもいいのかな？」

「ボクが答えられる範囲ならね」

今、僕が気になること。それは

「現実世界の僕は、どうしてる？」

「生命維持装置につながれて寝ている」

生命維持装置って、僕は植物状態なのか。

「もうちょっと詳しくできるかな」

「生命維持装置につながれてスヤスヤ寝ている。見舞いの人に来る

みたいだよ」

平坦な口調で話す。かまないので不思議だ。

「見舞いの人って？」

「筋肉ムキムキのボディビルダー」

「まじで？」

「残念ながら……」

筋肉ムキムキのボディビルダーがどうして植物状態の僕の元に来

るかわからない。

「嘘です」

「で、本当は？」

「エロ本に出てきそうな、巨乳を遙かに超える女の人」

………は？

「と、常に失恋したような顔のお姉さん」

「はあ」

二人とも僕の記憶にはない。第一、ちづるとさつきやきょうこが来ないのがおかしい。

「それとかっこいいスーツをビシッと着こなした二枚目のお兄さんと馬鹿丸出しの女子高生がたまーに」

こいつ、女性に対しては辛辣極まりない表現をするが、男性についてはなかなかいい表現をする。まさか、同性愛者なのか！

「ねえ、ちなみに僕はかっこいい？」

ついノリで口に出してみた。

「ブサイク」

終わった。

「んじゃそろそろ。がんばってね。木瀬やく」

「え……」

そしてまた、世界が割れた。

僕がいたのは学校だった。窓の外は暗い。時計は午後六時を示している。

「やく。わかった？」

目の前にはさつきが立っている。僕を見下すように。

「あたしと、早月の関係」

即座にドツと頭の中に記憶が入り込んでくる。お化け屋敷でちづるが失神したり、きょうこが失神したり、きりとが泡吹いたり。

「うん」

「基本人格はあたし」

知ってる。

「で、あの日を境に変わってしまったが、あの日から二重人格になったというわけではない。そこまでは簡単だよ」

簡単じゃなかったよ。そこまでたどり着くのに大変だったなあ。

「全部わかるんだよね？」

「うん」

「じゃあ、クイズ形式でいきます！」

今までのシリアスなムードが台無しだ！

「えっと、あたしの誕生日はいつでしょうか？」

早速関係ない問題が来た。

「……五月五日こどもの日」

「正解。やくくに十ポイント追加！」

いや、一人ですから。

「……気を取り直して第二問」

ここからが正念場、だよね？

「あたしのツインテールの角度は何度でしょうか？」

「知るかつ」

にやーつと笑うさつき。

「正解は三十四・二度でした！」

「そんな細かいの誰が計ったの？」

「無論あたしのルームメイトのやつちゃんだよ」

やつちゃん？ ああ、ちづるか。

「第三問、あたしの本名は何でしょうか？」

「神来早月」

「なんでわかるの」

さつきのにやにやした顔から一変、驚愕の表情を見せてくる。何となく見ていて面白い。

「早月さんが教えてくれた」

「ふうん。じゃ、第四問、しなの本名は？」

さつきに思いつき関係ないな。

「姫……」

姫ちゃん、だから姫井。そこまではよく思い出せた。だが、下の名前がわからない。

「姫井……」

チラリとしなの席をながめる。机の中に教科書があればいいのだが、あいにくお堅い人間のため置いていないようだ。

ヒントは使えない。こうなったらもう、脳内で連呼してみるしかない。しなから連想する名前をならべるんだ！

（しなしなしなしなしなしなしーなしーなし、ししな、しなな）
バナナみたいになった。

「姫井しーな？」

そうだ。しいなだ。ありがとう、想像力。当てずっぽうだけど。

「姫井椎名」

「当てずっぽうか。まあいいよ。正解」

心の中で「よっしゃあ」と静かに喜んだでしまった

「第五問、あの日までのあたしと早月さんは一般人から見てどうだった？」

これはわかる。これが最大のトリックだった。

「二重人格なのにはほとんど違いはなかった」

「正解。あんた探偵になればいいよ」

「僕には人望なんて無いさ」

ふふーん、と鼻で笑うとさつきはカバンの中からいちご牛乳をと
りだし、飲み始める。

「んんん、ん、んんん」

そして、鼻で話そうとがんばる。

「飲み終わってからでいいよ」

ズゾゾゾゾゾーと、おぞましい音を立てて飲み終わるとさつき
はいきなり仁王立ちをし始める。

「続いて第六問！」

いきなりテンション変わったーっ

あ、牛乳パワーか。

「あたしはいつ早月さんと出会ったでしょうか？」

「えーと、それって遠回しに『あたしはいつ二重人格になったでしょうか！』ってこと？」

「おーいえー」

さらにもう一つカバンの中から牛乳を取り出して飲み始める。

「んー、五月五日？」

「またもや当てずっぽう。」

「……………」

さつきの牛乳パックからぶくぶく音がする。幼稚園児がよくやるあれか。

「ちがう？」

大きくうなずく。やっぱりか。

「んっん」と、牛乳を飲みながら喋ろうとする。馬鹿の典型例だ。
「えっとね、あたしが早月と出会ったのはね八年前だよ」

「八年前……って」

「うん。殺人鬼としての猛特訓を強いられていた頃」

あの頃は僕も頭の中に色々と知識を埋め込まれた。拳銃の仕組みとか組立方とか。そういうえば釘バットの上手な作り方も教わった気がする。

「一人、泣いてたの。『もうこんなのは嫌だ、帰りたいよう』って」

「僕もそうだったかな」

「でね、ある時、声が聞こえたんだ」

「僕もそうだったかな」

ああ、思い出すだけで気持ち悪い。

「『さつきちゃん、強くなる？』」

それが、神来早月の精神異常。もう一人の自分が語りかけてくる、か。

「『強くなれば帰れるよ。あたしも手伝うから』ってね。あたし、ダメだったんだよね。そんなのに耳を貸しちゃったから」

「そうだ。」

「でもね、あたし後悔してない。もう一人のあたし『早月』のおかげでみんなと仲良くなれたんだ」

「みんな弱虫だったんだ。」

弱いのは僕だけじゃないんだ。

あのうるさいセミはどこへ行ったのだろう。いつの間にかいなくなってしまった。

そう、彼のように。そして、今度は永遠になくなってしまう。

彼が死ぬのだ。年末には安楽死という運命が待っている。

彼の妹は、彼が望んだこと、と言っているが確証はない。確証がない、ことを望んでいる。

私はいつからこんなにも弱虫になってしまったのだろう。彼がいなくてもこんなにも弱くなるとは思ってもいなかった。

「あのさ」

私は眠っている彼に話しかける。

「今日はお弁当を作ってきたんだ」

バッグの中から包みを取り出す。

「今日のは自信作だ」

包みを開けば、弁当箱が顔を出す。

「じゃっじゃじゃーん」

弁当箱のふたをゆっくりと開く。

「レモンごはん」

レモンごはんとは、白いご飯に大量のレモン汁をかけた、いわゆるごはんのレモン漬けだ。

「うん。おいしい」

酸っぱくて苦い。ある意味アンバランスな一品だが、栄養価バツグン。特にビタミンCが。

彼は相変わらず無反応だ。

（うーん、切ないなあ）

ふいにコンコンとドアが叩かれた。

「はい」

「先輩っ」

ガラッとスライド式のドアから現れたのは私の後輩であり、彼の後輩だ。

「おお、ふーちゃん」

「ご無沙汰してますー」

ふーちゃんとは私と彼と友人達がつけた愛称だ。本名は「結城譜蘭」という、欧風な名前。「ふらんちゃん」と呼ぶのは疲れるという、馬鹿馬鹿しい理由で「ふーちゃん」となった。職業は男子高校の教師。特徴は、本当に日本人かと疑うくらいの胸。特大のメロンやスイカを堂々と超える大きさの、ふーちゃんの胸は、本当に大きい。恐る恐る聞いてみたところ、下着は特注だそう。他に特徴といえば、青森の恐山からやって来たイタコであること。日本イタコ協会認定のトップクラスのイタコ。教師が副業かと思うくらいだ。

「あ、先輩何食べてるんですか」

タツタツタと私に駆け寄ってくる。

「レモンごはんだが、食べるか？」

「はいっ」

世界遺産を見るような目で私のお弁当を見つめる。

「久しぶりですー。先輩の手料理」

私が割り箸を渡すとすぐさまパチンと割り、レモンごはんに手をつける。

「いただきますー」

「めしあがれー」

レモンごはんを上手に乗せた箸を口に運ぶなり、青い顔をした。

「先輩……」

「……うん。言わなくてもわかる」

彼女がいるから私は生きていられる。

彼女は私の支えだ。

彼女がいなかったら私は、とっくのまっくに死んでいるだろう。

第十三話 誘拐犯の娘（後書き）

鰻河です。

サイカイとゴーストマスターは喧嘩がすごく低脳になってしまいました。

いや、むしろト・とジェ・ーかなあ・・・

第十四話 君は…だれ？（前書き）

サイカイはやくに非常なモノを見せる。

それは卒業式の前日。まだ少し早い桜が、桜吹雪を形成し、幸福は不幸へと反転する――

高校生編、完結。

第十四話 君は…だれ？

「早月には感謝してるのに、早月は何もしなくてよかったのに」
さつきは涙をこらえているようだ。

「早月、いなくなっちゃったの」

ああ、それが早月さんの「償い」……

「あたし、だめだな」

僕はさつきに何が出来る？

「早月に何もしてあげられなかった」

僕が出来ることは……ただ一つ。

「早月さんはきつと、さつきに独り立ちしてもらいたかったんじゃないかな」

だから、さつきの元を離れた。

「僕一人の意見だけどき、さつきにはいつもハイテンションでいてもらわないと、なんか変なんだ」

さつきは黙りこくっていたが、

「うんっ」

と元気よく返事をし、僕は安堵し、夕刻の教室を去った。

誰もいない、そう信じていたがさつき以外の人影を見た。

「あらし？」

ボロボロだ。傷だらけで、足を引きずってこちらへ向かってくる。

「あら、誰もいないと思いましたのに。めずらしいですね。冬休みに」

「どうしたんだよ」

「ちよつと、警察とやりあつてきましたわ」

昨日、警察がいなかった理由。

あらしが大事件でも起こしていたのか。

「手こずりましたのよ」

「なんでこんなこと……」

「私の趣味ですわ」

あらしはと僕とすれ違いに歩いていった。
ギコギコと奇妙な音を鳴らしながら。

部屋に帰るなり、僕は叫びたくなつた。

「やあ、待つてたぞ」「ぐ……」

ちづるがきりとをイスにしながら座つていた。

「やく、こいつはちづるじゃない……」

「うん、わかつてる。ちづるはこんなことしない」

「誤解だ！きりとはこういうことをすると喜ぶってさつきが！」

正真正銘ちづるだ。

「わかつたよ。信じる信じる」

「で、覚えているか？約束」

ああ、あの話か。あの話はちづるがあまりにも馬鹿なことをするからナシにしようとしたけれど、いまのちづるにそんなことを言ったら殺されそうだ。

「で、願いととは？」

「えっと、私を嫌いにならないでくれ」

まあ簡単なのだからこれ以上話を発展させるのはやめておこう。

「……うん。わかつた」

——僕は生涯、松崎千鶴を嫌わないことを誓います

その時、世界が割れた。

「ブラボー」

パチパチパチとたるそうに手を叩くサイカイを僕は見つめていた。
「ありがとう」

「最後の鍵がボクの手元にある」

デザインは前と同じだが、宝石の色が緑に変わった鍵がサイカイの手の上でくるくる回っている。

「じゃあ、僕は帰れるのかな？」

「いや、最後に試練っぽいがある」

「詐欺だ！」

「何が詐欺なんだ！」

「鍵を三本集めれば帰れるって言ったのはサイカイだ！」

「あーごめんごめん。ミス」

ミスってあんた……、と僕は怒鳴りたいのを我慢する。

「じゃあ、最後の質問。どうぞ」

これは最後に残しておかなければいけない、と思っていた。

「サイカイ」

「？」

「君は『さいか』だよ」

「……いつからそれに？」

わからない、と僕はジェスチャーで表現する。

「ボクは『さいか』であって、『さいか』ではない」

「は？」

「輪廻転生を繰り返した『赤井彩華』だ」

輪廻転生、それはつまり生まれ変わり、ということ。じゃあ、さいかは既に死んでいるのか。

「キミが考えていることはよくわかる。だから」

サイカイはその場でくるりと回る。

それと同時に世界が変わった。

辺りは暗い。時計の針は深夜二時。そして、桜があった。ということは春だ。僕がいるのは学校の校門前だ。校門に掲げられている看板には、

「卒業式？」

卒業式と書かれた看板。

「うん、夜が明ければ卒業式だ」

背後にはサイカイ。事態を察するに僕らは夜の学校に忍び込んで
いるようだ。

「なんでいるの？」

「いちゃ悪いのかい？」

「そんなことはないけど」

サイカイはふつと笑った。

「卒業式なんてクソくらえ」

表情と言葉があっていない。

「ほら、呼んでるよ」

校庭に立っている七人。

「サイカイはみんなには見えてないの？」

「うん。ボクは死神だし」

サイカイは校門にジャンプで上る。一・ハメートルはありそうな
のに軽々と上るなんて死神をなめていたようだ。

「やくー！写真撮影！みんなで夜の学校をバックに卒業写真だ！」
きりとが呼んでいる。

「うんー？」

卒業写真？それはつまり……

「キミは卒業生だ」

「随分と時が流れましたね」

「 unnecessary 時間はカットさせていただいた」

高校生活は必須だと思う。

「早くくるですよー」

さいかもみんな笑っている。が、その中に見たことのある顔を見
つけた。

あの肖像画とそっくりだ。

さつきとしなだけ。

どういうことだ。

「うん。あの肖像画はこのころのさつきとしなだからね。まあ、行

って来なよ」

「……うん」

僕は走る。夜桜舞う校門を駆け抜けてみんなの元へ……行っただき、息を呑んだ。

「っ！」

あらしが、血を流している。

「あらし！」

左胸を刺されたようだ。

「誰だ！」

あらしに不意打ちするなんて、並の人間では……

「……」

きりとが一人笑っている。

赤く染まる小刀を持つ右手は次にさいかの首、外頸静脈と呼ばれる部分を狙う。

「させないですっ」

ぐにやりとサイコキネシスで小刀が曲げ、さいかは間一髪で難を逃れる。

「きり……と……？」

しかし、呼びかけたが遅かった。しなが血を流して倒れた。あらし同様左胸を刺されている。左手に持つ鋭いスピアのナイフによるものだ。血を浴びる姿は、沈黙したままだ。それが不気味で恐ろしくて僕は、怯えている。

「やく！」

足がすくんで動けない僕の手を掴んで校門の外へと走る。

「……あ……あ……」

「逃げるです……！」

さいかが叫んだ瞬間、僕は目を瞑ってしまった。きっと、さいかは……

「きょうこ、早く！」

さつきが一人棒立ちするきょうこに呼びかけた。

「……………ああ……………」

棒立ちしてしまうのも無理はない。僕だって同じ状況だ。きょうこは強いと思う。僕は何もできなくてちづるに引っ張られているだけだが、きょうこはみんなと一緒に走っている。

一番つらいのはきょうこのなのに……

ズダンと重い音がした。

さつきが何も言わず倒れていた。

「あ……………ああ……………」

胸に投擲用のナイフが刺さっている。

「さつき！」

ちづるがさつきを揺さぶる。

「さつき！ どうして！」

僕は悟った。こちらが元腕利きの殺人鬼だとしても、三年の平和により腕は鈍っている。そして対するきりとも元殺人鬼だが、修練を怠っていないとしたら別だ。

さらにきりとは殺人技術が全てにおいてオールマイティー。

つまりこれは、ほぼ勝ち目のない勝負だ。

「ちづる、全力で逃げるぞ」

「……………ああ」

「やくも逃げることに専念しろ」

僕は静かに頷いた。やっと真面目に返事が出来たような気がする。「交差点をバラバラに逃げる！」

きょうこの指示。それは一番妥当な判断だ。僕は左に曲がって駅側へ、ちづるは正面の商店街へ、そしてきょうこは右に曲がって寮の方向へ走っていった。駅と商店街は近い。上手く逃げられれば合流できるはずだ。

走って五十メートルほどのところで振り向く。僕の方角には走ってきていない。学校から駅は割と近くて距離は三百メートルほど。運動能力の低い僕でも全力で走りきれそうだ。

「……………佐古部きりとは寮の方向へ向かった」

背後でサイカイが呟いた。僕と同じスピードで飛んでいる。

「サイカイ……」

仕方ない。サイカイは自分が死ぬのを見たのと一緒にだから。

「そして、『淀見恭子』は殺される」

「淀見恭子」が、きょうこの本名か。きりとは、何がしたいんだ。みんなを殺して、死ぬまで追いつめて。

「だから、囚人だ」

その理由がわからない。

「これは実際にあったことを再現している」

駅が見えてきた。駅前に立つ一人の影。

「ちづる！」

「無事だったか……。となるときょうこが……。いや、どちらにしても、行くべき場所は」

駅の向こう側にある、交番。元殺人鬼である僕らにとっては行きにくい場所だ。

「さあ、急ごう」

僕はちづるの背後に見た。

ナイフを片手に不気味に笑う、殺戮者を。

「き……りと？」

「は……」

ちづるも気付いたようで、血塗れの男を睨む。

「おまえは何故……」

答えない。

「いくぞ！逃げるんだ！」

僕の手を握って走る。

「ちづる、僕をかばってちゃ、難しいでしょ」

「……………」

「僕が止める」

最初で最後の格好いい台詞を言ってみた。

「……わかった。すぐ戻る！」

ちづるが夜の街へ消えた後、僕は殺戮者に言う。

「……何がしたいんだい、きりと」

僕はきりとに問いかける。

しかし答えず、僕を目掛けて飛び込んでくる。

ナイフが振り上げられ、痛みが走ろうとする瞬間、はっと気付いた。

「誰？」

そして、粉々に世界が割れた。

右の眉毛の上にホクロがあった。

きりとにはそんな物はない。ルームメイトだからすぐわかる。にしても、顔は整形したかのようにそっくりだ。

「サイカイ」

「……さっきのは、きりとじゃないよね」

コクリ、と頷く。

「おめでとう」

それだけ言い放つ。

「キミは、現実世界に戻るといい」

「ねえ、あの後どうなったんだい？」

「キミは、とっさの判断でしゃがんだんだ
しゃがむ？」

「あのきりとは心臓を狙っていた。しゃがんだ時に、首にナイフが刺さった」

「首に刺さった？」

「じゃあ、どうして生きているんだ？」

「その後、すぐにあの子が来たんだ」

サイカイの視線の先には、『あの子は、ボクの自己判断で消した子』と説明した胸の大きい女の子。

「あの子は、キミの後輩で、キミを慕っていた」

「あの子は、生きてるの？」

「まあ、普通の人間じゃないからね。それは、現実世界でわかることさ」

ゆつくりと、僕の手を握るサイカイ。

しゅるり、と頭の布が緩み、顔を見せてくれる。

「やっぱり、さいかだね」

「……輪廻転生を繰り返した後だけど」

顔は少年顔だけど、どこかさいかに似ている。

「『ですー』ってつけて話してみてよ」

「……目を閉じれば、戻れるですよ」

僕は頷く。さいかだ。

「やることはわかるよね」

もう一度頷く。

「きりとを出してみせる」

「ファイトです！」

はじめて、サイカイの満面の笑みを見た後、ゆつくりと目を閉じた。

第十四話 君は…だれ？（後書き）

鰻河です。

遂に高校生編が完結し、物語も折り返し地点となりました！

次回からは、大人になったちづるたちの、「再会編」が始まる予定です。

シリアス度もギャグも……レベルアップしてるかなあ……

第十五話 不思議な再会（前書き）

目覚めると、そこは病院。

色々と頭の中がごちゃごちゃしているなか、

いいタイミングでやって来たのは、それはそれは美形の男性。
黒スーツを着ていることから、察するに彼は闇医者か！？

第二章 再会編スタート！

第十五話 不思議な再会

天井がある。白くて清潔そうな天井。背中感触はふかふか。病院だ。

なんか息苦しいと思ったら人工呼吸器か。さて、起きあがって外してみるか……

そこで気付いた。

起きあがれない！

腹筋が退化している！

さらに気付いた。

僕は高三の時に眠ったのだ。今は西暦何年だろう……さて、この場合どうすればいいんだろう。

病院には、便利なベッドがある。スイッチを押すだけで、ビゴースと高さやら角度やら色々と変えられるのだ。きっとそのリモコンはベッドの脇に……

あったあった。にしても広い部屋だな。きっとランクの高い個室だ。

僕はもう一度気付く。

眼鏡がないからあんまり見えない！

試しに一番下のを押してみるとしよう。

ビゴース……

おお、足もとが上がったぞ。楽しいなあ。

何てことをすること約三分。扉がノックされた。

「失礼します」

……げ。医者だ。怒られる！

ガラーとスライド式のドアが開かれ、その先に立っていたのは、黒いスーツの男性だった。

「……………」

眼鏡がないからうつすらとしかわからない。が、黒いスーツの医

者なんて闇医者でなければいるはずがない。（普通の医者でもいるかもしれないけど）

なら、見舞いの人間だ。

「幻覚を見た」

男性はそれだけ言い残し、スライド式のドアを閉める。

さて、そろそろ人工呼吸器でも外すか。

外すのに要した時間、約十秒。

「……………」

スライド式のドアがノックなしに開き、男性が入ってきた。

「……………え」

あ然としているようだった。まあ、仕方ないと思う。ついさっきまで植物状態で寝ていた人間がむくつと起きあがって人工呼吸器やら生命維持装置を自分で外しているのだから。

にしても誰だろ、この二枚目。……って、サイカイの言っていた「かつこいいスーツをビシッと着こなした二枚目のお兄さん」ってこの人か。

「兄さんっ!」

万里かよっつ

「兄さん起きたんだったらナースコール押してよ!」

ああ、そうだったなあ。いやはや、入院するのは初めてなものでして。次回からはしっかり押します。

「あー、はい。万里?」

一応確かめてみる。

「はい。木瀬万里です」

僕の手をぎゅーっと握り、顔を近づけてくる。

「兄さん、覚えてるよね!」

にしても僕とは違いイケメンだなあ。仕事何してるんだろ。後で聞くとしよう。

「弟の万里です!」

「うんうん、覚えてる」

何か性格変わってない？僕の記憶だと万里は、暗くてタロット占いと占星術が趣味の男児だったはず。現在、木瀬万里は僕が見る限り元気すぎる。きつと別人に違いない。

「万里、今何歳？」

「二十四ですが……」

僕は高三の時に眠って、万里が一つ年下だから、うーん、脳みそまで退化しているようだ。

つまり、万里が十七歳の時に僕が植物状態になって、今万里は二十四歳……

うは。七年も眠ってたのか。うん、医者もよく生かしてくれたな。七年間植物状態で眠ってて目覚めた僕は、ギネス世界記録に載るだろうか。

「じゃあ、僕は二十五歳？」

特に変わってないように思える。気のせいかな。

「兄さん、お腹空いてませんか？」

「え？」

言われてみれば、腹ぺこだ。

「今すぐ高級弁当のデリバリーを頼みますけど……」

「ちよーつとまったあ！」

スライドドアがガラガラと開き、ショートヘアの女性が姿を現す。

畜生、先を越されたか。

「あ、松崎さん。こんにちわー」

ハアハアと息を吐き、ベッドに横たわる彼を見る。生命維持装置が外れている。さらに彼の弟である、万里と仲良く話しているではないか。

「め……飯なら私が手作りした！」

いつ起きるかわからないからな。飯はいつでも準備しておかなければ……

「お、手間が省けますね……」

私は感激した。彼がむくつと起きあがっている。なんとも嬉しいことではないか。彼が起きて初めて会話した人間は弟の木瀬万里。なんとも憎らしいことではないか。

「どうしておまえがいる！」

「何を仰いますか、松崎さん。僕は紛れもない、兄さんの弟ですよ、むかつく言い方だ。」

「何を言うか、このブラコンめ！一線を越えようなんて許さないからな！」

「僕はブラコンじゃありませんし、ブランコでもありません！これは兄弟愛です」

兄弟愛だと？何をぬかすかこの小童が。

「あのねえ」

彼が遂に口を開いた。

「一応病室だから！」

怒ってしまった。松崎さんということは、彼女はちづるなのか。生きていた……。それだけでも良かった。

「じゃっじゃじゃーん」

バッグの中から弁当のような包みを持ち出す。

「レモンごはん」

弁当箱の中から現れるお茶漬けのような食べ物。

「ささ、召し上がれー」

なんと平和な光景だろう。

「んじゃあ、食べてみるよ」

万里が「やめた方がいい、死ぬよ」とジェスチャーをしている。

僕が「そりゃわからない。美味しいかもしれないし……」と、軽くジェスチャーを返すと、万里の顔面は蒼白に。

「いただきま……」

筋肉が衰え、みすばらしいほど細い腕を眺めながら、どうにか持

つことの出来たスプーンでお茶漬けをすくい、口に含んだときだった。

「どーだ。自信作なんだ」

吐き気がした。まだ食道すら通っていないのに、胃酸が逆流してくる。脳と胃が同時に悲痛の叫びをあげている。味覚とは恐ろしいものだ。

「あ……ああ……」

僕は言葉にならない声を出していた。ついに声帯の機能まで衰えてしまったようだ。ちづるの「レモンごはん」なるものに僕は命を脅かされてしまっていた。万里の言葉を信じるべきだったな。やっぱり持つべき者は、ブラコン……いや、兄思いの弟である。

「美味いかっ」

僕はそのままベッドに倒れ伏す。神経までやられてしまったらしい。以後、ちづるの料理には気をつけよう。さすが、元殺人鬼。料理まで殺人レベルだ。

「やく！ どうしたんだ！ 返事をしろっ！」

誰かに味見させましたか、自分で味見しましたか、材料に変な物混ぜてませんか。それだけを聞きたい。

やくは私のお弁当を食べるなり、ベッドに倒れてしまった。

ああ！ 私は彼の身体のことを考えていなかった！

あんなに冷たいごはんを病み上がりに食べさせるなんて！

以後、気をつけようと思う。ならば、次のお弁当は「レモン炊き込みご飯」だな。おかゆのようにやわらかく温かく炊くのだ。きつと喜ぶぞ。

「ちづる、君の料理は世界一だ」

と言ってくれるはず。精が出るぞ。今からでも下ごしらえだ。まずはレモンを薄く切って、中性洗剤に一分間浸す。さらに米も中性洗剤でピカピカに洗うんだ。よし、余計な菌は一切無い、健康食品

の出来上がり。うふふふふふ……。

「何を笑っているんですか、このサディスト」

「あ、悪いな。人が倒れているのに妄想でつい、な」

「やめて下さい、松崎さん。今後一切、病院に手作り弁当は持つてこないで下さい」

「え、どうしてだ？」

手作り弁当は愛がこもっているんだ。それをなぜ、拒絶する！

「あなたの弁当は、人を半殺しにするほどの殺傷力があります」

「いや、弁当箱のことなら謝る。この通りだ」

「は？ 弁当箱？」

「え、気付いていないのか？」

私は弁当箱の底を外し、中身を見せる。

「うへ、ご飯が飛び散ってるじゃないですか。掃除して下さいよ」

ああ、忘れていた。まだ残っているのに弁当箱の底を外したらいけないな。資源と愛の無駄だ。

「ああ、うん。掃除は得意なんだ。私が通った後は草一本残らないと評判で」

「それって、枯れるって意味ですよ。つか、冗談は顔だけにして下さい」

わー、なんとという失態……、私は自分を疫病神と名乗ってしまった！

「とりあえず、こんなものがあるのだ。いつ、やくに近づくえっちなナースさんが現れるかわからないし」

「病院の人を信じましょうって……」

弁当箱の底には、投擲用のナイフがある。毎日毎日欠かさず磨いている、私のとっておきの一品だ。えっちなナースさんがこれを見たら、一発で逃げるだろうし。逃げなかったら刺すだけだ。刃物の常備は当たり前だね。

「……すみません。僕がストレートに言うべきでした」
「は？」

「料理に変な物を入れないで下さい。殺傷能力があるのは料理の方です」

え。

「頼むから兄さんを殺さないで下さい」

そんなことしてるわけじゃないか。やくを殺すなんて馬鹿げたこと……。

「じよ、女性の料理を批判するなあああ！」

私は廊下に向かって走り出した。

あんなに言うことないじゃないか。三時間かけて作ったものだぞ。まごころと愛と愛情をこめて作ったんだぞ。やくが回復するように作ってたんだぞ。病院食じゃ栄養が十分にとれないだろうと思って、ビタミンCたっぷりのレモンを三時間、中性洗剤に浸けたんだ！

その時、声が聞こえた。

——おまえは何を望むか——

頭の中で響いた美しい声。そして、病院の廊下を歩く、不思議な三人組を見た。

「誰……」

不思議というより不可解だった。足がないのだ。透けて見えない。「わらわか？」

三人の中の一人だけ他の二人とは確実に違っていた。周りは人魂らしきものが漂っているし、他の二人とは比にならないくらい服装が豪華で、耳にはドクロのピアスがはめられている。

「わらわは黄泉の国の帝じゃ」

そういわれてみれば、わかる気がする。なるほど、幽霊か。じゃあ、後ろにくっついて二人は従者か何かか。

「人呼んで、ゴーストマスター」

漫画のコスプレとは思えない。そういう雰囲気を漂わせている。「まあ、信じられんと思うじゃるが、信じてくれぬか？」

自然と頷いてしまう。

「おまえには思い人がおるの？」

「……あ、はい」

「ふむ、その思い人は死神に取り憑かれておる」

え。まじで。せつかく戻ってきたのに？

「まあ、そう慌てるでない。わらわ達はその死神を退治しようではないか」

幽霊が、死神退治？

「じゃが、わらわ達は死神と違って自由に動けぬ」

そもそも、死神とかがわかりません。死神って死にそんな人の元に現れるんでしょ？ どうして、七年の眠りから目覚めた彼の元へ来るのか意味がわからん。第一、死神は自由に動けて幽霊は行動が規制されるなんて差別じゃないのか。

「契約者が必要なのじゃ」

よくよく考えれば私って、超常現象を体験をしているのか。

「契約者をもてば十分に動ける。死神退治さえすれば、おまえの思い人は救われる」

その言葉に私は、ピクリと反応したらしい。

「わらわと契約をしなければ、おまえの思い人は十日以内に死ぬ」

「ふざけんな」

そんなこと、信じられるもんか。

「ふむ、わらわの誘いを蹴ると申すか？」

「……いや、そうとは言ってない」

正直、頭の中がごちゃごちゃだった。

「早くしてくれんかの。わらわは多忙なのだ」

「……………わかったよ」

呑むしかないだろう。嘘だとしても大きなデメリットはなさそうだし、仮に本当だとして契約を蹴って彼をなくすなんてもったもな
ことだ。

「了解した」

そう告げると、足のない奇妙な連中、「幽霊」はかすんでいき、見えなくなった。

第十五話 不思議な再会（後書き）

鰻河です。

今回から舞台は現実世界に！

大きくなった皆をたんとご覧アレ、
と言いたいけれど結構、いな
くなっています。ごめんなさい。

第十六話 佐古部桐斗と佐古部優斗（前書き）

幸福なもつかの間。

目を覚ましたら、黒猫に扮したサイカイが病室にいた。

そのサイカイから辛辣極まりない、あまりにも残酷な告白を受ける。
「あなたの余命はあと十日です」

第十六話 佐古部桐斗と佐古部優斗

僕が目を覚ましたのは、空が真つ暗なときである。死ななかつたらしい。

しかし、異常を発見。僕の目の前、いや、僕の足の上に一匹の黒猫を見つけたのだ。不思議なほど目は赤褐色で、首には包帯のような布を幾重にも巻いている。

包帯で気付いた。

「サイカイ？」

誰もいないから問いかけてみた。

「……にゃーご」

「んなわけないか」

包帯だからサイカイ、黒い毛だからサイカイなんて決めつけてはいけない。

「猫くん、君はどうしてこんな所にいるんだい？」

「それはキミに会いに来たんだよ、やく」

……はい。サイカイですか。再会しちゃったんですか。サイカイに再会。うん、駄洒落になりそうにない。

「何のようですか、死神さん」

僕はサイカイの声を発する

「いや、死神の仕事残ってたし」

また試練ですか。めんどくさいなあ。今度は何の用だろう。

「あなたの余命はあと十日です」

「なんだって？」

「死ぬまでにあと十日です。それまでにやりたいことを済ませて、ということだなあ」

ひどいもんだ。なんだか詐欺っぽい。

「……回避は？」

「ハハハ、不可能だろーね」

声では笑っているらしいが、顔は笑っていない。

「というか、あと十日って退院する前に死んじゃうからね」

「まあ、キミの家の権力ならどうにか出来るでしょ」

「随分とお調べのようで」

サイカイは死神だから余命を告げるのは当たり前なんだけど、僕は何をするべきか。

「ねえ、サイカイ」

「あー、あと一ヶ月とかにするとという交渉は無理だから」

「いやいや。きりとの無罪を証明すればいい、って言ったのはサイカイじゃないか」

「んなもん十日もあれば出来るでしょ」

「裁判にも色々準備があるんですよ、サイカイさん」

「ふむ、その辺はマニイでどうにかしようか」

死神って汚いなあ。

「とりあえず、万里に言ってみるけど。期待はしないでね」

「いや、最初から期待してないし」

「待て待て。きりとの無罪が認められて、出所させるのが目的じゃないの？」

「いんや」

死神サイカイの化身らしい黒猫は巻き舌を効かせる。猫のくせにこんなこともできるのか。

「ボクは魂が狩れればそれでいい」

サイカイとの距離が縮まったと思えばこれか。

「今のボクにとって『佐古部桐斗』は興味でしかない」

うん、その気持ちわかるかも。僕が君の立場だったら同じことを考えます。

「まあ、ボクは帰るから」

「え、どこに？ 魔界？」

「いや」

気だるそうに立ち上がり窓を器用に開ける。夜風が涼しい。

「ネットカフェ」

そう言い残すと窓から飛び降りていった。
にしてもネットカフェって、死神ってそんなものなのか。

翌日、朝十時。訪問が可能になる時間帯ぴったりに来たのは美女だった。

「先パーイ！」

誰だ。ああ、サイカイの言う「巨乳を遙かに超えた」あの人が。
「覚えてますよね！」

プルンプルン揺れる胸。男子中学生が見たら鼻血を噴き出してしまいそうだが、僕は一応社会人（職業は二ト）に分類される為、鼻血を噴き出す訳にはいかなかった。気を抜くと鼻から赤い液体が出そうな状況だったけれど。

「結城譜蘭です！」

「……ふらん？」

やっべ、記憶飛んだ。

「ううー、酷いですよ先輩。一緒に寝台列車にのって東北へ遊びに行った仲じゃないですか」

僕そんなに色男だったの？

「いつも私のためにアサガオの種を栽培してくれたじゃないですか！」

アサガオの種は毒だからね。僕はいったいどんな人間だったんだ。サイカイが「ボクの都合で消した少女」って言ってたけど、本当だったんだ。多分他は忠実再現だと思う。

「先輩は私にメガネシヨップを紹介してくれたし、ハンバーガーの食べ方だって教えてくれたんです！ 思い出して下さい！」

話の内容から推測するに、おかしい子だったらしい。精神も胸も「私のこと『ふーちゃん』ってニツクネームをつけてくれたの先輩ですよっ」

「あー！」

ふーちゃんか。思い出した。高校一年生でGカップ、いや、なん
でそんなことを知っているんだ。

「ふーちゃんか」

「思い出しましたっ 私です、ふーちゃんです」

ヘアスタイルが随分と豹変しているな。おかっぱも良かったんだ
けど。

「あー、うん」

「えへへへへ……」

何というか、万里好みな女性になったなあ。

「今日はですね、お弁当を作ってきたんです」

「え？」

僕はお弁当という言葉に恐怖を感じるようになってしまったらしい。
ちづるのような殺人料理だったら今度こそ死んでしまう。

「危ないもの、入ってないよね？」

一応確認。聞いたって無駄だと思うけど。

「危ないものですか？」

アサガオの種とか、下剤とか。

「んー、多分入ってないと思いますよ」

「多分？」

うーん、怪しいなあ。

「まあ、食べてみて下さいな」

ふーちゃんは黒いカバンからアサガオ柄のバンダナで包んである
四角いものを取り出す。それを僕に満足そうに見せると、包みを開
封し始める。

「にしても、ガラリと変わりましたね。先輩が眠ってる間は精密そ
うな医療機器だけで、他は殺風景だったんですよ」

「ああ昨日、看護婦さんが模様替えしてくれたらしいんだ。最低で
も必要な物は置いておきましょう、て」

朝八時に健康的に起床したら、メモ書きがあったから。

「私、好きな花はアサガオです」

好きな花がアサガオだからって季節外れでしょう、アサガオのバ
ンダナは。カレンダー見る限り十月なんだし。

「さすがにお弁当にはアサガオは入れませんよ」

まあね。今頃は咲いていないし。秋だもん。

「さあ、召し上がれー」

僕の運命を決める食事の時間が来た。正直、朝食を食べてからあ
んまり時間は経っていない。まあ、出された物は食べるしかないか。
「えへへへへ、早く退院してほしいから奮発しちゃいました」

杉っぽい香りのただよう木製の弁当箱の蓋がパカツといい音をた
てて開けられる。それと同時に香ばしい臭いが部屋中に広がる。

「うな重ー」

確かに、この臭いはうな重だ。だが、僕は疑った。

「ふーちゃん、七年の間に何があった」

うな重を作るなんて君じゃない！ 目玉焼きでさえ味のないス
克蘭ブルエッグへと変貌してしまうレベルだったじゃないか！

「買ってきたうな重だよな」

うな重は手間がかかりそうだし。

「えー、ひどいですよ先輩。私、ちづる先輩から目覚めたことを知
って、一番近い霊山までウナギを取ってきたんですよ！」

うん、確か君は山っ娘だからね。出来るはずだ。

「さらに、霊山で山菜を採り、山菜ベースでウナギを煮詰め、数種
類の調味料により先輩の好きだったフレンチ風にアレンジすること
に成功したんです！」

「その数種類の調味料の中に『下剤』とか『合成洗剤』とかはない
ことを願おう」

「そんな馬鹿なことを誰がするんですか？ 洗剤なんか料理に入れ
る人はテロリストの類です」

僕の舌と記憶が正しければ、昨日のちづるのお弁当は洗剤の味が
した。つまり、ちづるはテロリストの類か。

「とりあえず、一口でいいからお願いします。私、この日のために

ずっと……」

「わかったわかった。食べる食べる」

うつむいて泣きそうな顔されても困るし。

「え、本当ですかっ」

パアアツと太陽に照らされ始めたヒマワリのように顔を上げる。

「うん」

まあ、僕も男だ。一度言った以上、もう後には退けない。筋肉の衰えた手でスプーン（箸は使いにくいだろうというふーちゃんの氣遣いらしい）を握り、うな重の「うな」の部分を口に運ぶ。

「なっ」

思わず言葉が漏れた。なんだ、この料理は。いくらでも食べられそうだ。口の中に広がる日本の歴史。何だ、この和風の中にまじる洋風は。たれに「トリュフ」を使っている。

「ど、どうですか？」

「美味しい」

これを美味と言わず何と言った。

「本当ですかっ あ、ありがとうございます！」

ホントに七年の間に何があった。

「兄……さん？」

スライド式ドアの先に立っていたのは、僕の弟、木瀬万里であった。

「何を……して……」

「ああ、お弁当を食べていたんだ。うな重だよ、うな重。滋養強壮で有名なウナギの丼」

「いや、そうじゃなくて。兄さんを責めちゃいけないな。何も知らないんだから……」

万里は真っ赤な顔をしてふーちゃんを見ている。

「ああ、紹介しておくよ。この人は……」

「……知ってる。結城さん。何度か会ったことがあるし……」

足は生まれたての子鹿のように震えている。

「お久しぶりです、万里さん」

「……は……い……お……久し……ブブブ……リリリリ……デ」
万里も七年の間に何があった。まさか、万里……？

「あ、一応誰か来たらと思って二人分あるんですけど、万里さんもいかがですか？」

「メメメメメ……滅……相も……ナナ……イ」

よく見たら目が白目だ。好意を抱いている女性に対しては万里も照れるのか。覚えていよう。

「自信作なんです。先輩も美味しいって……」

「うん、すごく美味しかったよ」

その瞬間、ごつい音がした。万里が倒れたのだ。泡を吹いて。

「あつれ、おかしいな」

私はふーちゃんに電話をかけていた。しかしいつものように「はい、ふらんです」と返事が来ない。さらには、知らない女の人が「おかけになった電話番号は電源が切れているか、電波の届かない場所にいます」と平坦な口調で言っているのだ。まあ、彼女のことだから霊山に修行に行ってるんじゃないかな。うん、そうに違いない。私は電話をかけるのをやめて、スポーツ用品店へと足を運ばせる。

どうやら万里は重い病にかかっているらしい。そのことを目覚めた万里から聞いた。ふーちゃんは知っていたが、久しぶりだからつい忘れていた、と言う。

病名	巨乳恐怖症
別名	巨乳アレルギー

未知の奇病で、治療法は見つかっていないという。胸の大きい人（巨乳、主にDカップ以上）が半径六メートル以内に存在すると、発作が起き、心身共に正常を保てなくなり倒れてしまう病気で、ハ

アハアと欲情するのは訳が違っらしい。そのことを目覚めた万里本人から聞いた。ちなみにふーちゃんは責任を感じて弁当を置いて帰りました。

「にしても、いつそんなのが発症したんだい？」

「だいたい五年くらい前かな」

会話の途中に万里はうな重を口に放り込む。本人曰く「まずくはない」らしい。

「発症した原因は？」

「結城さんと初めて会ったときかな」

今日も万里は黒スーツだ。暑くないのだろうか。十月だけど、今日は暑いし。

「万里、リハビリしてみないかい？」

「嫌だ。このままでいいし」

「もつともな意見で」

万里も仕事が忙しいのだろう。

「てか、万里。仕事は？」

「ああ、仕事ね。一応、俳優やってる」

嘘だ、と否定はできない。僕が見る限り万里は二枚目だ。さらに体格も申し分ない。

「最近声優業もしているんだ」

「はあ」

万里のことだから超二枚目で剣の腕もプロフェッショナルなパーフェクトなキャラクターを演じるんだろうな……。

「『SAIN』セイン」っていうんだけど、知ってる？ 十四年くらい連載してるらしいんだけど」

ああ、あれね。ヒロインのお兄さんが「じりじりおひげ」の。てか、少年誌連載だったんだ。しかもかなり続いている。

「アニメも六年目」

「……………」

「一巻から七十七巻の累計販売部数は五千万部のようで」

人気すぎ。ギャグパートもあつて少年少女熟女問わず人気だったしね。

「まあ、初期のキャラクター達はお払い箱で、今は『現実世界編』っていうのをやっているんだ。で、その『現実世界編』の主人公の声を担当しているんだ」

この漫画のウリは「盛大な異世界ファンタジー」じゃなかったのか。

「ちなみにどんなキャラクター？」

「うーん、二重人格で基本人格は超馬鹿で運動オンチ。もう一人の人格が目覚めると別人のように変わり、異世界からやって来た魔物をすさまじい勢いで退治していく」

まあとりあえず、万里は元氣のようで良かった。

「というか、万里。プロダクションとか入ってるんでしょ？ きよにゅ……大きい胸の人はいないの？」

「うーん、巨乳はあんまり見かけないね。男性が多いから」

僕が言い直したのにどうして君はそう平然と言っただ……。

「でも、俳優って大変でしょ？」

「うっん、大丈夫。兄さんが生きていれば僕はどんな困難でも乗り越えていけるから」

愛されてるなあ、僕。この時間を大切にしよう。一生の宝物にしよう。

「あ」

と、万里。左腕の腕時計を見て、僕に微笑んだ。

「んじゃ、仕事が入っているから」

「若いのに大変だなあ。まだ二四でしょ？」

「でも兄さんには及ばないよ。兄さんってわりとなんでもできるでしょ」

立派すぎて言葉が出ない。万里は二枚目だし、秀才だし。僕は無職だもんね。

「万里、怪我しないよう気をつけてね」

「何を言ってるんだ。会議で怪我するような人間じゃないよ」
「道中でね」

なるほど、と万里は悪戯に笑って病室を去った。

とりあえず、僕はベッドに横たわって目を瞑る。生活習慣が崩れてる。昼寝したら夜眠れなくなるんだよ。

「寝る気？」

その声を聞いて僕は飛び起きた。

「二度寝かあ。生真面目の君がそんなことをするのかい？」

パーカー姿の少年が僕の顔を覗き込んでいる。誰だろうか。

「その顔つきだと気付いてないようだね」

「ボクだよ。ボク」

「いや、そんなオレオレ詐欺みたいに言われても」

「新手的ボクボク朴念仁詐欺さ」

ヒューウと、北風が吹いた気がした。

「えっと、サイカイ？」

「ボクの名前は『酒井さいか』。近所のネットカフェで寝泊まりする、いわゆる『ネットカフェ中学生』」

「あのだ、ツツコむ側の気持ちになったことないでしょ」

「うん、ボクは死神だからね」

「『ネットカフェ中学生』はどうしたっ」

にしてもサイカイも可愛いもんだな。灰色のパーカーに黒の短パンとは。

「なにをじろじろと見ている。はあん、そんなにボクの美脚が気に入ったか。足下で懇願してくれれば舐めさせてあげないこともないぞ」

「そんな気持ち悪いことを誰がするんだよ……。僕はMかつ！」

サイカイは口の周りをペろりと舐める。

「さて、本題に入ろうか」

「……きりと救出までにあと一年はかかりそうだ」

「なるほど。ではこうするしかないな」

サイカイは不気味に微笑みかける。

「真犯人をあぶり出す」

今度は僕がなるほど、と相槌を打つ。

「さて、それに至るまでにはいくつかのステップがある。相手の右眉毛の上にはホクロがあったね。さらに、顔はきりと瓜二つ」

「つまりそれはきりとに、兄弟がいたとかそういうことになるの？」

「うん。整形したとしてもホクロは消すだろうし。そうになると、『兄弟』ってのが一番有力じゃないかい？」

僕が大きく頷くと、悪魔みたいに笑いを浮かべる。

「で、ボクが個人的に調べてみたんだけど、予想的中。きりとは兄弟がいた」

「どうやって調べたんだい？」

「ハッキン、いやアクセス」

ハッキングか。最近の死神はそういうことにも長けているらしい。

「これがまた複雑だね。きりとの父『佐古部雄三』って人物は、妻がいながら浮気性でさ。その愛人は妻の双子の妹だったとか。で、同時期に妊娠させちゃって、偶然にも同時期に生まれちゃったわけ。『佐古部雄三』がそれなりの金持ちだったことが不幸中の幸いだっ
たらしい」

「ホント複雑だ」

「まあ、三年は愛人の子を別の人の子供だと言って隠し通せたらしいんだけど、愛人の息子が三歳になった時、愛人が死んじゃったんだよね。で、どんな運命の巡り合わせかは知らないけど、『佐古部雄三』の妻がその息子を引き取ると言った」

まあ、妹の息子、つまり甥だからまあ無関係ではないし、あり得る。

「これ以上隠し通せる自信はないから『佐古部雄三』はしぶしぶ本当のことを話す。予想に反し妻の反応は違った。『この先一生浮気をしないこと』を条件に許してくれたらしい」

そこまで詳しく知ってるなんて、さすが死神。全知全能らしい。

「そうだ、サイカイ。どっちがきりとなの？」

「愛人の息子の方が少し早く生まれたいから、愛人の息子がきりとだってさ」

きりと誕生秘話って結構どろどろだな。

「妻もきりにはよくしてくれたいらしい。自分の息子とも平等に接するとかね。ボクも立派だと思う」

「妻の子との仲はどうだったんだい？」

「仲がよかったって噂。でも、全体的に兄の方が優れていたって有名だよ。きりとの幼稚園の先生にまで聞きに行ったんだ」

聞き取り調査か。

「聞き取り調査は楽チンだったよ。なんせ、弁護士に化けたからね」「化けギツネ……」

僕は囁くような小声で呟いた。

「キツネじゃないよ。死神だよ」

「うわっ、地獄耳」

「話がそれるじゃないか。とりあえず、七歳当時のきりとは学業優秀、運動能力は小学五年生並の有名人、さらに女子にモテモテだったみたいだ。将来は陸上選手にでもなるんじゃないかと噂されていたらしい」

学業優秀？ おかしいなあ。そんなはずなのに。九九の五の段でさえ真面目に出来るか怪しいレベルだったのに。並はずれた運動神経と二枚目のキザというのは否定しないけどさ。

「それに対し、弟の『優斗』は正反対」

「なるほど、勉強も運動もろくにできない、か」

「いや、それだけじゃなくて女子には忌み嫌われる存在だったらしい」

よくあるパターンじゃないか、と僕が言つと、サイカイは実に大きいため息を付いた。

「これだから世間知らずは。今のキミより弟の万里のがよくできるじゃないか。仕事もできる、性格もいい。おまけに超二枚目」

「ぐ……」

確かに僕は二トで、ひねくれ者で、顔は普通以下だと思っけど！

「顔はまあ普通以上だけど万里には劣るじゃないか」

「……………」

そう言われるとにやーっと笑ってしまう。

「とりあえず、兄弟と比較されるのは嫌だろう？　はい、この話は終了」

サイカイに感心する。僕はただベッドで寝ているだけなのに、情報をハイスピードで仕入れてくれる。相当のしつかり者だ。

「また話がそれるじゃないか……。もう余計なことは言わないでくれよ」

「……はい」

「そんなきりとの腹違いの弟『優斗』は、嫌でたまらなかったらしいね。天才じみていて非の打ち所のない彼を」

「非の打ち所がなかったって、信じられないんだけど」

疑問がもぞもぞ湧いてくる。

「そして、もう一つ。きりとは天才だった当時、あの町に住んでいたんだ」

「あの町……」

七川学園があり、フラワーガーデンがあり、アンティークハウスのあったあの町……。

「察しの通りさ。で、僕も壁に直面した」

「へえ、サイカイでもわからないことがあるんだ」

「全知全能な訳じゃないからね」

「ちなみにその壁というのは僕も何となくわかってるから、声を合わせてみないかい？」

サイカイはしょうがないなあ、と言うようにしゅしゅ頷く。

「……どうして変貌してしまったのか」

第十六話 佐古部桐斗と佐古部優斗（後書き）

鰻河です。

遂に物語も佳境に入ってきました。

またまた新しい名前が・・・

ああ、もう、この異常なまでのキャラの増殖は病気な気がしてなりません。

第十七話 復活きょうこ様！（前書き）

死神退治の専門家に注文された物は、非常にアレだった。
木製バットと釘。金槌があるとなおよい。

そんな死神退治の専門家こと、幽霊は我が家を占拠。
すでにテレビは彼女の手中。

さあ、彼女に立派な部屋を与えなくては。

個室で洗面所と風呂、さらに便所つき、をね。

第十七話 復活きょうこ様！

私の前に死神退治の専門家「幽霊」が現れてから一晩。その幽霊の長と自称する女は私に「釘」と「木製バット」を買ってこいと命令した。金槌があるともつと良い、と言っていた。詐欺か何かを疑ったが、普通は現金を要求するはずだから今回はスルー。

というわけで、今私は大型スポーツ用品店の野球用具コーナーにいる。土曜の昼前だからか、野球少年っぽい男児が多い。その中で一人、若いお姉さん（私）がバットを探しているのだ。明らかに浮いている。しかも片手には釘の入った袋。見ているのは木製バットのみ。ああ恐ろしや、恐ろしや。

「えーと」

「釘」と「バット」という注文から察するに、作る物は「釘バット」だろう。

懐かしいな。釘バットとは。きょうこを思い出す。彼女の部屋には釘バットが大量にあったのを覚えている。

にしても、バットって高つ、と思ったところで携帯電話から着信音が。自宅（ボロアパートの一室）からのようだ。

「はい、ちづるです」

「ういーっす、どう？ あったー？」

例の幽霊だが、「契約できたから実体化できるのだ」と言い張り、私の部屋を占拠し始めた。昨日の貴族のような口調は無に帰った上、部屋でごろごろせんべい食ってテレビを見る、という引きこもりの様になっている。見た目だけは黄泉の国の帝だ。

「何の用？」

「まあまあ、そんな嫌な声出すなよー」

あはは、と焦るような笑い声が聞こえる。

『追加注文なんだけど』

「……………」

『コスプレショップで女子高生の制服買ってきてくれね?』

「は?」

こいつ本当に黄泉の国の帝かよ。

『茶色系ブレザーか、黒系のベストとワイシャツでよろしく。スカ
ートは赤系で』

さらに注文が多いときた。セーラー服でいいじゃないか。

『あ、靴はローファ』

プツ、通話を終了させた。実にくだらない会話であった。自宅の
電話なんていらぬ。契約を切るとしよう。

「さて、そこで浮上するのが誘拐された直後、八歳のきりとがどん
な子供だったかだ」

「ああ、きりとの初対面なら昨日のように覚えているつもりだよ」
パーカー姿の死神は「ナイス」とでも言うように、ニヤリと笑っ
た。

「『出せー出せー』と壁に頭を打ち付けながら一晩叫んでいて、僕
もちづるも……さつきもしなも眠れなかった……。だから、そう……
馬鹿だと思った」

簡潔に言つと、初めて会ったときから馬鹿丸出しだった、という
ことだ。

「僕達、誰も助けてくれないことをわかってたから、無駄に動くこ
とをやめたんだ」

「……待つて。それって騒ぎに騒ぎまくって近所迷惑にすることで
助けを待っていたんじゃないかな」

「あ」

「それって、馬鹿じゃないと思うよ。まあ、ボク個人の見解なんだ
けどね」

そして、ベッドの脇にある、オレンジジュースを何食わぬ顔で飲
み始める。万里が「甘いものでも飲んだら?」、と置いていった才

レンジジュースを。僕のためのオレンジジュースを。

「じゃ、ボクは個人的に調べたいことがあるから帰らせてもらっよ」

「……………」

僕が悪うございました。さっさと飲めばよかったものの。

「あと」

空のペットボトルを床に放ると、

「美味しかった」

「……………」

薄く笑いを浮かべて病室から出ていった。

うーん、罪悪感がするなあ。僕だけ一人、何もしないって。

「……………」

無言で自宅の扉を開く。改めて自分の手に持っている物を確かめた。

スポーツショップで買った木のバット。そしてホームセンターで購入した釘と金槌。さらにはコスプレショップで大金をはたいてしまった、女子高生コスプレ用品。

さて、寝ころんでチョコレートをむさぼり食う幽霊がいないことを願う。いなければいいで、手が掛かるのだが。

ふう、と息をついて目の前をざっと見る。

安いマンションの一室で、玄関から真っ直ぐに寝室がある。むしろ寝室（押し入れ付き）と台所と便所と風呂以外何もなし。

寝室にはテレビとパソコン、そして布団とちゃぶ台があるだけ。

なぜちゃぶ台かというと、答えられない。

そして、幽霊はいなかった。

出かける前は、「木のバットと釘。金槌もあるといい」と威勢良くテレビを見ていたというのに、この静けさは異様だ。テレビの音ひとつ聞こえてこない。

死神退治にでも出かけたのだろうか。それとも、隠れているとか。

どうせ一人だし、幽霊探しも悪くない。

まずは、押し入れから。

シャツと格好良く押し入れを開いた。

「……………何してる」

押し入れの中に幽霊は存在した。

「えつとですね、これはデスね、そう」

「何が、『そう』だ……」

「未来から押し掛けてきたロボットは主人公の部屋の押し入れの中で眠るんです」

「ふーん、で？」

「だからさー、わかる？ やりたいわけだよ」

「残念ながら、おまえの寝る場所は決まってるんだな」
ほう、と幽霊はニヤリと笑った。

「個室で洗面所もトイレも風呂も付いている」

「ん？ ホテルでも借りてきたのか？ そりゃいい。よく分かってるじゃん、ゴーストマスターの扱い」

「ああ、借りてきた。むしろ私の所有物の民宿だぞ？ 綺麗に使えよ？ いいか」

そう、その名も……

「おまえの部屋は便所だ」

私が笑顔で言うのと、幽霊は笑いを返した。
見つめ合うこと約4秒。

「トイレが付いている、それは否定しないが洗面所と風呂はどこ行つたんだバカタレ！」

「兼用……？」

「大便したところで顔と身体洗えと？ 残酷だ！ 幽霊虐待、精神的暴力を反対するデモを起こすぞこのヤロー！ そして疑問符がムカツクわっ！」

反論は予想していたが、ここまでとは。

「っーかさ、ゴーストマスターなんだからトイレ必要ないんじゃない

いの？」

「馬鹿言つな、幽霊だつて実体化したら出す物は出す」

「便所は嫌なのか。じゃあー」

よく考えたら実体化してもいいことないじゃんか。

「ベランダはどうだい？　一畳分はあるんじゃないか？」

「外？　秋にピッチピチの幽霊を外に閉め出すというのか。おまえつて最悪だな！」

「だってうちにはわがままな幽霊を置いておくスペースはないし」

「だから押し入れの中じゃないのか？」

「うーん、それでもいいんだが、あそこアレが出るんだよね」

「アレ？」

「ああ、黒くて触覚のあるアレだ」

そう、ゴキブリ。略称はG、もしくはゴツキー。ニッケネームはゴツキー鰯岡。ふーちゃんが虫の卵を孵化させるために押し入れを貸してほしいと言われてそのまんま放置されてしまったゴツキー鰯岡。押し入れはそんなゴツキー鰯岡の居場所なのだ。

「……………ちづるさんよ、おまえを悪く言い過ぎた。おまえはわらわがゴキブリが嫌いなのを知っていて、だから、押し入れを拒んだのだな……………」

いいえ、ゴツキー鰯岡の為です。おまえが入ったらゴツキー鰯岡の居場所がなくなってしまう。

「本当にいいヤツだよな、おまえは、ホント。昔から……………」

「昔から？」

「ああ、昔から、だ。なんだかんだですっげえいいヤツだ」

「あのさ」

私は恐る恐る幽霊に聞く。

「もしかして……………きょ……………」

「気付かなかったか？　そりゃそーさ。こんなに美麗かつ優雅で優麗で雄麗な幽霊となって復活したのだからな！　幽霊は生前のことを知られるとゴーストマスターに罰せられるのだが、私がゴースト

マスターだから大丈夫だ。やっと決心がついたよ」

「きょうこ……なのか……」

ふん、と胸を張る姿、間違いなかった。

「そうだが」

私はぐうたら幽霊の胸に飛び込んだ。

「いきなり何をするんだ、ちづる！ 再会の祝いのハグか？ よお

ーし、どんとこい！ 元暗殺者、現ゴーストマスター・キョーコが
ドンと受け止めてやる！」

変わってない。紛れもないきょうこだ。

私は忘れていたんだ。この温もりを、優しさを、安心を。

第十七話 復活きょうこ様！（後書き）

鰻河です。

今回はそこまでアレな話じゃなく、ニコニコのほのぼの〜で通せました！

次回もお楽しみにしていただけたら幸いです。

第十八話 サイボーグメイド・アリスちゃん（前書き）

万里が女の子を連れてきた。

「兄さん。紹介しよう。今日から兄さんの用心棒になった『改造人間ARS』だ」

サイカイと鉢合わせしないことを願うばかりだが、こういうときにサイカイは現れる気がする・・・

第十八話 サイボーグメイド・アリスちゃん

「えーと……」

一晩明けた。サイカイはあれから現れていない。しかし、万里がやってきた。

「兄さん。紹介しよう。今日から兄さんの用心棒になった『改造人間ARS』だ」

万里が連れてきたのは、桃色のワンピースとヒラヒラのエプロンを着て、頭にヘッドドレスをくつつけた可愛らしい十七歳くらいの女の子だった。しかし、その口から出たのはた。

「ハジメマシター、ワタシハ、改造人間。コードネームハ『エーアルエス』デス。開発者ドモハ口ヲソロエテ、『アリス』『アリス』ト呼ンデイマシタ。『エーアルエス』ガ正式名称デスガ、呼びニクイヨウデシタラ、『アリスちゃん』モシクハ『アリス様』トオヨビクダサイ」

カタコトで聞き取りづらい言葉だった。

「あのさ、万里。カタコトじゃないのはなかったのかい？」

「ARS、カタコトではない喋り方は出来るかい？」

「ワカリマシタ」

早速カタコトじゃないか。用心棒というかお世話係ロボットみたいな外見だし。

「私は改造人間。コードネームは『えーあーるえす』、英語表記で『えーあーるえす』です。私をいやらしい目で見る、不純な開発者達は口をそろえて『アリス』『アリス』と呼んでいました。木瀬様に用心棒として雇われ本当に感謝しています。呼び名ですが『アリスちゃん』及び『アリス様』等でお願います。それから仕事内容ですが、木瀬様に近づく虫ケラ共を排除するように弟の万里様から命令されていますけど、木瀬様はそれでよろしいですか？」

ツツコミ所が多すぎるな、この改造人間は。

「もしくはどんな汚い仕事、例えばトイレ掃除や木瀬様の尻ふき、奴隷の様に仕えなさいとも命令されておりますので、SMに、性欲処理、どんなことでも受け付けます」

「まあ、普通の用心棒っぽい仕事をすればいいんじゃないかな」

「えー？ 普通の用心棒？ アリスお馬鹿だからわかんない」

「んじゃ僕は帰るから」

万里はにこりと帰ろうとする。

「ちょ、まつ、とっ！」

僕の願いとは裏腹にそそくさと帰ってしまった。

「で、木瀬様。呼び方はどうしますか？」

「え、アリスで……」

「アリスは私の名前です。私が木瀬様を何と呼べばいいのか、って事聞いているんだよお？」

「じゃあ、やく、とか」

「やく？ 変な名前え」

「いや、あだ名が名前に発展していつか改名しようと思う。とりあえず、やく、とでも呼んで？」

「了解しました、ご主人様あ」

「……………」

こいつ、なんなんだ……。

「うん、じゃあ……」

「やつほおー、やく！」

ガラリと、パーカー姿の死神登場。よりによってどうして間の悪い時にやって来るかな。

「……………誰？」「ご主人様あ、この虫ケラ何ですかあー？ アリス馬鹿だからわかんない」「いや、人のこと虫ケラというとはしにが……、ネットカフェの住民としては聞き捨てられないな」

サイカイよ、死神以外の肩書きはネットカフェの住民ですか……。

「ご主人様あ、駆逐していいですかあ？」

「……………こほん、うるさいですよ、そのコスプレ女。さっきから聞

いていて胸くそ悪いですう」

そういえば、サイカイⅡさいか、だったなあ。相手が『ですです』言ってるから、本当の『ですです』を見せつけてやろうと思ったのね。

「第一そのメイドの『ですです』はキレがないですねえ。軽い気持で『ですです』やるなんて100万年はいいですよ？ 第一、死神でもないのに『ですです』を使うなんて何様だつーのです」

「ご主人様あ、命令をつ」

「……何もしなくていいと思う……」

「では私の自己判断でえ……。『ARS』戦闘モード」

僕は魔法を見た。

メイド姿の改造人間が、みるみると姿を変えてゆくではないか。

ヘッドドレスはヘルメットへ。エプロンとワンピースはヒラヒラ感など消え失せて灰色の機械的かつ鎧っぽいスーツへ変わる、不思議な魔法だ。

「……やく、わかる？」

ネットカフェの死神は嗤っていた。

「醜いねえ、改造人間だつてよ？ ボクがスクラップにしてあげるべきだよね」

「あ」

アリスの姿を見たことがあった。

死神の間だ。あそこに飾ってあった肖像画のひとつに、アリスはいた。

あのヘルメットの子がアリスなのか……？

「ターゲットロックオン、高熱レーザーソード」

アリスの手がスツと伸び、青い光を発する。

「レーザーソードかあ、危ないね」

サイカイはくりと宙返り。裏返るように姿を変えた。死神の正装であるう包帯と黒いズボン、夢の中で出会ったサイカイの姿に。

しかし、その手には巨大な鎌。まさに死神。

「実に醜い」

レーザーソードと化した右腕を下げて、アリスは扉を背にするサイカイへと走る。

「アリス！ サイカイ！」

「ARSハターゲットヲ破壊スルマデ、戦闘ヲ続ケマス」

電子音のような声。それを聞いてサイカイは「醜い、醜い」と嗤っている。

「まったく……。こういうの嫌なんだよね」

アリスのレーザーソードがサイカイに届く前に、大鎌でアリスの腕をとらえる。

「はい、動くと斬れるよ？」

「ARSTARSノレーザーソードハ、オーバーテクノロジーニヨッテ使用ツクラレテイマス。鎌ゴトキデハビクトモシマセン」

「んじゃ、やってみる？ 地獄の鎌だよ？」

バチリ、とアリスの腕から火花が散る。サイカイの鎌がアリスの腕にめり込んだのだ。

「サイカイ！ やめ……」

「……これは自己防衛だ。やらなきゃやられる。漫画でよくあるでしょ？」

僕は寝たきりの状態から動こうとした。もちろん簡単に動くはずもなく、全身の筋肉が悲鳴を上げている。アリスは僕のベッドから数歩の所にいるが、下半身を動かすのだけで精一杯の僕には声をかけることしかできない。

「アリス、降伏するんだ！」

「ARSハ命令ヲ忠実ニコナスヨウ、プログラミングサレテオリマス」

命令を忠実にこなすように？

ならば……。

「アリス！ 命令だ！ サイカイは敵じゃない！ 僕の友人だっ」
喉の筋肉だけは、健在なのが不幸中の幸いであろう。

「……『ARS』ご奉仕メイドモード……」

アリスアーマー（僕命名）が逆再生されるようにフリフリのメイド服へと戻っていく。

「ご主人様のお友達ですかあ？」

「誰が友人だボケ」

「『ARS』戦闘モード……」「いいからっ」

慌てて抑制。危ない危ない。

「で、でもご主人様！ この人、危険な臭いがプンプンしますよ。

あと……」

アリスはもじもじしながら言う。

「何日もお風呂に入っていない不潔な臭いがします」

「ボクがお風呂に入っていないだってえ？ ボクは死んでから一度だつて風呂に入ったことはないさ」

「だめじゃんかっ」

第十八話 サイボーグメイド・アリスちゃん（後書き）

鰻河です。

またまたややこしくなりました。

前회가ちづるのギャグパートのような気がしたので、今度はやくのギャグパート。

サイカイがさいかに少しだけ戻りました。

第十九話 死神と幽霊とサイボーグ（前書き）

死神が病院に行くってどうかなあ？

幽霊（しかも帝）がお菓子大好きってなんだかなあ？

サイボーグがメイド服ってどうしたものだろう。

そんな三者三様、病院にて鉢合わせ！？

第十九話 死神と幽霊とサイボーグ

「で、いつ作戦を実行するんだ？」

「わらわの予定じゃ、明日……」

「そうすれば、やくは死ななくて済むんだな？」

私はあぐらをかいて、チョコレートをむさぼり食う幽霊に尋ねる。服装はコスプレショップで買ってきた女子高生の制服。ああ、なつかしや、なつかしや。

「ああ。だが、あくまで成功したら、だ」

「成功したら？」

「うむ。成功したら、だ。幽霊は死神を狩る。一応わらわはトップクラスの幽霊と自負しているが、相手もわらわに劣らずトップクラスだ。成功確立は五分五分、と言ったところか」

五分五分じゃ、困るんだけどなあ。

「まあ、そう心配するなつて。死神が取り憑いた人間は大抵二時間で心臓が止まる。だが、今回は異例だ。小間使いの幽霊に調べさせたところ二日は元気になっているようじゃないか。これはチャンスだぞ。しかも取り憑いている死神はあのサイカイではないか」

「サイカイ？」

ああ、と幽霊はうなづく。

「何度もやり合っている死神さ。で、いつも狩りきれないんだな」

「死神つて私にも見えるか？」

「実体化してれば見えるだろう」

そのサイカイ、というのに興味が湧いた。

「これもわらわの小間使い調べで、サイカイは頻繁に訪れているようじゃないか、病室を」

「死神が病院を訪ねるって……」

「病院は命を救う医者と、幽霊のホームグラウンド、そこに一匹で迷い込むとは馬鹿にも程があるよなあ。行くなら墓にでもすればいい

いものを」

そう嘲笑うと私に向かって手の平を向けた。

「？」

「おかし」

「チヨコは？」

「んなもん食い尽くした。だからさつさとよこせよ、他のもの」

「……………もうないけど」

「ないだつて？ 馬鹿なことを言うんじゃない。さつさとよこせ。無いなら買ってこい」

「はあ？ 幽霊つてのは同居人に食べ物と服と寝る場所ねだつて、死神狩つたら『はい、じゃあね』っていう詐欺師なのか？」

「詐欺師じゃねえ。対価だ。命を救うんだ、それくらいいいだろ？」

「へえ、じゃあ失敗したらどうなるのかなあ。返って来るんだろうねえ。普通、後払いだろう？」

「ぐぐ……………」

ニート・ゴーストは口を閉ざし、数秒考え込んでから、

「後払いだからなつ、あとで大量に買ってもらうぞ！」

と小学生の如く言い放った。

「はいはい。いくらでも買いますよ……………」

と、大人な対応を試みせ、その後、ぼそりと呟く。

「……………三千円くらいなら」

金欠なんだよなあ。おまえのせいで。

「アリス、僕はサイカイとひそひそ話をしたいから部屋の外で待機していてくれないかな？」

「ええ、どうしてですかあ？ 私より、そのクサイ子供の方が好みなんですかつ。不潔です！」

「いやいやいや、と首を振る。僕は極めて純情な男子だし、サイカイに欲情なんてしませんって、絶対。」

「第一それはボクに対して失礼すぎるよねえ？」

サイカイが窓に座りながらアリスをギロリと睨む。しかし姿は、包帯と黒ズボンではなくパーカーと黒い半ズボンである。

「臭い臭いって、ボクはカメムシかい」

「そうです！ 私以外の生物は全てカメムシですうっ！」

「そうか、じゃあボク以外の生物は全て蛆虫だ。ゴーストマスターに至っては蛆虫とゴキブリのハーフで、蛆ブリ虫だな」

「ぶえつくし！」

幽霊がわざとらしくしゃみを飛ばす。

「畜生、わらわの噂をしているのは誰じゃっ」

「知らない。じゃあ、私は病院に行くから」

その帰りに高級なアイスクリームを食べて帰るとしよう。

「待て！ わらわも行く！」

「行かなくていい。やくの病状が悪化する」

「やだやだ！ わらわも行くんじゃない！」

「だめったらだめ」

高級アイス二人前なんて私の財布からはとてもじゃないけど出せません。

「……知っておるぞ？ 帰りにアイスクリームを買うんじゃない？」

「……ええ、そうですね、なにかあ？」

「棒アイスでいいからわらわにも買ってくれ！」

「言ったな？」

「お願いじゃ！ 連れてってくれ！」

「よし」

棒アイスをぺろぺろ舐めるこいつの隣で、高級アイスクリームを二刀流で食ってやる。

「やった！」

かくして私は、愛する人が寝泊まりする、病院という名のラブホ

テルへと足を運ぶのであった。

アリスを説得することおよそ十四分。

やっと、サイカイと二人きりになれた。

「で、サイカイ。今日は何の用だい？」

「まずいことが起きた」

サイカイの表情が曇る、を通り越して目元に雨のような青線がかかりそうな表情をした。

「ゴーストマスターに……」

「え？」

「ゴーストマスターに見つかった……」

「いや、いきなり言われても意味が分からないなあ……」

ゴーストマスターって、サイカイの好敵手？ あの綺麗な人？

一度見てみたかったんだよねえ。

「さらに契約までしてあるとは……。ボクの命も限界か……」

「あははは、冗談にも程があるよ？」

「いや、マジで。とりあえず、やく。契約者を追い払ってくれないかい？」

「ああ、うん。まかせてよ」

ありがとう、とサイカイは吐き捨てた。

「で、契約者って？」

「幽霊は死神を狩る。幽霊は人間と契約し、人界に紛れる死神を狩る。幽霊は契約ナシでは死神を狩れない」

「はあ」

「幽霊が死神を狩るには、契約した人間が死神のターゲットと半径三十センチ以内に接触しなければいけない」

死神のターゲットってことは僕か。

「まあ、軽く察しているようだから色々省くけど、要はキミが幽霊と契約した人間を残りの余命の間追い払ってくればそれでいい」

「よし！ どんとこい！」

「で、幽霊は死神を狩りやすいように契約者には、死神のターゲットと親しい人間かつ、頻繁に会う人間を選ぶ」

「ということは、看護婦さんかな？」

「契約できる人間は過去に死神のターゲットと非常に仲良くしていた人間のみ。今回の場合は……」

「うーん、やつぱりーちゃん辺りかなあ。頻繁に来ますからね！、
と言ってたし。それだとしたら心が痛いなあ。」

「松崎千鶴がこれに該当する」

「ふーちゃんじゃなかったの？」

「あいつはもう幽霊と契約っぽいことしてるからあり得ないね」

「あ、そっか霊媒師、いやイタコだったっけなあ。」

「さあ、辛いと思うけどがんばってね」

「……………」

「ちづるを追い払う、だって？」

「出来る訳ないじゃないか！」

「へえ、『まかせろ』、『どんとこい』はどこへ行ったのかなー？」

「くう……………」

「キミ一人の命で、無罪の罪で捕まった人間が保釈されるんだ。どうせ価値のない命だし捨ててもいいんじゃない？」

「と、その時扉の外から、機械音がした。」

「『ARS』戦闘モード」

「確かにそう聞こえた。」

「ほう、来たようだぞ？」と、サイカイ。

「がっ、何だこのロボットは！」「ふんっ。幽霊奥義……、黄泉旋

風！」「ホーミングミサイル、発射」「なっ、幽霊奥義が効かない
だっ」「この役立たず！ うわあああ」

「危険そうだった。いや、ミサイル撃った時点でやばい気がする。」

「ボクの察しだと、『ARS』は相当出力を下げているねえ。あのミサイルが当たっても軽い火傷で済むんじゃないかな」

「そりゃ、安心した」

つか、僕が追い払う前にアリスが追い払ってくれるといいんだけど。なるべく、ちづるを直接追い払うなんて事はしたくないから。

「くっそお、ここは私がやらなければ……」 「まかせた！」

ちづるがアリスと相対するのか。

「ちよつと僕は『ARS』のサポートに行つて来るよ」

「ああ、うん」

サイカイは、アリスが応戦している廊下、いや、戦場へと赴いた。なるほど。僕がちづると接触しなければ、サイカイは狩られることなく済む訳か。

「『ARS』、ミサイルとか火薬使わなければ最高出力で大丈夫」

「了解シマシタ」「おまえは、サイカイ！」「このパーカーのちびつ子が死神？」「あー、そうだ。このちびつこが死神サイカイだ」
それサイカイに対して禁句だと思う……。

「『ARS』、こいつらを病室に入れるな。もしも入ったらミサイルでも何でも飛ばしていいよ」「了解シマシタ」「さあちづる。作戦通りで」「作戦通りとはいかないでしょうに」

アリスは想定外だろうねえ。

とりあえず外は大変なことになってるみたいだけど……。

僕にできることは無いっばいから、うん。静かに傍聴しよう。

「幽霊奥義！ アンビシヤアーツス！」「遠隔破壊砲撃、準備」数秒して「発射」ズドン、バゴーン、シュルルルルみたいな感じの音。そして、叫び声。

こちらまで爆風が来ないことを考えると、最高出力ではないようだ。

「痛つ……………」 「大丈夫か、ちづる！」「『ARS』やってしまえ！」「了解シマシタ」

サイカイの言葉がテレビアニメの悪者っぽく聞こえる。

「中距離破滅砲撃、準備」「フハハハハハハハ！」「こらっ、そこおー！」

本気で危険な気がした。看護婦さん参戦。サイカイ側、ちづる側にピンチである。

んで、ツカツカとこちらへやって来る音が。さて、叱られる前に寝たフリ、と。

「木瀬さん！」

僕は寝ているんです。起こさないで下さい。

「近くで何かあったらナースコール使って下さいねっ！」

声色は怒りに満ちていた。ごめん、サイカイ。すみません、ちづる。悪いと思っていますよ、『ARS』。話したことないけどお詫びいたします、ゴーストマスターさん。

看護婦にこっぴどく叱られた。殴りたかった。こっちは被害者だっつーの。さらに、『しばらく来るな』だと？ ふざけんな！ ぶんすかしながらアイスクリーム屋へと直行。

「おおっ、なんてお優しい……。高級アイスを買ってくれるのか！ 災いの元の幽霊は目を輝かせて、赤白黄色、緑に茶色と、色彩豊かなアイスクリームを眺めている。口には涎が。はしたない。ここらで天国から地獄へと突き落としてやろう。」

「ん」

私は例の幽霊に百円玉を手渡す。

「お？ おひねり？」

「いいや、これでアイス買え」

「……おい、安くても二百円はするぞ」

「だから、コンビ二行って来い」

自分で言ったことだし、しょうがないか、とでも口にするようにとぼとぼ隣のコンビ二へと足を運ぶ幽霊を嘲笑いながら私はアイスクリームを選ぶ。

やっぱ、チョコレートアイスだな。それとストロベリー。

「チョコレートとストロベリー。別のコーンで一番小さいの下さい」
「ありがとうございますー。四百円になります」

肩掛けバッグ内のサイフから小銭を取り出しアイスクリーム屋のお姉さんに渡す。

一分程待つと、甘そうなアイスクリームが二つ手渡される。それにすぐさまかじりつのであるイライラには甘さがいいのだ。

「うーん、ボクとしたことが、なんて作戦ミスだ……」

「えーと、まあ、当然じゃないかな」

「いやいや、死神相手に本気で説教する看護婦がこの世に存在するとは思わなかったんだよね」

サイカイはこっぴどく叱られた上、『しばらく来ないで下さいね』と出入り禁止命令を下されてしまった。のに、懲りずやって来ている。ちなみに正面突破ではなく、窓からである。帰ったフリをして窓から進入。バレたら窓まで封鎖されそうだ。

「とりあえず、キミ。明日から外出許可が出るそうじゃないか」

「うん、まあね。ちづると一緒にシヨッピングでも楽しもうかと思っただけど、そうも行かないよね」

「そうだねえ。ボクが死ねばそれで万事解決するんだけど、残念ながらキミのようなお人好しじゃないから」

ちなみにアリスは、病院の屋上に待機させてあるらしい。

「まあ、明日はボクと一緒にデートに行こう」

「……はい？」

「デート」

えーと、これはどういう風の吹き回しでしょうかね。

サイカイがデートに誘ってくるとは。本人曰く、彼、男じゃなかったっけ。前世はともかく。

こういうのを、「ゲイ」「ホモ」「ボーイズラブ」と言うらしい。

「えーと、これはだな。あの憎たらしいゴーストマスターの契約者、ちづるを落胆させやる気を損なわせる活動の一環であって、決してやましい意味じゃないぞ」

「でもさ、サイカイの外見だと兄弟に見えてしまうよ」

「くたばれ、このメガネザルがあああつ！」

顔面に強いのを五発ほど食らった。弱攻撃というものが全くない。
「ぐふ……」

まあ、僕が悪いんだけど。禁句をすっかり言ってしまったから。

「安心しろ、死神は何でもできる。出来ないことは、幽霊に勝つことと、永続的に外見を変更すること。ただ、それだけさ」

幽霊には勝てないのか。

「やく。好きな女の子のタイプは？」

「うーん……」

ちづるみたいなサツパリした人です。いや、ふーちゃんみたいな可愛くて……。それとも早月さんみたいな優しい人？

「ふむ、神来早月か」

「他にも案が出てたけど……」

「よし、明日を楽しみにしていやがれつ。ちなみにデートスポットは」

ニヤリ、と悪魔みたいに笑う。

「刑務所だ」

「明日から、やくは外出許可が出るらしい」

私は幽霊に情報を渡した。ちなみにこの情報は、彼の弟から無理矢理聞き出したのだ。

「……そうか」

テンションが非常に低い。ムリもないか。幽霊をこの世の地獄に突き落としてやったんだから。

「朝六時から病院の外を張っていよう思う。どうだろうか」

「別に、好きにすれば？」

あーあ、死神狩る気も失せたか。

「死神やらあのロボットが邪魔をして来そうなんだが」

「ふーん……」

予想以上に、テンションが低い。テンションを上げるアイテムはあつたかな？

「アナタは、スバラシイッ」

とりあえず、褒め称えてみる。

「わらわなんて死んだ方がいいんだ」

いや、もう死んでるじゃないか！

「わらわなんてこの世にいない方がいいんだ」

黄泉の国でぐうたらしていればそれでいいじゃないか！

「わらわはこの、日本の社会に必要な人材なのか！」

いや、そんなこというなら仕事してさっさと黄泉の国とやらに帰れよ。

「あなたは、愛されて生まれてきたのデス。この世にあなたを必要としない人物など存在しませんヨ」

いつから私は宣教師になった！ と、自分にツツコミをいれてみました。

「そーお？」

「そうデス」

「そー言われちゃーしゃーねーなー。よし、ヤツの見張り、行つてやろうじゃないか」

軽いヤツ……。

第十九話 死神と幽霊とサイボーグ（後書き）

毎度お馴染み鰻河です。

文章下手でごめんなさい。

それでもおもしろくできるよう、改稿で努力しています。
よかったらお気に入り登録お願いします。

第二十話 佐古部桐斗は笑えない（前書き）

サイカイとのデート。

当日やってきたサイカイは、誰もが目を見張るような美人の女性で・

・

そのまま、暴力を振ってくるのは正直辛い。

デートスポットは、刑務所。

第二十話 佐古部桐斗は笑えない

翌日。以前看護婦さんが、家からの届け物、と持ってきてくれた新品の服を着て、松葉杖を両手に装備し僕は出陣した。涼しい朝だ。気持ちのいい朝だ。天気も秋晴れ。天晴れ。

「木瀬くん」

僕を呼ぶ声がした。見てみれば、綺麗な女性が。

「もー、遅いじゃないの」

長い黒髪とすらりと背の高い、ほんわかした女性。パーカーとロングスカートがよく似合う。あえて言うなら、早月さんに雰囲気似ている。

「誰ですか？」

「気付かない？ あたしだよ、さっちゃんだよ？」

くるっと回ってエンジェルスマイル。

「早月さん！」

ちよつと待った。早月さんは、あの夢が事実なら確か……。

「酒井さいか。思い出した？」

「あー、サイカ……もごつ」

すごい勢いで口を押さえられた。しかも怪力。

「うんっ、さいかだよっ」

エンジェルスマイルが一転、デビルスマイルに。そして、

「追跡されてるんだよ。運が悪い……。ゴーストマスターの野郎共だ。とりあえずボクの話しに合わせろ。合わせなかったらその首、飛ぶと思え」

と、耳元で囁いた。

「ねえ、木瀬くん。アイス食べたーい」

「ああ、うん。いくらでも奢ってやるさ……」

サイフの中身は四十五万。今月のお小遣いだそうな。

「ねえ、木瀬くん。アイス食べたーい」

「ああ、うん。いくらでも奢ってやるさ」

知らない女と、彼は仲良く歩いていくのを見てから、一人つぶやいた。

「畜生、あのメス豚……」

「ねえ、松崎くん。アイス食べたーい」

「ああ、うん。いくらでも奢ってやるさ。とても言うかボケ」

「松崎くんのばかつ。もう知らない！ ダダダー、ゲームオーバー」

「ゲームオーバーは新しい愛を探す打ってつけのイベントじゃないか」

滅茶苦茶な幽霊だな、きょうこは。

「松崎先輩！ 行っちゃいますよ？」

「おっと、追わなくてはな。ご苦労」

その時、私は勘づいた。誰かに見られていることを。

「早くしてくださいよー、先輩」

「その先輩ってのをやめようか」

「先輩は先輩でえ……」

「きょうこ」

「おうつ」

私は正直ためらった。

今の彼女を、「きょうこ」と呼んでいいのか。

でも、彼女が「きょうこ」なのであれば、「きょうこ」と呼ぶべきなのだろう。

「冷たいね、アイスって」

「アイスだからねー」

「でも、いいの？」 サイズの三段重なんて注文しちゃって」

サイカイは、幸せそうにアイスを口に運ぶ。

「大丈夫だよ」

「ありがと、木瀬くん」

ああ、いつものサイカイがこんなにいい子だったら僕の気はそれほど沈まないで済んだのに。と、考えつつ僕もアイスにかじりつく口の中に広がる甘い味、うん。美味だ。やっぱり、バニラはシンプルかつサイコーだ。

「あ、木瀬くん。ほつぺたにアイスついてるよー？」

「え？ どこ？」

「あたしが取ってあげる」

急に立ち上がったサイカイの顔が僕の顔に急接近。右頬を生ぬるいものがかすった。

「木瀬くんのアイスも、おいしいね。そうだ、あたしのブラックチヨコレートも食べるー？」

えーと、情報を整理すると。

サイカイが僕の頬のアイスクリームを舌で舐め取った？

「木瀬くん？」

これって間接キスに該当するのだろうか。

「どうしたの？ 間接キス、いけなかった？」

彼女じゃないけど、ごめんなさい。ちづるに謝らなければいけない。

「ブラックチヨコレート、どうぞー」

口の中に冷たい塊が投入された。正確には詰め込まれた。

「どう？」

苦いです。心の傷に苦みがしみます。

「えへへー、それあたしの食べかけなんだー」

一度ならず二度までも。僕はなんていけない人間なんだ。神に愛されてはいないし、神に愛される資格もない。死神には懷かれていくけど。

「ぐああああああ」

私は頭を抱えた。あのメス豚がベンチに座っているやくの初唇を奪ったのだ。あの不埒者め、松葉杖であの豚の顔面を突き飛ばしてしまえ。

「木瀬くんのアイスも、おいしいね」

初唇をアイスと表現するなんて、なんて嫌らしい詩人なんだ！
というか、『も』って他の男の唇も奪ったのか！

「そうだ、あたしのブラックチョコレートも食べるー？」
ダメだ！　ダメだー！

「うーん、どうにか走って追いついたが、タイミングが悪かったな。
つか、あの女ギャルゲーのやりすぎじゃね？　レズビアンか」

「何という失態……。レズに初唇を奪われるなんて……」

私は本当に何もできない女だな……。

「実はな」

アイスクリームをぺろりと食べ終えたサイカイが呟いた。

「ARSだが」

「うん」

「今日は、ショッピングへ行った」

そうか、と僕は流す。

「木瀬くん」

「ん？　改まってどうしたの？」

「あたし、木瀬くんのことの世界で一番だーいすき！」

ベタなセリフキタアア、とか心の中でお祭り騒ぎになる僕ではない。

「だからね、あたし木瀬くんとずっと一緒にいたい」

「アハハハハハハ、ムリだよ」

だって僕死ぬらしいし。

「無理じゃないよ」

サイカイは優しく微笑む。

――キミが死んだら僕は寂しい――

脳裏で響く声が、優しくふんわりと木霊する。

――キミが死んだら、地獄の閻魔に会いに行こう――

「サイカ……イ？」

強い力で口を塞がれた。

――そしてボクと、同類になろう――

同類？ 死神ってことかな？

――ボクがキミの好きなのは、冗談でも上辺でもない――

そうすれば死なずに済むんじゃないか？

死んでも生き返ることに値するのではないか？

だから今の僕に出来ることを必死にやろう。

――ボクはずっと人の死を見てきたけど、キミが初めてだよ――

――死んでほしくないって思ったのは――

死神は人の死を見る。

僕は死を見ることができない。

そんなことは、この僕が一番知ってる。

だから、僕は……

「ごめんね」

僕には、死を見て、そのままにするなんて事は向いてない。

それに、サイカイが、いや。「さいか」が僕の死を見捨てるなんてできっこないもの。

私は、バカップルなるものを凝視している。デート追跡だ。趣味だとしたら、私は交番へ自首します。しかし、趣味ではなく必然なのだ。デートの追っかけは、私にとってやらなければいけないことである。

「つか、今日月曜日じゃねーか？ 仕事はどうした」

「ない」

「……そもそも何の仕事してるんだよ」

「探偵の秘書兼助手」

私は、ホームズとまではいかないが、それなりに名声のある探偵の秘書を務めている。ワトソンといったところだ。

「夢みtainな仕事だなあ……。にしても無愛想な秘書を雇うなんてセンスが欠けているぞ、その探偵とやら」

ゴツンと、ゴーストマスターきょうこ（女子高生コスプレ大好き）の頭を叩こうとした、その時だった。

マナーモードにしていた携帯電話が震えだしたのは。

「もしもし松崎です」

『あー、松崎くん？ 仕事。急でごめんねー』

噂をすれば、私の雇い主から電話が。

「あー、内容によつてはですかね」

『桐斗の件だが』

「行きます」

未解決事件を追う仕事を生業とする、彼、「佐古部優斗」に出会ったのは遅くはなかった。大学在学中に出会ったのだ。もちろん話しかけてきたのは、あちらから。その第一声が、「ヤツザキチヅルさんだよな？」であったから私は釣られてしまったのだ。まだ、その名前で呼ぶ人が居たことに驚いたから。で、「弟の無実を証明したい」と言い出し、断れずに現在に至る。あの事件の真相について私も知る権利がある。

『よかったよかった。じゃあ、例の場所で』

プツリ、と通話が途切れた。

「急用が出来た。帰って」

「えー？ 行く！」

「こっちは仕事で刑務所行くの」

「……刑務所？」

きょうこは疑うような顔をしながら、好奇心に満ちあふれた目と

いう至難の表情をして問いかけた。

「きりと会うのか」

「……多分ね」

そう言つて私はこの場を後にした。

僕は刑務所への道を松葉杖をつきながら歩いている。

「じゃあ、あたしが弁護士役ねー」

「酒井彩華一級弁護士……」

堂々と渡された偽造免許証を眺める。実によくできていた。

「てか、サイカイ怒つてないの？」

「まー、そんなこつたるーと思つてたし」

ひょうひょうと答える。

「でもボクはやり遂げる。きりとを助けるんだ」

「僕のセリフじゃない？」

「いや、キミだけじゃないんだよ。ボクだって、きりとを助けて真犯人をボコボコにするという任務があるし」

心外だ。昔、きりとをあんなにキライキライと言っていたのに、この変わり様。嫌よ嫌よも好きの内、だっけなあ？

「あ、あそこじゃないかな？」

堀に囲まれた建物。刑務所だ。

「えーと松崎クン。この子は……」

「いとこのきょうこちゃんです。将来は弁護士の秘書になりたいらしく、社会勉強の一環として、と懇願されて連れてきてしまったのであります」

中身は行動力ありまくり、見た目ヤサ男はハアとため息をつく。

「まあいいけど、口外しちゃいけないよ、きょうこちゃん」

「けっ」

初っ端から感じ悪いところを見せるなよ。

「きょうこ、ちゃん？」

「あ、えっと気にしないで下さい。よろしく願いします！」

「うんうん、よろしくねー」

そんなこんなで色々今日の仕事はハラハラドキドキでござい
ます。

今、僕はテレビドラマでしか見たことない場所に居る。面会室だ。
サイカイと共に小さな穴の開いたガラスの前に座っている。

そして、囚人が入ってくる扉が開いた。

息を呑む。

出てきたのは髪が乱雑にのびている痩せ細った男と看守。

「……珍しい。優斗以外の奴が来るとはな」

うなるような声でそう言った囚人である男。

「………佐古部優斗。君の弟か」

ギロリとにらむ弁護士赤井。そして見つめ返され焦りだす。

「失礼。自己紹介がまだだったな。ボクは弁護士の赤井」

「……こりゃ珍しいな。今更自分のことをボクと呼ぶ女性とは」

「まあ、こっちのメガネはボクの情報提供人というか依頼人。木瀬
クンだ」

はっと、気付いたような素振りをしてすぐに首を振る囚人、佐古
部桐斗。

「嘘を言うな。あいつは死んだって」

「看守殿。少しの間だけ退室願う」

無言で部屋を出る看守。それを見送ると安心したような顔をする
サイカイ。

「誰に吹き込まれた」

いつも以上に真剣な目つきをしていた。

「……………」

「誰に吹き込まれたと聞いているんだ」

「……優斗」

「そうか、貴様は殺したのか」

「……だからこうしてココにいる」

「ボクに嘘は通じないぞ」

小さく僕もうなずいてみる。

「やってないんだろう？ 脅迫されてそんなことを言わされているんだろう？ こんな薄暗くて気持ちの悪いところから出たくてしょうがないんだろう？」

「……俺は人を殺した。償いなんてできない。だから、ココから出る資格でさえ手にしていない」

「はんつ。強がり言う。知っているか？ どうしてボクがこのピッチピチの若さでこの仕事を受けたか」

それは……………。

「ボクが超能力者だからだ。特に透視能力を得意とするボクに嘘や見栄は通じない。まあ、弱点は根拠がないことだな。しかし、そんなことはこの天才的な頭脳に備わっている天然スーパーコンピュータに任せれば問題はない」

「……信じられるか」

「し、信じられないわけがない」

僕はきりとに第一声を放った。

「おまえに何が解る。俺は知ってるぞ。おまえが替え玉ってことをさ。万里だろ？ 弟だろ？」

「あー、万里クンなら今頃お昼のテレビ番組に出演しようとしてるんじゃないかな」

自称ピッチピチ（中略）がおどおどする僕の代わりに胸を張って言う。

「じゃあ整形か？ よくできてる」

本物という選択肢はないのか。

「それが先日、病院でむくつと起きあがったんですよねえ」

「……なんだって？ 回復する見込みはなかったはずだろう」

「眠り姫ならず眠り王子様だよ、もう。七年も病院という名のお城で寝てたんだもん」

「きりと、僕だよ」

僕の顔をまじまじと見つめること数秒、きりとの目から涙が出た。

「……こんなに痩せて……」

前髪が隠れていてもはつきり解った。

「………こんなに脆くなつて」

僕の所持する松葉杖から察したのだろう。

「………そうだよ、僕はこれナシじゃ歩くことさえままならない」

きりとの顔から雫がこぼれ落ちると同時に、手を伸ばそうとする。しかし、ガラスに遮られその手は僕に届かない。

「きりと、一緒にまた……」

「無理だ。俺は」「いい加減にしろ」

サイカイの声がきりとの声を制した。

「やってないんだろう？ 本当のことを言った方がいいぞ。」

サイカイがもう一度、睨んだ。

「……俺は」

きりとが、今日一番の大きい声をあげる。

「あいつらを殺していない」

サイカイは、顔を赤く染めながらも、大きくうなずいた。

「それでこそ、馬鹿きりとですう！」

目には涙が溜まっていた。

「桐斗は、別の人物と面会中だった？」

私ときょうこは察した。やくに達しない、と。

「誰なんですか？」

受付の男は一瞬戸惑ってから、名前を口にした。

「赤井という女弁護士と、その依頼者の方……」

「……その女と話がしたい。入ってもいいですか」

「えーと……」

「いいぞ」

通路の奥から声がした。透き通るような女の声。私ときょうこは、佐古部（弟）の後ろで黙っているだけだった。

「正直、ボクもおまえに話したいことがある」

現れる声の主。すらりと背の高い長い髪の女性。白いパーカーと黒いロングスカートが弁護士とは思えない雰囲気醸し出している。

「佐古部優斗くん」

その後を追うように現れる、見たことのある、というかむしろ……

「やく？」

「あ、奇遇だね……」

私の愛しのやく、そのものだった。んじゃ、この弁護士はさっきのメス豚か。そう考えると怒りが身体の底から沸き上がってくる。

「全て聞いた。キミが、やったことを。ボクは許さない」

「何を言っているんですか」

高らかに笑う、女弁護士。悪魔のようだった。こんな悪魔にたぶらかされているなら、すぐにでも助けたい。

「何を言っているんですか」

それを聞くとサイカイ弁護士は高らかに嘲笑した。

「キミは、脅迫をしたそうだな」

「……？」

ばつくれるなよ、という小さな声が近距離にいる僕にだけ聞こえた。

「外で話そうじゃないか」

サイカイは僕に手を差しのべる。差しのべられた手を掴まないわけにはいかず、僕はその手を取った。

「……よっぽど大切な話なのか」

「まあな、自称探偵の人殺しさんよ」

サイカイの刺々しい言動に、男は顔色を変えた。ただし一瞬。

「ふん、否定しないのか」

「いいでしょう、僕が人殺しではないことを証明して見せます。松崎、きょうこちゃん、いこうか」

ちづるは顔を曇らせつつ男についていった。が、もう一人は愕然と立ちつくしていた。

「きょうこ？」

「ちづる、全部話せ」

「え？」

ちづるが不思議がって立ち止まった。

「えっと、これは……あんまり口外しちゃいけないことで」

きょうこと呼ばれた女子高生のコスプレをした女は、ちづるの手を強引に掴んで外へと引いていった。

「さあ、ボクたちも行こうか」

僕はぺこりと頭を下げ、刑務所から去った。

「話せ。つべこべ言わず話せ」

「……きりとが今現在捕まっている」

「知っている。なぜ、きりとがあんな事をしたんだ！ 仲間を、わらわたちを殺すような奴じゃなかっただろうっ 信じられん」

きょうこの真っ直ぐな目。そして揺らぐ心が私でも理解できた。

「真犯人が居るはずだっ、誰だ！ 濡れ衣を着せたのは！」

「きょうこ？」

「分かっている分かってるさ。どうしてもそこまできりとに執着するか？ だろ……」

ボタンときょうこの身体が地面に横たわった。そして、身体から抜けていくかのように、十二単を着飾る、髪の長いゴーストマスタの姿が見えた。脚は透けている。

「きょうこちゃん？」

佐古部には見えないようだ。幽霊の姿が。当たり前だろう。私は追いかけた。しかし、コンクリートへ入っていつてしまい、見失った。流石幽霊といったところか。

「どうしたんだい？ 松崎くん」

「……………」

私は黙っていた。問いにも答えない。ただ、傍観するだけ。やがて、彼と女がやって来て、

「さて、魅惑の弁護士バーサス自称探偵の人殺し、ナゾトキ合戦を始めよう」

第二十話 佐古部桐斗は笑えない（後書き）

どうも鰻河です。

物語はすでに起承転結の「転」でございます。

次からナゾトキ合戦がスタートしまして、うん、逆転裁判みたく・
・ならないことを祈りつつ、がんばります。

第二十一話 真実の突きつけ（前書き）

遂にサイカイが動き出した。

犯人を突き止め、ボコボコにする。

それが物理的か、精神的か、それは誰も知らない。

第二十一話 真実の突きつけ

「まず、どうして佐古部桐斗が犯人と特定されたかの経緯を確認しよう。助手の木瀬くん。この書類を読んでくれないか？」

唐突に紙束を渡され、ざっと目を通してみる。文字の羅列、ではなく簡単に要点を記した紙だったので、心から安心した。

「早く読んでくれないかね」

「あーはい……。えっと、コンビニの防犯カメラに佐古部桐斗らしき人物が発見された。手には凶器」

「それと？」

「佐古部は過去に誘拐されていること、過去に強制的に殺人を行わされていたこと……」

「待った」

よく見ると桐斗に雰囲気似ている男（以下、佐古部弟）は、僕の言葉を遮った。

「その資料はどこで入手したんですか？」

「はっはっは、キミは当時のニュースを見たかね？」

「いや、その頃はまだ興味などなかったから見ていないな」

「キミは今ボクに武器を与えてしまった。まあいい、この資料は当時の新聞の切り抜きをまとめたものだ。ボクは生真面目な人間ゆえ、新聞のスクラップを集めるのが趣味だったのさ」

何が生真面目な人間だ。何が新聞のスクラップだ。どうせ、すべてハッキングとかネット情報だろうに。

「ほれ、聞きたいことは他にあるかい？」

「どうして今更この仕事を？」

「それは簡単。この木瀬くんは、数日前に目覚めたばかりの、事件の真相を知る人間だ。直接犯人の顔を見た唯一の人間の彼に仕事を依頼されたから」

「そっか、そちらの主張を続けてください」

ん、とサイカイが書類の続きを読むように指示したので、僕は紙を一枚めくる。

「友人を殺すような真似は常人にはできないと判断。できるのは殺すことになれている人間か。さらに本人が出頭」

「不思議だよね。出頭するくらいならやらなければいいのに。これは、どういうことか。考えられるケースは二つ。一つは、罪悪感が溢れ出てきた。もう一つは真犯人に脅迫された。ねえ、佐古部優斗くん」

書類の内容について感想と解説を同時にこなすサイカイ。対する佐古部は漫画のキャラクターみたいに手を敲いている。

「警察は前者を理由として挙げた、というのですか」

「脳みそお猿さん探偵でも解っちゃう？ えらいえらい」
さらに侮辱を付け足した。

「では、ここからが本当のナゾトキ合戦ですぜ」

余興長えええええ！

俺は独房の中で久しく大泣きした。

近くの牢獄からざわめきが聞こえても、泣くことを止めなかった。

――王子様はお姫様を見つけることが出来ました

ふいに声が聞こえた。澄んだ声、懐かしい優しい声。

――めでたしめでたし

目の前を半透明の何かが過ぎ去った。

――しかし、お姫様は言います

この声は半透明の何かの声だ。

――だあれ？

俺は思いだした。

幼少の頃に出会ったあの子を。

――私は

あの子の言葉を。

——キヨウコ

俺の身体が何かに包まれる。
ひんやりとした、感覚。

「……おまえだったんだな」

声の主はようやく姿を見せた。

——うん

あの頃と変わらない漆黒の髪。

——覚えていてくれた

そして優しさの中に強さが灯る瞳。

「ずっと、傍にいてくれたんだよな」

につこりと笑ってくれた。

——逢えてよかった

「なあ、きょうこ」

——うん、何？ 桐斗くん

懐かしい呼び名で呼ばれ、俺は感動した。

「俺はどうすればいい？」

——きつと、あいつならどうにかしてくれるはず

口調が変わった。

「そうのが、お前らしいよ。きょうこ」

——優斗くんを助けてくれる

そう言い残すと、あの子は霞んでいった。

「ボクの主張はこうだ。キミが真犯人」

「へえ、そりゃ随分と自信かですな」

「ああ、ボクは世界で一番自信家と自負している」

ここからが、腕の見せ所だろう。僕はサイカイをじっと、見つめる。

「まず根拠を示してもらわないと」

「根拠は一つ。捜査すると怪しいのはキミなんだよ、佐古部優斗。」

随分と嫉妬していたらしいじゃないか、同い年で腹違いの兄貴に。何でも出来る兄貴を恨んでいたんだろう？ 死んでほしいとでも願っていたんだろう？」

「……それが当たっていたのなら僕はこんなことしてませんよ。大嫌いな兄を牢獄から出す作戦なんて。今更笑ってますよ」

「ふん、戯れ言を。第一まず、貴様が兄貴と似ていることがおかしいんだ。兄になりたくて、真似ていたんだろう？ 今こそは違うが、当時はヘアスタイルが一緒だったらしいねえ」

「そんな情報をどこで？」

チツチツチ、と指を振る。

「キミの卒業アルバムに写真が載ってたんですよ。話によると、キミ留年したらしいじゃないか。知ってる？ 木瀬万里って。彼の弟なんだよねえ。ああ、奇遇」

「……よくお調べのようで」

「すましていても解るのさ。キミ、馬鹿だろう？」
その問いに佐古部弟は答えない。代わりにサイカイがけらけら笑っているだけである。

「否定しないんだ。まあ、いいや。ヘアスタイルが同じという事は、憧れとか何かを抱いていたんじゃないかな？」

「……………どうして僕があいつに憧れを抱かなければいけないんですか？」

「その『……………』が気になるな。話してくれないか？」

「ちづる」

魂の抜けたはず（幽体離脱したのだと思う）のきょうこが話しかけてきた。ということは戻ってきたらしい。

「覚えているか？ クリスマスを」

「あらしが来なかったクリスマス？」

「うんうん。そういえば、この前気付いたんだけどさ、あのミサイ

ルロボ……」

「えーとミサイルロボというと、病院の？」

「そうそう、あれって、『あらし』じゃないかな？」

私は耳を疑った。あらしは、あの時死んでしまったのだ。生きているはずがない。嫌な記憶だ。何度、消したいと思ったことか。

「まあ、そう疑うな。あのクリスマスの日、木瀬コーポレーションで生物機械化の人体実験が行われたらしいな。警察の厳重警備のもと行われたが、特に被害はなかったらしい」

「その人体実験の実験台があらし、と？」

言葉は無しに頷くきょうこ。

「彼女を解放してくれよ、近所に廃工場あったろ？」

きょうこはそう呟くと市街の方向を指さした。

私は、言葉なく頷いて、走り出した。背後からきょうこが叫ぶ。

「おまえしか、救えないっ」

「憧れ、という言葉は悪く言うと、『嫉妬』『妬み』とか色々あるよね。昔、好きな子がぶった？」

「否定しない」

「ほう、発端は恋煩いと見た」

恋は人を狂わせる、とぼそつと呟くのが聞こえた。

「で、その災いの張本人とは、今も連絡を取り合っているのか？」

「そんな訳がない」

ハハハ、と爽快そうに、悪魔みたいに笑う佐古部弟。

「だろうな。じゃなかったら今更こんな所にいないし、堀の中に主要人物もいないだろうね。そもそも、キミがその子と連絡とりあてれば、万事解決むしろ何も起きなかったのに」

「僕としてはその子に逢いたいと思ってるよ」

「うん、その気持ちわかるよ。正直、僕の脳内検索でヒットした件数はひとつ。僕の情報収集の賜と、キミとのおしゃべりの間に得た

情報。特定しにくかったよ、うん。こんなにも僕を苦しめたのはキミがはじめてだ！」

そりゃそうだろうね。だってサイカイにとって、はじめての弁護士体験だもん。むしろ、弁護士ごっこ。ここで、僕も口を挟むことにしよう。

「てかサイカイ。ハッキングは犯罪だし、プライバシーの侵害にもなるよ」

「僕の辞書に犯罪という言葉があつたらそれは立派な犯罪だな」
表面だけはかっこいいよ、そのセリフ。

「というか、黙ってくれたまえ、ワトソン君」
「すみません」

軽く謝罪を済ませ、傍観者へと退化する。

「ところで卒業アルバムに書いたこと、覚えてる？ 読んじやつたんだよ」

「……ああ、高校の」

「そうそう、『僕が大人になったら』という小学生みたいな題名の、再会を願うサクセスストーリー」

「前者は肯定しなければいけません、後者に覚えはないですよ？」
「文章をどんな風を感じるかは、その人の感性だろう。例えば、甘い恋物語を、人によってはエロスとを感じるかもしれない。また他の人は、愛を綴った名作だと感じるかもしれない」

「それは同感ですねえ」

佐古部弟は、ゆつたりした口調でサイカイの意見に同意。

「だから、キミの『僕が大人になったら』を僕としては、血湧き肉踊るサクセスストーリーと感じたんだ。オッケイ？」

僕はドントオッケイ。

「で、その脳内検索とやらでヒットした人物は？」

「ふむ、簡単だ。難しくて簡単だ。確証はないが本人に聞けば手っ取り早い。黒歴史をあさることになるだろうがね」

サイカイが見つめる方向。立っているのは、女子高生に扮した女

性。ちづるに、きょうこと呼ばれていた。

「なあ、黄泉の凶子さんよう」

「ふん、破壊の災禍さんがわらわに何の用だい」

サイカイの罵倒混じりの問いかけに、皮肉混じりで返したその人は仁王立ちしている。

「いやあ、その名は捨てたもんでねえ。今は、サイカイっていう源氏名なんだ僕」

「何が源氏名だ。あと、わらわはゴーストマスターだ。幽霊のトップだぞ？ なめんなよ」

「あはははは、幽霊のトップとやらがどうして、普通にトップクラスの死神ごときを狩れずにいるんだろうか。不思議で不可解で面白いね」

「こちとらその言い方がむかつくんじゃゴルア。さつさと狩られるよ死神風情が生意気に」

「死神を侮るとは命知らず。やく、こういうバカをバカと言うのさ」話をいきなり振られた！

「……………二人ともそういう話を人前でペラペラ喋っていいの？」

「「あ」」

二人の声が重なる。どうやら突いたところは痛いところのようだった。

「あのさ、どうしてくれんの、死神さんよ」

「知らん。第一、死神とかゴーストマスターとか言い始めたのはキミだよ、黄泉の凶子さーん」

「しかしながら、わらわは非常に聡明かつ美しくってねえ、グラビア誌出てるんだよ。死神でも買えるはず」

「バカだなあ、ゴーストマスターのグラビアを死神が買う理由なんてただ一つ。アンケート係の方もきつと切なくて本人には言えないんだろうけど、死神が送ったアンケートで購買目的全て同じ答えなんだよ、何だと思う？」

「ボンキュボン」

「バカ。落書きとか合成のやりがいがあるんだよ。それだけ」

「お前も心があるんだったら、そういう事は本人には言わずに自分の心の中に温めておいてあげるのが慈悲つつーもんでしょ」

「あいにく、幽霊にかける慈悲なんて持ち合わせていないんだな、これが」

「フフフ、さすが好敵手。サディストだじえ」

そういうことか。サイカイが嫌だ、と言った理由。この、ゴーストマスターがきょうこなのだとしたら、変わってない。

「いきなり『だじえ』とか使うなよ。気持ち悪い」

「さて、ゴーストマスターのプライド捨てて胃液でもその顔面にぶっかけるか」

「やれやれ、やることが突拍子もないね。胃液なんてムリムリ。せいぜい唾液で精一杯だろうに」

「ああ、唾液で精一杯だ。胃液を故意に吐くゴーストマスターなんて、株が下がる」

「でもな、ゴーストマスターさんよ、胃液って破壊力バツグンって言うぞ」

「あらあら、そんなこと敵に教えていいのでしょうか、死神さん。弁護士赤井は、相手に武器を握らせておいて、まだ笑っている。

「胸を張っていられるのも今の内さ。ボクは聡明な死神だからね。脳みそ筋肉みたいな幽霊にはハンディキャップを与えておかないと」

「はん、脳筋とは言ってくれる。焦っているのだろう、死神さんよ
お」

「焦る？ ボクには焦るとい感情の一欠片すらないねえ」

「嘘つけ、ちんちくりんめ。現に焦ってるじゃないか、そのちんちくりんな体型をどうにかしなければいけない、と」

「小柄なボディとでも言ってくれ。つか、今は変装でナイスボディだし」

「わらわの目には、ちんちくりんな身体を引きずるガキにしか見えない」

いい加減仲裁するべきだろうか。

「あのねえ、どうするんだい、二人とも。佐古部弟があ然としてるじゃないか」

「んあ？」と、サイカイ。

「ほう？」と、ゴーストマスター。

「まあいい、知ってるか。こういう時にどうするか」

サイカイが僕を見て軽快に笑うが、すぐに表情を改めて真剣な顔に変わる。

「わかつてるな、オタク幽霊」

「否定できない。まあ、ぶりっこ死神よ、安心しやがれ」

見つめ合ってるのか、にらみ合ってるのか僕にはわからないけど、意気投合してるらしい。

「いいか、佐古部弟」

痛い視線を送る佐古部弟をサイカイが胸を張って呼んだ。

続いて、ゴーストマスターが、

「わらわ達は、漫画『ぶりっこ死神さんと上品幽霊さん』ごっこを
していたんだ！」

チラリとサイカイが僕を見てぼそつと呟く。

『実在しないがなっ』

それにしても痛い嘘だ……。

第二十一話 真実の突きつけ（後書き）

鰻河です。

うーん、あとがきのネタってないよね^^
でわこれにて

第二十二話 聞こえる（前書き）

ちづるはビル街を走る。

辿り着いた廃工場で待っていたのはARS。

あらしに会った。

また再会しよう

第二十二話 聞こえる

私は走った。何か、ありそうだった。

本当のことが知れるかもしれない。

好奇心だけが私を動かしていたのだろう。

やがて、ビル街を通り抜けて、例の廃工場へとたどり着いた。刑務所からそう遠くはない。

立入禁止の札があったがそんなものを気にしていたら話にならないから無視する。

ここは来月解体されるらしい。解体された後はただの土地になるのだろう。

誰もいないはずの工場の中に立っていた、人型の何か。

見たことがあった。

病院で見た。やくの病室の前でミサイルを放っていたはず。

あれが、あらしなのか……………？

「『ARS』、最高出力」

彼女の両腕はチェンソーエッジ。頭には半透明のヘルメット。うつすらと瞳が見える。黒を基調としたボディースーツに身を包んだ彼女は私に気付いたらしく、じっと見つめてくる。

「『ARS』、標的確認、マツザキチツル。確認完了。武装確認、完了。実行準備……………完了」

言葉を言い終えると、私に向かって直線的に走り出した。しかし、私は動かない。

両手の刃が振るわれる。けれど、私はその場を動かない。身をかわすだけ。

真っ向から受け止める。私じゃないと受け止められない。

「ナゼ」

チェンソーの手が折り畳まれ、数秒で銃へと変わった。

「ナゼ、動力ナイ！」

音なく弾丸が飛び出した。それは私の頬をかする。

「憐レンデイルノカ！ コノ姿二同情シテイルノカ！」

続いて三発。私はかすかに身体を動かしただけ。場所自体は歩いたりとも動いていない。

見える。弾道はもう見通されている。

「私たちはそんなあやふやな仲だったか？」

ヘルメットの脇から雫が垂れた。

「ッ……………」

「なあ、あらし」

「う、ああああああ！」

ARSから、電子音混じりの声が響くと同時に、銃声が聞こえる。

「っ」

弾丸を軽く避け、私は気がつく。

背後に機械音。

ARSが立っていたのだ。ARSの腕は鋭い刃。背後から私の首筋にそれを突きつけ、ARSは話し始める。

「ソノヨウナ事ガ言エルノハ、ワタシヲ憐レンデイルカラ、ワタシヲ嘲笑ッテイルカラダ！」

形勢逆転されたというのが正しいか。金属は冷たかった。ARSに隣接されている状態だからはっきり分かる。彼女の身体全体は、氷のように冷ややかで。心はきつと悲しくて。

「私を殺せばいいさ」

命乞いなどする必要はない。

「今更、おまえを説得しようなんて思わないしな」

ARSはそつと間を切った。

「……………」

これ以上、思い残すことがあれば私は、欲深いだろう。

だって、最後に逢えたんだ。

「なあ、二人とも」

私はそこらに漂う、幼なじみに声をかけた。

「危険物ならおまかせだろ？ さつき」

一人は、無駄に元気で自分を自分で閉じこめた愚か者。

「弾道なら私のテリトリーだっけ？ しな」

もう一人は、辛口で静寂と孤独を望んだ不屈者。

「やっと、気付いてくれたねー。いつ気付くのか待ちわびていたよ？」

「あなたは私がないと何もできないのかしら」

ゴメンと一言謝罪する間もなく、私はARSに集中する。

「のんびりするの、全て終わってから、よね？」

「やっぱり馬鹿だね、しーちゃん。そんなのゴキブリの小さい脳でもわかるよっ」

数秒後に背後が喧嘩になりそうだったが、流すでしょう。

「ワタシヲ、笑ウ…… ナアッ！」

黒きサイボーグは両手にチェインソーを携えて、動き出す。

足音は聞こえない。

「なっ……っ」

日本の技術は既にここまで発展していたのか！

ホバリング高速移動とは、侮った。

「あらら、しーちゃんがブチギレてる間に大変なことになってるじゃん」

「成仏させてやろうか自縛霊め」

「うるさいっ！」

後ろの野次馬二名に一喝。もう少しマシなことを話せないのだからか。

「「さーせん」」

再度、正面に意識を戻す。ARSは目の前に迫っていた。

ヘルメットの奥に潜む瞳は潤み、口は下唇を噛んでいるように見えた。

「もう、いいんだ」

ARSのチェインソーが振り上げられ、ギロチンのように右腕へ

と落ち、紅く染める。

「ドウシテ、対抗シナイ」

回転する刃がゆっくりと止まり、深紅の右腕から離れてゆく。

「ドウシテッ、オマエハ」

対抗できないさ。

「私は親友を手にかけるなんて、したくはない」

背後の浮遊霊達もこの時ばかりは静かにしていた。

「できるはずが、ないんだ。私にも、お前にも」

ヘルメットの中に涙が溜まった。

「『ARS』……………モード変更」

低いような声で呟く。

「そつだ、あら……………」

その時、私も、浮遊霊達も驚愕した。

「アシュラモード、周囲一〇〇メートル内に存在する生命体全てを抹殺」

背に生える数本の腕と、体中に纏った刃から連想されるのは、阿修羅ではなくどう見ても千手観音だった。

佐古部弟は、笑っていた。顔では、スマイルだったが、内心ドン引きしていたことだろう。これは、僕が保証する。だって僕だってドン引きだもの。

「というわけでヨロシク。じゃあ話を戻そうか。あー、僕は普通の弁護士だから」

あれ、あっさりと無かったことにしようとしている？

「黄泉の凶子さんよ、自首したらどうだい？」

「え？ わらわ何かした？」

「黒歴史あされやこのバカ」

ゴーストマスターは、舌打ちを何度も繰り返す。

「黒歴史あさってくださいな」

そんな彼女をサイカイが笑顔で諭す。笑顔といってもいつものブラックな笑顔。

「ふん、そこまで言うならあさってやろう。いいか、その殺人犯！」

明らかに二十歳いったレイヤー（ゴーストマスター）がビシッと佐古部弟を指差す。

「私は、幼い頃、夢見がちで純粋な女の子だった！」

「普通だよ！」

つい口でツツコミをしてしまった。

「ナイスツツコミありがとう」

そう相槌を打ったのはサイカイ。さっき佐古部弟がサイカイとゴーストマスターを見ていたような視線で僕を見ていたが、そこは戸籍上の大人としてスルーしよう。

「あの、何かそれ以外の反応ないの？ 断崖絶壁から飛び降りる思いで言ったのだが」

「ボクが思うにやくと同じ意見だけど、明らかに普通の女の子だよねえ。幼児は純粋に夢を見る時期ってゆーじゃん？」

「いや、小学校の頃だったかもな」

サイカイの表情がみるみると豹変してゆく。表情ではない、顔だ。あまりの衝撃に顔だけゾンビ化し始めた！ 僕の目から見たビジョンだけ。

「う、うん。大丈夫、平気。中学校入るまでなら変人でも大丈夫。きつと」

あごを外しかけながらも、必死で言葉を発するサイカイに何の賞かわからないけど賞状をプレゼントしたい。

「えっと、まあその頃は引きこもりがちでなあ。家には特にだれもいなかったから、毎日一人でティーパーティーを楽しんでいた」

「うん、大丈夫。小さい子のやることだからかわいいで済む」

「ロリ死神、バカにしてるだろ」

ガクンガクンと大振りに頷くサイカイに、ゴーストマスターは「死ね」とジェスチャーした。

「独りぼっちのわらわの元に、ある日同じ歳の男の子が現れた。幼い馬鹿な女の子、わらわだな。とりあえず、その馬鹿は脳内が少女漫画と世界名作で埋まっていたからか、王子様だと思った。不思議にわらわの家はアンティークハウスだったからな」

ティーパーティー、馬鹿、アンティークハウス。

「わらわは自分をマリー、男の子をルイと名付けた。夕焼け時に帰ろうとする男の子にわらわは、言ったのじゃ。『また明日も来てね』とな。しかし、翌日来たのはちがう人物だった。しかし、わらわを知っていた。だから、わらわは信じた。違う人間と知っていながら、自分言い聞かせたのだ。『ルイだ』ってな。その翌日は初日のルイ、その次は二日目のルイ。入れ替わりにやって来て、日曜日には二人現れた。日曜日が一番楽しかったぞ。しかし、わらわは初日のルイと出会ってぴったり一ヶ月の日に運命を歪められた。わらわはさらわれた。でも、それもいいかな、と思ってしまう。だって、ルイが助けてくれるもの、と夢描いてな？」

マリー、ルイ、一ヶ月。

「あとは、知ってるだろうなあ、死神さんよお」

「助けに来なかった二人の王子様を恨んでしまった。裏切られた、と感じてさ」

ゴーストマスターは縦に首を振り、佐古部弟に目をやった。

「なあ、二人目のルイ」

「マリちゃんは死んだ？」

もう一度、縦に首を振る。

「僕が、殺した？」

「そうだよ、優斗くん」

佐古部弟は、震えていた。しかし、顔は不気味な笑みを浮かべている。

「違う、あいつが殺したんだ。僕は、何もしてないさ……」

ゴーストマスターは、黙って首を振った。

「罪を認める、よ」

声が揺らいでいる。頬には雫が滴っていた。

「マリちゃんはここにいます！ マリちゃんはず」

パチリと、ゴーストマスターが佐古部弟の頬を叩く。

「自分の悔いを他人にあたるな！」

瞳を見開く佐古部弟に、ゴーストマスターは叫んだ。

「気付かなかった罪を認めるよ。見苦しいぞ、優斗！ みんな変わってしまった、きりとも優斗も、わらわ、いや私も！」

「おまえは、マリちゃんじゃない」

「まだ言うかつ……」

当然の光景だった。

死んだはずの人間がここに存在することは、普通あり得ないから。

「マリちゃんは、どこだッ」

僕は狂ったように叫ぶ佐古部弟を止めようとして、一歩踏み出したけど、

「アレは僕たちが関与していいことじゃない。あっちに任せろ」

「……………」

サイカイが僕の手首を掴んで止めたので、言うとおりにする。

「死んだ、でも魂だけはここに在る」

「そんな馬鹿げた話があるわけな……」

佐古部弟の言葉が言い終わらないうちに、ゴーストマスターは言い放つ。

「ある、世の中には少女漫画みたいな恋を求める格闘少女だっているし、イタコも実在する。二重人格もいれば、シヨックで性格がガラリと変わったヤツもいる。語尾に『ですう』とかふざけた超能力者も、ムチとロウソクが標準装備のサディストもいる！ 公衆電話フェチだって、自分を歴史上の人物と言い張る痛い子もいるんだッ！」

ゴーストマスターは、途切れ途切れの言葉で佐古部弟を説き伏せた。

「だから、信じてくれ、優斗っ」

両腕に2本、背中の腕に4本の六刀流。

目前に迫る刀身を相手取るが、ARSの六刀乱舞には隙が見あたらない。私の方は持ち合わせが無い。昔のように常に拳銃を携帯していればよかったと後悔する。

距離を取っても、詰められるので無意味と判断する。しかし、この命が尽きては悲しむヤツがいるから安全第一で動く。

「ッ！」

追いつめられた。背後にはトタンの壁。わりと開けた場所と考えていたのだが、動いてみると、案外狭い。

バリイイン、とトタンが大きな音を立てた。鋭い刀がトタンを貫いたのだ。

「うつわ、いいなソレ。ふーちゃんが喜びそうだ……」

冗談と溜息混じりにARSに言っと、またバリイインと、耳障りな音が。

「ふう、耳元でこの音を聞かされるこっちの身にもなれよ」

今度は挑発も加えてみた。しかし、ARSは全く揺らぐず、クソうるさいトタンを再度鳴らす。

「あの、食べても美味しくない……けど？」

三度目は命の危険を晒された牛の^{オス}気持ちをミックス。

「ARSチェック・メイト」

逃げ場を失った私の心の臓に背中の刀を突こうとした、瞬間、ARSの腹部を刀が貫いた。

「はあ、はあ、はあ」

ARSの背後に、長い髪を一つに結んだ美女を見た。

「間に、合いましたね………」

何を隠そう私の自慢の後輩、結城譜蘭だった。手には日本刀というよりか、太刀といった方が正しいくらいの、重そうな剣。

「相変わらず仕事が速いねえ、しーちゃん」

「どうやら私は悪運が強いらしい。」

「ふん、私は私の出来ることをしただけ。あと、しーちゃんつてのやめなさいよ」

「いや、違う。私の悪運が強いのではなく、守られているんだ。」

「いつも、二人が守ってくれていた。」

「ずっと、私が気付かない時でも。」

「だから、私はここまで……生きてこれたんだ。」

「……」

「やっと、納得したらしい佐古部弟に、ゴーストマスターは微笑んだ。」

「さあ、佐古部弟。観念しなっ。ボクの名推理、ご覧頂けたらうし！」

「佐古部弟って、実際に口に出して呼ぶのはやめようね！ さらにアンタは弁護士じゃなかったの？ その言葉だと明らかに探偵側だからね！」

「本当にマリちゃんなのかい？」

「ああ、そうだ。私は生前、淀見恭子として生きていた」

「どうして、気付かなかったんだらう……」

「佐古部弟は、その場に膝をついて嘆いた。」

「私は気付いていた。おまえが、優斗だということを」

「どうして、変わっちゃったんだよ……」

「それは……」

「それは僕も気になる。あのマリーが本当にきょうこなら、どうしてここまで変貌したのか。」

「裏切られたと考えたからだよ」

「え……？」

疑問の声を漏らしたのは、僕。

「そうですよねえ？ きょーうこ？」

いきなりぶりっこ化する弁護士、それを異様な目で見つめる証拠が揃わない殺人鬼。弁護士の容赦ない精神攻撃に耐えるコスプレイヤーと、疑問に疑問を重ねる僕がいた。

第二十二話 聞こえる（後書き）

鰻河です。

今回はうーんな話ですね。

次の話できつと一段落つくかと。

第二十三話 誘拐犯の犯行動機（前書き）

十五年前。

僕らは誘拐された。

誘拐犯は愉快犯。

十五年前の真実が今、解き明かされる。

第二十三話 誘拐犯の犯行動機

「しーちゃんって人選上手いよねえー。文化祭でも、クラスの役割分担できばきこなしてたし。ま、役割分担だけけどね。ふーちゃん連れてくるとはあんた天才」

「なに？ 嫌味？」

そんな浮遊霊をよそに、ARS（アシュラモード）とふーちゃんは、刀を交えていた。

金属と金属がぶつかり合う音が周囲に響き渡る中、私は脚を竦ませていた。

ふーちゃんの長い髪が揺れ、ARSの六本の刀剣が踊っていて、私は何もせずに地べたに座り込んでいた。

さっきまでの勢いはどうしたのだろうか。それは私にとっても不思議でたまらなかった。ただ、わかることは……

私が強がりで、弱虫で、すぐ人を頼ってしまう根性なしということ。

そんな戯れ言を考えているうちに、太刀一刀流VS日本刀六刀流の戦況が変わった。

まさに一突き。ARSの真ん中を大振りの太刀で貫いた。よろめきながらも刀を二本をコンクリートに落として、ARSは太刀を掴んだ。拳と身体からから紅色の液体が垂れながらも、四刀流を振るう。ふーちゃんは、油断していない。太刀をガクンと抜こうとする。しかし、ARSの怪力が掴んだ太刀は動かない。

「一進一退、かしら？」

「あのさ、コレ……周辺の人々が野次馬にこないじゃん？ てか、そもそもどうしてポリスが来ないのかな。しーちゃん、知ってる？」
「フン、イタコ奥義『スケスケミエマセーン』に決まってるじゃない」

「なるほど、『スケスケミエマセーン』か。あれって、他人に見て

ほしくないと、隠すイタコ奥義だったよねー。その他、スカートにパンティ、自分が見たくない物をカットする禁忌だったような……」

「パンティってさつき、オッサンじゃないんだから……」

浮遊霊の会話もたまには為になるものだ。その『スケスケミエマセーン』とかいうイタコ奥義（禁忌）によって私たちは一般人に見られていないのか。私は浮遊霊から赤い戦いに目を向ける。

既に太刀は赤く染まっていた。腹部に太刀は刺さったままのARSは血塗れだった。両者、一言も叫ばないし、喋らない。それほど、真剣な戦いなのだ。そして、私はコンクリートに転がる二本の刀を見た。

「……それを持つ勇氣は、あなたに……ないでしょうに」

浮遊霊の一人が、軽蔑するかのようにそんな言葉を発した。

「できたとしても、完遂することはできない、でしょ？」

もう一人は、嘲笑うように。

「中途半端にやっても、結果は悲惨なことになるだけじゃない？」

「違う？」

「確かに、そうだ」

私は浮遊霊の言葉に頷いた。

「助けたい、救いたいなんて綺麗事は小学生までだと思う。それでも、ちづる、アンタは行動に移すの？ 後悔するよ？」

「ああ、そうだ」

後悔、か。そんなの、何度も経験してるさ。今更、何を後悔しよう。

「あと忘れたようだから言っておくけど、私の精神年齢は小学生程度だから」

綺麗事、いいじゃないか。後悔？ したくないけど、まあいいじゃないか。

私は、ゆっくりと膝を伸ばして立ち上がる。右足を一步踏みだし、左足を踏み出す。繰り返すうちに、刀が手の届く場所に。それに手

を近づけ、しっかりと握った。

「ふーちゃん、後は私がやる……ぞ」

刀を両手でぐっと握りしめ、ふーちゃんをどけた。少しまごついたが、大人しく手を引いてくれた。

「ARSターゲット確認、松崎千鶴……。任務遂行」

腕は震えてない。脚もしっかりしてるし、なにより一切の迷いがない。

「ターゲット抹殺せよ」

今まさに私の身体はARSの刀によって木っ端微塵になろうとしている。刺されようと私は気にしない。

ARSは私を刺し、引き裂いた。痛みなど感じない。

だって、もう一度みんなと逢えて、うれしかったもの。

きょうここに、あらしに、さつきとしな。そして、ココに来るまでに気付いたんだ。

あの弁護士はさいかだ。そうだよな、やく。

「はは、はははははは……」

ゴーストマスター、淀見恭子は少しの間だけ黙りこくると、いきなり笑い出した。

「覚えておけ。裏切ったのは君だよ、淀見恭子」

「……ああ」

「いきなりいなくなつて、裏切られたのは私、なんて被害妄想の激しさにはうんざりする。で、大嫌いだろ？ そんなもってずっと知らないフリ。最低だよな。違うかい？」

それには、答えなかった。

「隠しきれなかったんだろっ、アレ」

「う……ん」

「白骨化した死体、飛び散った血。あれは誰のモノだ？」

サイカイは淀見恭子ににじり寄る。

「あ、あれは、父親……だ……」

「おまえが殺したのか」

サイカイが問いつめると恭子は力なく首を縦に振る。

「戸籍情報にハックして調べさせてもらったよ。笹原篤史は、淀見桂一郎、おまえの父親の従兄弟らしいじゃないか。まったく、警察もどこ見てるんだよ」

そのハッキング技術を警察に届け出てください！

「で、おまえが頼んだんだろう？ 笹原に誘拐してくれと。ここからはボクの推測だ。そこで笹原は『この際、集団で誘拐すれば君が父親を殺した罪は影に隠れる』とでも。アンティークハウスは笹原の所有物だったし、死体がそこにあるとは思えないだろう。そして、そもそも笹原篤史は、外科医。そして闇医者だ。自分の指紋も、ボクの指紋も全て消し去った。証拠も何も、指紋と共に消し去ったのだ」

「……何でそんなに知っている……」

「最初からわかっていたが、ボクも言いたくなかった。そして、誘拐された子供達の共通点は『不幸』だということ。軽い超能力を所持し、ちやほやされて、ろくに自分の時間さえ無かったボク、赤井彩華。まあ、赤井の名がキライだから酒井って言っているけどね。とりあえず、続けよう。貧しい上、両親はのんだくれな櫛屋あらし。弟と妹が多く、両親に相手にされず、孤独な生活を強いられた松崎千鶴。腹違いの弟に逆恨みされ、周囲からのプレッシャーに耐えなければいけない佐古部桐斗。毎日、病室で息をし、動くことさえままならなかった神来早月。両親が交通事故で亡くなり、身よりのないまま路上で暮らしてきた姫井椎名。望んでもいないのに英才教育を受けさせられた木瀬夜久。そして、父親にDVを受け、助けを求められず、最後の手段に出してしまった、淀見恭子。ボクは、全て見ていたよ」

淀見恭子は涙を垂らす。佐古部弟は惚けた顔をしている。淀見恭子が崩れ落ちるように、コンクリートの地面に手をついた。

「マリ、ちゃん……」

「すまん……すまん。全部私のせいなんだ、私が、私が笹原を頼らなければ優斗は手を汚さなかった」

うずくまってわんわん泣いた。

「で、どうするんだい。佐古部優斗。おまえは、いつの間にか全てを吐いた。今から警察に行け」

佐古部弟は、顔を拭くと笑いながら、

「僕は行きますよ。桐斗だって、出たいつて思ってるだろうし」

そう言つて警察署があるらしい方向へと歩いていった。

そんな佐古部弟を見て、僕はサイカイに話しかける。

「僕さ、あの人と仲良くなれそうだ……」

「お？ 塀の中にでも行く予定あるのか」

「塀の中じゃなかったら、って話だよ」

「あはははは、くらえ！」

ガシンと頭に拳を食らった。そして、意識は遠くなってゆく……。

第二十三話 誘拐犯の犯行動機（後書き）

鰻河です。

毎回毎回駄文失礼します。

そしてこれで失礼しました。

次はきつとギャグパート・・・

第二十四話 ポニーテールとリーゼント（前書き）

サイカイに殴られ、病院へ。

結構眠っていたらしいが、目覚めた場所は一般病棟。

そんなやくにポニテメイドとリーゼントの見舞いが来る・・・

第二十四話 ポニーテールとリーゼント

「……………あれ？」

白くて清潔そうな天井、消毒液の臭い、さらには周囲が騒がしい。
「普通、病棟？」

日めくりカレンダーは、十月十九日。僕が（あの世から）戻ってきたのが十四日で、刑務所へ行ったのが十七日だから……

丸一日寝ていたことになる。それはないと思うから、起きそうになったところをサイカイに襲われたんだろう。ふう、気をつけないとな。危険人物は一番近くにいますし。

「お、あんちゃん起きたかい」

病院のわりにざわついていると思ったら、普通病棟だった。僕が寝ているベッドの他に五台設置されていて、その上に寝ている人は全てご老人。なじめるかどうか不安だった。

「ほれ、見なされ」

正面のベッドで脚が包帯でぐるぐる巻きの老人は僕のベッドに隣接して設置されている机を指さした。そこには、フルーツバスケットが、三つほど。花束がお花畑状態で……。最初にココを見たら天国かと思うくらいだった。

「若いっていいもんじゃの」

ふおっふおっふお、とご老人達が朗らかに笑った。なじめるかどうかの不安は飛んでいった。

「ちなみに僕は集中治療室っていうか特別病棟だったはずなんですが、何か御存知ですか？」

老人達は、相談を始めた。ナースコール押して看護婦さんに聞いた方が早そうだ。

「そうじゃ、通り魔にやられた女性が来たんじゃないかかったかの」
「……通り魔？」

うんうん、と皆顎の動きをシンクロして頷いた。

「意識もギリギリの状態だったらしく、あんちゃんの部屋がいいと言って……」

「あんちゃんの彼女か？ 布団とシーツは洗濯せずにそのままがいい、って言ってたらしいの」

「看護婦さんが『わかりましたから話さないでください』って言ったら、満面の笑みを浮かべたそうなの」

誰、だろう。

「そんなことをあんちゃんの見舞いに来た、女性が言っておったの……。でっかい胸ぶら下げて、泣いておったぞ、むふふふふ」

「二股しとるのが、あんちゃん。青春っていいの」

ふーちゃんが、来たんだ。

「その他に、誰か来ましたか」

「髪の毛をなんて言ったかな、最近の若者はよくわからん。ああ、あの不良ドラマに出てくる……」

「リーゼント、じゃなかったかのう？」

「そう、そのリーゼントというヘアスタイルのあんちゃんが看護婦さんに止められながらもやって来たんじゃない」

誰だよ！

「ありがとう、すまん、ありがとう、すまんと泣きじゃくっていたの」

「恐る恐るテルさんがカツラか聞いてみたところ、地毛と大声で叫んで帰っていった……」

地毛でリーゼントできるくらいのロングヘアー、僕にそんな事を言う人。いただろうか。

「あと、女子高生が二人も来た。一人は釘バットを背負ってあんちゃんの顔を見てすぐ帰ったけども、もう一人はあんちゃんが寝てるのをクスクスと笑って、帰っていったの。黒いスーツの危なそうな男を連れて歩いていた、かな」

一人は淀見恭子。もう一人は、木瀬真理奈。僕の妹だ。

「その子は、随分と失礼だったのう。ご老体相手に『じじい』『ば

「ばあ」と言つて、嫌な女じゃった」

「さらにはあんちゃんにも、『さつさと死ねばいいのに』と呟いておつたの。耳は悪いがよく聞こえる声だった……」

サイカイの言葉を思い出す。木瀬真理奈が、僕の死を望んでいる、つて本当だったのか。信じたくはなかった。何故かは見当がついた。万里が芸能活動をしている中、継ぐのは僕。真理奈は後継者の座を狙っているのだ。そんなもの、言ってくれば譲るのに。頭の固い妹だ。僕が本気で後継者などと思つてゐるのか。

「あと、芸能人が来た」

「ああ、万里か」

「何！ あんちゃん万里様の何じゃ」

左隣のおばあさんが、血走った目で僕を睨む。

「木瀬万里は、僕の弟です……」

「電話番号とサインをおくれ！」

万里は若い子からご老人まで幅広く人気のようです。

「あとは、男の子が来たの。何も言わずにあんちゃんの頭を殴りおつた。誰にも言つなと脅されておつたから看護婦さんにも言えぬ」

予想的中！

「ところで知つておるか。新聞で読んだんじやが、数年間、眠つたまま自宅で過ごしていた人が飛び起きたんだつてな」

「その話詳しく聞かせてください！」

「確かわしのベッドの下に……痛たたたた……」

「ああ、無理しなくて大丈夫です」

「若いのにしっかりしとるの。最近の若者はちよいとアレじゃと思つておつたんじやが、あんちゃんみたいな若者がいれば安心してわしらは逝ける……」

僕から見て、正面右のおじいさんは天に召されようとしていた。

「これ、孫が見舞いに来るんじやろ。逝くではない」

そして僕の右のおばあさんがその魂を現世へと引き戻すのであつた。

「そうじゃそうじゃ、孫の顔だけは見たい……」

「木瀬さん、お見舞いが来ていますー」

看護婦さんの声がして、数秒。ご老人達の笑い声と共に入ってきたのは、ポニーテールの清楚な少女だった。しかし、メイド服に身を包んでいた。

「……えーと、あり……」

カツンカツンといい音をたてて僕の前に歩いてくると、ビシッと指差して言った。

「私は、櫛屋あらし。本日付で、木瀬コーポレーションによってやぐ様の身の回りのお世話をさせていただきます、SP兼メイドですわ！」

「ご老人達のテンションは頂点に達したことだろう。」

「えーと、ARS……は？」

「一昨日解任されましたの」

さらりと言。ARSもそれなりに気に入ってたんだけどなあ。

「木瀬さん、またお見舞いがきてます……」

看護婦さんがもう一度訪れた。今度はすごくめんどくさそうな声だった。

「おいーっす！」

扉を開けたのは、すごく迷惑なくらい大声で僕を呼びリーゼントだった。

「……………あらし、誰だか分かる？」

「あらら、七年間眠り姫やってて親友の顔も忘れてしまいましたのね」

「ちなみに僕は七人のお友達全員が親友なんだ」

「その中に私は入っておりますわよね。あとは、私以外のライラとツインテとツンデレと公衆電話フェチ、そしてちづるなの？」

「うーん、最後はふーちゃんが当てはまるかもね」

「つーか、俺抜きで話を進めるなっ」

いつの間にかリーゼントがベッドの前に押し掛けていた。そして、

睨んでくる。不良に絡まれる真面目生徒の気持ちがよく分かった。

「ねえ、なんでリーゼントなの？」

「ふっ、よくぞ聞いてくれた！」

睨むのを急に止めると、誇らしげに胸を張り、頭の上にある髪の毛キヤノン（正式名称はリーゼント）を強調する。

「髪の毛が長くなっちゃったからよ、地毛でリーゼントできるか試してみたんだぜい！」

それをする勇氣は褒め称えたい！

「相変わらずバカは変わってないなあ、きりと」

「まあ、一応馬鹿なガキの片割れだからなあ」

リーゼントの男は豪快に笑う。僕も笑う。あらしも笑う。

「でもどうしてリーゼントですか？ 私の希望としてはポニーテールですのに」

「どうして俺がお前の希望を聞くんだよ」

「明日はポニーテールになさい。メイド服がゴスロリが美德ですわね」

「あらし、それがきりとがバカから変態になっちゃうよ」

「それもそうですわ、とどさくさに紛れてきりとのリーゼントを掴み、折り曲げた。」

「やめろ！ 三時間かけてセットしたんだ！ 時間は金では買えないぞ！」

「今から私がポニーテールにして差し上げますわ！」

「ぐああああっ」

周囲の老人達はすごく迷惑していた。テンションゲージが百から一へと急降下！

「あのさ、談話室とかあると思うからそこで話そうよ」

「あ、そうだな」「そうですわねえ」

やっと人様に迷惑をかけていることに気がついた顔だ。

「では私は車椅子を借りてきますの」

「じゃあ、俺は車椅子が来るまでやくをお姫様だっこして談話室へ

連れていく」

「やめてよ……っつ」

拒否したが遅かった。僕の身体は既にきりとの腕の中。

「俺は他人からホモと呼ばれてもいい！」

「僕はホモって言われたらすごい傷つく」

あらしは既に車椅子を借りにナースセンターへ行っただけらしい。ご老人達は、ドン引き。嗚呼、さようなら僕の名声……。

「さ、行くぞ、プリンセスやく！」

「……松葉杖で歩くよ」

必死にきりとを説得すること二分。松葉杖で歩くことを許され、ぺこぺこ頭を下げながら病室を後にした。

「談話室でも騒いじゃダメだって」

「……」

廊下で告げられた非情な宣告。僕はあらしが借りてきた車椅子に腰掛けながら絶望を味わった。

「なあ、中庭とかないのか？」

「ああ、中庭。ぼろぼろリーゼントのクセにやりますわね」

きりとのリーゼントはあらしに触られ、潰されグシャグシャだ。

「この際ポニーテールでもいいんじゃないかって？」

「それだったらワイルドに髪をたらしただ方がいいな」

「私のバッグの中に寝癖直しとヘアブラシがありますわ。お使いなさい」

「お、気前がいいな」

あらしがバッグの中のポーチから折りたたみヘアブラシと、コンパクト寝癖直しを取り出してきりとに手渡す。

「ただし、弁償ですよ」

「……わかった」

あらしが車椅子を押してくれた。その後ろをきりとがヘアセットしながらとぼとぼ歩く。なんか懐かしい。こうやって、友達と歩くことがとても。

「今日は絶好の遠足日和ですわね」

中庭に出るとあらしは空を見てそう言った。中庭には、他の患者さんも居て割とにぎわっていた。

「遅かったね」

その中に一人、患者でもない見舞い人でもない少年が一人。

「サイカイ……」

「今日はサイカイじゃなくていいよ」

「じゃ、さいか」

「なんですかあ？」

サイカイ、いやさいか（見た目はサイカイのままだけど）は僕たちのもとへと走ってくる。芝生の上を無邪気に。

「とても言うかと思っただか！」

僕の隣を跳び蹴りが通った。さっきの撤回。無邪気じゃない！邪心に満ちあふれている。

「ぐふっ！」

きりとの顔面にキックが炸裂。それと同時に口から液が噴出。

「きりと救出の為に一番苦労したのは誰だろうね！なのに、寝て働かないこのメガネにばかり感謝してさ、何だよ。感謝するべき相手は誰？言ってみてよ、この馬鹿野郎」

「ぐお、や、やく……」

今度は真っ直ぐきりとの顔面に拳が飛ぶ。

「ちよ、痛い！」

「ふん、反省しやがれ」

「さいかはいっつ肉体派になってしまったんですの？ライラの参謀は誰が担いますの？」

車椅子のハンドルから手を離し、再会を喜ぼうとしていた。

「あれ、あらしも居たの。うっわ、生きてたんだ」

「私、安心しましたわ！さいかがぶりっ子卒業できて……よかったですわ」

刹那、さいかの鉄拳があらしの顔面にクリティカルヒットした。

ああ、痛そうだ。

「ま、まああらしは女の子なんだから……」

「はあ？」

「え？　じゃあ男なん？」

「何を仰いますの、私は女性ですわ」

「ただし、改造人間だよ」

「ふう、バラさないでほしいですの」

言われてみればそうだった。きりとはまだ芝生の上に転がっているのに対し、あらしはピンピンしている。

「サイボーグガールなんてSFちつくで可愛くありませんこと？」

「本人が言っなよ、な」

「だから、心も体も女子高生のままですの。要は老いることもなく、食事をとらなくても生きていけるといふ便利な身体ですの」

「ライラのメンバーは生きていられる、つか既に死んでるが、他の五人プラスふーちゃんは死ぬよ」

「その時は、その人も改造人間にするまでですわ」

「恐ろしい発表だね。将来私は友達を改造人間にするとっているようなものだよ、あらし」

「大丈夫ですわ！　立派な改造人間もしくはサイボーグに仕立て上げますの」

「ああ、改造人間になって常識までも改造されたか……いや？　元々常識など知らない人間だったから……。つまりこいつは精神崩壊をしていない？」

そこで、顔面を蹴られ殴られ、僕ら生身の人間にとっては大ダメージとなる攻撃を耐えたきりとが立ち上がって、

「しな、ちゃあーん！」

刹那、ビービー弾がきりとのおでこに炸裂。しかし、きりとは立っている。

「死ななかった、やっぱり腕がなまってるわね。目を狙ったはずなのに」

長い髪と凛々しい目をした女性がビービー弾を構えていた。

「さつき、ちゃぁーん！」

刹那、腐った果実がきりとの顔面に直撃。

「死ななかった、七年くらい前のオレンジなのに」

赤頭巾ちゃんのようなバスケットの中に腐臭のする何かをつめた女性が立っていた。白いワンピースとカーディガン。セミロングの髪に麦藁帽子。これが本当の清楚だよ！ バスケットの中から腐臭さえしなければ。

「しな！ さつき！」

見間違えるはずはない。しなだ、さつきだ。さつきはツインテールではなかったけど、よくわかった。

「死んだと思ってたでしょ、やく」

バスケットをその場に置いて、さつきが走ってきた。

「早月ってこういうイメージ？」

「うん……」

さつきは、あの日のような天使の笑顔を浮かべてくれた。

「あと、しな」

さつきを追って歩いてきたしなを見る。

「相変わらずアホ面ね。見ていてイライラする」

「やくはアホ面じゃないよ。単に草食系なだけ」

「いや、違うね。コイツは自惚れやで、自分がヒーローだと信じている。第一、恋愛に対して奥手ではない」

そこにボクっ子さいかが割って入った。

「あー、そういう部分もあるかもしれない」

「うーん、しばらく見てなかったから。すっかり変わっちゃったね」

「ハア、ハア、しな、ちゃん……」

腐ったオレンジを顔面に広げた男はしなの足をがっしり掴んだ。

「ぎゃ、キモ……」「ハッ、ハッ」「いつから犬になったのよ」「逢いたかった……」「いや、まじキモいから。近づかないでくれる？」

そして、もう一発ビービー弾を至近距離で発射。
「ガッ」

流石のきりとも至近距離では痛いらしい。

「あのさ、ビービー弾は人に向けちゃいけない……」

「ん？ 法律が変わったの？ 嫌な世の中ね」

「法律というよりか、常識だよ……ん？」

「先ばーい！」

ブルン、ブルン、揺れる胸を見た。

「うげ」

早月の表情が変わった。

「あんにやる！ あれでもまだ成長の余地があつたとはあ！」

「まあ、あんたは小さいしね。逆恨みも罪じゃないわよ」

さつきが隣にいるしなを猛スピードで平手打ち。

「にしても、いったい二人は何をしていたの？」

「一昨日まで寝てたよ」「一昨日まで寝てたわ」

僕と同じ、と。

「にしても随分と動けるなあ」

「こちとら、アンタみたいに金持ちのボンボンじゃないの。だからずっと廃病院で寝ていたわ。起きたらよく動けないから無理矢理でも筋トレしたのよ」

「あたしもあたしも！ でも、あたしは自宅だったかなあ。筋トレできなかったなあ」

相変わらず超人だ！ 僕には真似できない業！

「腕立ては一時間に三百くらい？」「しーちゃん、あたしは一時間に五百回だよ！ ちなみに腹筋は一時間あたり二十五回」「私は四百よ」「やった、総数ではあたしの勝ち！」「ちなみに私は背筋を五十回」

もう、この人達スポーツ選手になるんじゃないかな。

「先輩、もう大丈夫なんですか」

世界の違いを感じている間に、ふーちゃんが僕に寄り添っていた。

「完璧な訳じゃないけど、まあまあ元気だよ」

「退院はいつになりますかー？」

「すぐだと思っよ」

しかし、ふーちゃんは悲しそうな顔をしていた。

「先輩は知らないんですか、ちづる先輩」

「あ……」

「一昨日、血塗れで病院に運ばれたんです。意識もギリギリで、やくのいた部屋がいい』って、言ってて……」

「僕、行かなくちゃ……」

僕は車椅子を動かそうとしたが、ふーちゃんがそれを止めた。

「待ってください……」

「どうして」

「ちづる先輩は面会遮断なんです！」

ふーちゃんの叫びに、皆が止まった。しなの足にすがりついていたりとも、あらしと口喧嘩をしていたさいかも、腐ったフルーツで遊んでいたさつきも、皆が手を止めて僕とふーちゃんを見た。

「……私たちには何もできないんです」

遠くで他の人が騒いでいる以外は、沈黙だった。うつむいて誰も喋らない。

面接遮断、それは危篤状態ということ。

なにか、ちづるのためにできないか。

何か、千鶴の為に……

「そうだ」

僕に出来ること。

僕の腕が鈍っていないなら、手先が器用なままならば、僕の長所が残っているならば、

「千羽鶴を折ろう」

不可能な話ではないはずだ。

あと、五日。

タイムリミットまでに、折ろうじゃないか、千羽の鶴を。

今日はみんなで一八十羽折った。折り方さえわかれば早いものだった。しかし、問題は体力だ。僕は五十羽程度で疲れてしまう。これではいけない。

第二十四話 ポニーテールとリーゼント（後書き）

鰻河です。

きつと次回は、シリアスかもしれません・・・

第二十五話 千羽鶴アストレイ（前書き）

千羽鶴作りは地味にきついが、やくの手は止まることなく働き続ける。

タイムリミットは刻一刻と近づく。。。。

第二十五話 千羽鶴アストレイ

一晩明けた。今日も折ろうか。千羽鶴。

正午を過ぎた頃には、四十羽だった。休み休み折るのは効率的ではない。

「やつ」

「サイカイ……」

サイカイが、猫の姿で窓から見舞いに来た。

『あと四日でタイムリミットだよ』

頭の中でサイカイの声が響く。

『気は変わったかい？』

「いいや、変わってないよ。このままでいい」

『にしても、すごい疲れているな。大丈夫かい？ きりともさつき
もしなも就職活動か。しかし、あらしはどうした』

「……別に大丈夫だし、僕より大変な人を手伝ってもらってる。どうせ、僕はもうすぐ」

『随分とネガティブ……。寝てないようだろう』

「うん。でもさ、折るって決めたから、やり遂げるべきじゃないかな」

『昨日も言ったけど、ボクの力ですぐに千羽作れるよ？』

「サイカイ、それじゃだめなんだ。折るんだ。作るんじゃない、折るんだよ」

『まあ、それは好きにしておけばいいけど、健康には気を使ってね』
「わかってる」

僕はぶっくらぼくに返事をする。

『じゃあ、ボクは帰るよ。気が向いたら手伝いに来る』

「ありがとう」

サイカイと話している間も、僕の手は止まっていない。少しの時

間だって、無駄にはできないから。

『んじゃ、また』

「うん」

猫のサイカイは窓から帰っていった。

夕暮れだ。まだ、四十八羽。おかしい、五時間で八羽しか作れていない？ まさか、

「寝たの、僕」

「そうですね。寝ていましたのよ」

「って、あらし。帰ってきてたんだ」

僕が寝ている間に帰ってきたあらしが、慣れない手つきで鶴を折っている。

「手伝ってくれてありがとう」

「どういたしましてですわ」

それから、数十分。何も話さず、二人で黙々と鶴を折る。

「あのさ」

口を開いたのは僕だった。

「何ですか？」

「あらしは、どうして改造人間になったの？」

「金ですわ」

「か、かね？」

案外ストレートだった。

「木瀬コーポレーションと株式会社白石電子が、ある少女を殺そうと考えましたの。名前は松崎千鶴。木瀬コーポの跡取り息子を籠絡した罪ですわ。そして、殺すには最も近い人物を手中におさめるという馬鹿らしい作戦を考えついたわ。ホント、猿知恵ですわよね。」

そこで、ターゲットになったのが私。当時幼かった私は、金ほしさに承諾してしまったのですわ。私の家は貧しくって。親孝行したかったのですわ。そして、私たちが高校一年のクリスマス、改造実験は始まりましたわ。最初は辛かったのですけれども、一応無事に済

みましたわ。卒業式前の写真撮影の時、皆襲われましたわよね？

あの時死んだのは二人でしたの。私は一番はじめに襲われましたわ。ですが、鋼鉄の身体を持った改造人間の私は致命傷ではありませんでしたわ。しかし、痛手でしたわ。左胸は改造人間にも急所ですの。しばらくは動けませんでしたわ。ですから、殺人鬼が去るまで私は動きませんでしたわ。まだ、改造人間としての力も上手く使いこなせませんでしたし……。次に殺されたのはしな。しなは左胸を刺されましたわ。そして次はさいか。さいかは首を……。さつきも胸をやられましたの。殺人鬼が立ち去ってから、私はしなとさつきを手当しましたわ。残念ながらさいかは、手遅れでしたわ。そして、次には恭子を助けようと寮へ行きましたわ。寮は、血塗れでしたわ。殺人鬼が、関係ない人も殺したのでしょうか。まだ、息のある人は私手を尽くしましたの。しかし、きょうこは助けられませんでしたわ」

「あらしが、助けたんだ……。みんなを……」

「そして、きょうこの死体の近くにはきりとがいましたの。手にナイフを持って、寝ていましたわ。あの時、私がしっかりしていれば、きょうこもさいかも死なずに済んだんですわ。私が、私がこの力を……」

あらしは泣いていた。

「悔しいですわ、私は」

僕はその手を握る。あらしの手は温かった。

「コレは、電気熱ですよ」

「これは……電気熱じゃないよ……」

「ありがとうございますわ。そして、私は木瀬コーポにてさらなる改造を受けましたの。感情に流されず、自分の遂行すべきことを、ちゃんと遂行できるように。そうして、私はA R Sとなったのですわ。やぐが、起きたとき私の任務は始まりました。木瀬夜久の身を守りつつ、松崎千鶴を抹殺する。私が任務を完了すれば、私の両親の生活は保障されますのよ。ですから、私は任務で松崎千鶴を刺しましたの」

「……………そうなんだ……………」
「……………失望してもかまいませんわ。その後、私は深く後悔しましたの。ですから、木瀬コーポに懇願して、A R Sではなく櫛屋あらしに戻りましたわ。それが昨日。ただし、条件付きで。私が、生涯あなたのボディーガードとなることですわ。そんなのお安いご用でしたの。これが、私の改造人間になる経緯ですわ」
その後はぼくもあらしも折り鶴に熱中し、百四十五羽折ることが出来た。

「本当に出来るのかい？ 三日で六百五十なんて」
「できますわよ。やり遂げますの」

三日目は僕のベッドの周りに、サイカイとあらしが粗末な椅子に座る状態で手伝ってくれた。

「にしても不細工な鶴ですわね」
「おまえに言われたくないよ」

二人の作った鶴は、少し不格好だった。多少あらしのが上手い、かな。

「おい、やく。今、ボクの鶴のが下手だな、と心の中で笑っただろ」
「あつたりまえですわ！」

「ちょ、そんなこと考えてないから」
「ふうん、本当だな」

「あ、ああうん」
ふうー、サイカイがブチギレそうだった。セーフ、セーフ……………
「と、ボクが静かに黙っているとでも思ったかこの朴念仁共がぁ！」
まさか、アウト……………。

「病室では静かにしろつつてんだろぅがぁ！」
そこにナース服の般若登場。この人はすごい看護婦だ。ナイチンゲール精神とかはないのだろうか。
「……すみません」「」

本日はサイカイとあらしが競争を始めて二百二十四羽折った。競争社会万歳。

「あのさ、しーちゃん」

本日のボランテアはさつきとしな、そしていつものあらし。

「少しは黙って作業できないの。そんなだから就職先が見つからないのよ」

「あたし、自分の鶴がアヒルにしか見えない」

確かに、さつきの鶴はどう見てもアヒルだった。首が短くて、翼がよれよれで、所々ぼこぼこしている。

「見なさいよ、手本を」

洗濯カゴの中を指さす。赤白黄色、チューリップじゃないけれど、色とりどりの鶴が詰められている。置き場所に困った僕のためにあらしが準備してくれたものだった。

「いい？ 首はピンツと、翼もピンツと」

確かにしなの鶴は美麗だ。だけど、開始三十分で二羽とは、あまりにも酷すぎる。それに対してさつきは、質こそ最低なものの寮は遙かに上回っているのだ。その差十七羽。

「でもね、しーちゃん。質より量だよ」

「違うわ。質こそが全てよ」

両者睨みあうこと数分。

「喧嘩するよりも、折ることを優先する。違わなくって？」

傍らで、集中して鶴を折るあらしが、二人の冷戦を仲裁した。

「じゃ、あらし。質と量、どっちが優先されるべきだと思う？」

「何を馬鹿なことを仰ってますの。量に決まっていますわ」

さつきは狂喜し、しなは絶望に浸る。しかし、冷静な判断を下すことの出来るしなは、

「わかったわ。いっぱい折ればいいんでしょう？」

「そうそう」

僕も軽く相槌を打っておく。こうでもしないと、存在感が薄れちゃうからね。

こうして、今日は二百十八羽折った。

迎えた最終日。早朝からサイカイがやって来た。

「おはよう、やく。本当にいいんだね」

「ご老人達はまだ寝ている。それだからか、サイカイは正装ともいうべき、あの姿だった。朝日に身に纏った純白の布が照らされる。」

「あと、二百三十三羽。できるの？ 最高記録でも三日目の二百二十四羽だよ？ しかもタイムリミットは夕方だ。さらには、今日のボランティアはあらしいじゃないかな。さつきとしなは就職活動中だし。望みがあるとしたら……きりとだね。ふーちゃんは、うーん……仕事かな……」

君は何をしに来たんだ。教法を伝えに来たのか、そんなこととしてるなら手伝ってほしい。

僕は残り少なくなった千羽鶴用の折り紙を机の引き出しから取り出すと、何も言わずに鶴を折り始める。

「ふう、じゃあ僕はやらなきゃいけないことがあるんだ」

「夕方には、戻ってくる……んだよね」

「……まあ、ね」

サイカイは窓のサッシに腰掛けると、「じゃあ、また」と言い残して、いつもの不法侵入ルート『窓』から立ち去る。立ち去り方も格好いい。体操選手のように宙返りするのだ。一度だけ、宙返りした後どうなったのかを覗いたことがある。中庭の芝生へ綺麗に着地。そこからは猫の姿に変化し、茂みへ姿を消すのである。

「はあ」

睡眠はぼちぼち取っているのだが、妙に体がだるい。今日が山場だ。一分たりとも休んではいられない。死期が近づいているのか、腱鞘炎なのか運動不足なのかはわからないが、何だろ々と無視して、

二百三十三羽の千羽鶴を折らなければいけない。

「ふう」

手首が駄目になると、指先が内出血を起こそうと関係ない。僕は死ぬんだから、最後にやり遂げたい。自分のためにも、ちづるの為にも。

「木瀬さん、働き過ぎは体に毒ですよ。入院してるんだからしっかり身体を休ませて下さいな」

般若ナースは来なかった。かわりに普通のナースが僕へ優しい言葉をかける。

「ああ、はい。ありがとうございます」

しかし、僕の手は止まらない。エンジンをかけたらぶっ壊れるまで止まらない、バーサークハンドへとこの数日で進化したからだ。

「休憩もこまめにした方がいいですよ」

「ああ、ありがとうございます」

休憩する気など微塵もないね！

「そろそろ、朝食の時間ですけど……」

「牛乳だけでいいです」

ちなみに、コップ一杯の牛乳だけでお腹いっぱいになる便利な身体だ。ただし、栄養失調になりやすい。栄養失調になるうがかまわない。

「でも、栄養が……」

「大丈夫ですよ、友人がハンバーガー持ってきてくれるんです」

「お医者様からカロリーが多い油ものは控えて下さいって言われませんでしたか？」

「すいません、僕ハンバーガーが大好きなんです」

「好物でも同じものばかり食べてちゃダメですよ」

折り鶴を折る手は僕の意識と確実に分離していた。鶴を折りながらナースと口喧嘩が出来るって、すごいことだと思う。

「僕の身体ですから」

「身体壊しても知りませんよ」

「壊してもいいです」

その言葉に看護婦は、目を丸くした。

「あ、あの本気ですか」

「はい。本気ですよ。鶴さえ折れればいいんです」

もう既にバーサークハンドは、箸の使い方を忘れていた。もしかしたら、身体を支えることと、物を持つこと、そして鶴を折ることしか出来なそうだった。

「変わってますよね、木瀬さん」

「僕は昔から変わってますよ。その気になればライフル銃も組み立てられますし、戦車の一分のスケールプラモデルでも朝飯前じゃないんですかね」

戦車は組立説明書を読まなきゃムリだろうけど、ライフルは本能が覚えている。元々、僕は覚えるのが早いのだろう。だから、テストで高得点は勿論、爆弾の組立から解体まで、割と得意だった、多分、箸の使い方もしばらく教本（幼児向け）とにらめっこすれば、簡単に思い出せる。

「あはは、それはないんじゃないですか……」

信じられないのも当然だ。信じられたいとも思っていない。

「じゃあ、牛乳お願いします。なるべく美味しいやつで」

「野菜ジュースもありますけど」

「そっこのが医者につべこべ言われずに済むかな」

「ですね」

「野菜ジュース、それと牛乳。栄養ドリンク等あったらお願いします」

水分の過剰摂取には気をつけないと。下痢で作業効率が下がってしまう。

「では」

ナースは苦笑いしながら、部屋を去る。それと入れ替わりに、誰か入ってくる。

「おはようございます」

「ああ、あらし。おはよう」

ボランティアがやってきた。

「あらしは、一応僕のSRPって仕事があるんだっけ……」

「ええ。ちゃんと給料もらって、ニート三人を養っていますわ」

「ニート……って」

きりと、さつき、しな。この三人はあらしの家で居候か。

「あの三人はまたも採用試験落ちましたのよ」

「いっそ、プロレスラーにでもなればいいのに」

「私もそう言ってみたんですけども、『イヤ』の二文字で断られてしまいましたの」

「で、何になりたいんだって？」

あらしは、鶴を折り始める。

「歌手、ですって。この前カラオケ連れてって見たら火がついたみたいで……」

「で、上手なの？」

「はつきり言ってオンチ……ですわね。三人でユニット組むとか、どうか」

夢があっていいねえ。若いていいねえ。

「でも、私は普通の仕事を勧めていますわ。あの三人が普通に仕事できるかどうかも怪しいですし」

「自衛隊とかいけるんじゃないかな」

「ええ、確かに無尽蔵の体力ですわよね。きりとはめんどくさがるでしょうけど、ガンマニアのしなには打ってつけですわ」

そんなことを話しているうちに、栄養ドリンクが運ばれてきた。

「あら、珍しいですね。牛乳と水以外に飲み物を飲むなんて」

「まあ、たまには気分転換だよ。牛乳だけ飲んだらと医者に怒られるし」

「そうそう、今日はハンバーガー以外にも色々持ってきましたのよ」
「へえ、どんなの」

あらしは持参した紙袋から、箱を取り出す。

「唐揚げチキンっていらしいですの」

油物控えろって言われた傍から唐揚げか……。

「あと、いつものチーズハムバーガー。あと、私の趣味でトンカツバーガー。新発売ですって」

そして、二品追加。

「あと、胃腸が弱いやくのために胃薬も買ってきましたわ」
わあ、準備万端。

「油物食べてまるまる太っていただかないと」

太るには肉と炭水化物がいいと思うけど、そこはあえて何も言わないでおく。

「とりあえず、太るためにも頂くとするよ」

そう返事をする、につこりと笑い、ハンバーガーを僕の口元に近づけた。

「はい、あゝん」

まあ、手が止まらないからこうしてもらうしかない。だから、差し出されたハンバーガーを口で受け取る。

「おいしい？」

「おいしいよ。でもその言い方だと、自分が作ったように思えるからね」

「だって私、料理なんてできませんもの。使える食材があるとしたら人肉ですわ」

ここで、サイカイが来なければいいんだけど。夕方って言ってたし、それはないか。

「いっぱい食べて早く元気になってもらいませんか」

「……うん」

言える訳ない。今日、僕は死ぬなんて。

「どうしてそんなに悲しそうに答えるんですの」

僕は、不思議そうに、そして悔しそうに、腹立たしく言葉を放つあらしを見た。

「……運命は常に変わるものですわよ……」

今度は悲しみが言葉に詰まっていた。

「私は、あなたに、やくに！ 笑ってほしいですわ！」

その目には、光る物があつた。

「みんなに笑ってほしいですわ！ 私は笑顔が好きですの！」

あらしは泣いていた。

「やく。いつからあなたは人間らしさを失ったのですのっ」

人間らしさを失った、か。言えてるなあ……。確かに僕は機械と化していた。

「何か、悩みがあれば言ってほしいですわ……」

人間機械と化した僕、改造人間になったあらし。似たもの同士かもしれない。

「僕は、今日……」

「これ以上言つてはいけないよ」

ふいに僕の言葉を遮った声は、窓の外から飛び込んできた。

「どうしましたの、さいか。そのコスプレは」

「ツツコまないでくれ」

包帯が窓から入り込む風になびき、ゆらゆらと揺れる。

「やくは、腎虚じんきょなんだ。栄養を補ったところで病気は治らないさ」

「な……」

顔を赤らめて驚くあらし。というか、腎虚ってどういう言い訳だよ！

「不潔ですわ！ いつやったのですのっ」

「誤解だよ！ やってなんかないよ！」

「そうだぞ、やくは童貞のクセして腎虚なんだ」

なんとという矛盾……。

「おかしいですわよ！ 童貞と腎虚、どっちが嘘ですのっ」

「ちがうちがう！ 決して童貞でもないし腎虚でもない！」

「……………」

空気が凍った。

そこで僕はハッと気付く。童貞を否定してしまったことに！ 人

生最大のミスをしてしまった僕を見て、事の張本人サイカイはにたにた笑いをこらえていた。

「じゃ、じゃあ初体験済みですね。お相手は誰ですか？ やくの初めてをゲットしたヤツを探してみせますわ！」

「違う！ さっきのは言い間違いだ！ 信じてよ！」

「腎虚じゃないってことが言い間違いですね！ わかりましたわ！ 腎虚ですね！ お医者さんも呼んできますわ！」

ハンバーガーショップの紙袋を置いて、あらしは燃える目をして病室から出ていった。

「うーん、とんでもない誤解されちゃったね」

「原因はサイカイでしょうに……」

「は？ ボクのせいにならないでよ」

「そもそも腎虚とか嘘つかなきゃいいじゃないか」

「だって、元気そうだし一番お似合いなのはソレかと」

「やめてよ、もう」

僕は鶴折りを再開する。

「そうだそうだ、千羽鶴キツト買ってきたんだよ」

「ありがとう……」

こんな気分では鶴も折る気になれない。なんて言っている場合じゃない。

「これさえあれば、千羽鶴が簡単に出来ちゃう」

「鶴はご自分で準備して下さいって書いてあるじゃん」

「ま、まあね」

サイカイは洗濯籠の中の鶴を一つ取り出すと、鶴の背中をテグスで貫いた。

「ああーん、痛ーい」

僕はただただ、鶴を折る。

「お腹は刺しちゃいやあーん」

サイカイは鶴の気持ちを一つ一つ言葉にしながら、千羽鶴をまとめてゆく。

「あ、あーんつ。そこおーっ」

何も言わず鶴を折る僕。

「ら、らめえー」

鶴はだんだんと吊されてゆく。

「優しく、刺してね……」

てゆーかだんだん鶴の言葉が色づばくなっているのは気のせいだ
と思いたい。

「■■■■■」

遂に僕の耳が反応し、健全ではない言葉にフィルターをかけた。

昼の鐘が鳴った頃には鶴の山ができていた。

「これで、百……。あと百三十三……」

「がんばれえー。そこはっ、そこはあゝ」

ここで僕の三大秘密器具の一つ、『耳栓』を召喚する。これは親
愛なる友人、佐古部桐斗がなけなしの金をはたいて僕にくれたプレ
ゼントだ。余談となるが、他の三大秘密器具は、神来早月が買って
くれた『糸ようじ』、姫井椎名のプレゼント『バンソーコー』であ
る。

耳栓を両耳に差し込み、作業再開。

「—————」

どうもサイカイが口パクしているが、聞こえない。

「—————」

困った顔をしているので、こちらは作り笑いを。

「—————」

今度は怒りを顔に浮かべた。もう一度作り笑いを浮かべたら、
殴られた。

にしてもいいもんだ、耳栓は。作業に集中できるし、サイカイの
独り言は聞こえてこないし。

それから沈黙が三時間程度続いた。

耳栓効果は作業効率をも上げる。何故、これに気がつかなかった
か自分でも不思議だ。

なんともう百羽。

あと三十三羽……。あと二時間ほどでタイムリミット。十分間に合うだろう。サイカイも手伝ってくれてる……し？

「え？」

僕は耳栓を片耳だけ外し、周囲の状況を確認。鶴の背中にテグスをぶっ刺すサイカイの姿はない。千羽鶴キットのマニユアルと置き手紙が。

『月爰かへります』

月ってなんだよ……。さらにマニユアルに目を通してみると、一本のテグスに五十羽の鶴を吊す、と書いてある。二十本の鶴の束が出来るわけだが、一本すら完成していない。中途半端にも程がある。

「はあ」

仕事が多そうだ。

第二十五話 千羽鶴アストレイ（後書き）

鰻河です

今回のサブタイトル、千羽鶴アストレイは適当につけました。
ごめんなさい・・・

第二十六話 タイムリミット（前書き）

タイムリミットが近づく中、ゴーストマスターのきょうこが姿を現す。

平安時代の貴族の娘のような姿で。

やっと、みんなと話せた。

ねえ、ちづる。

大好きだよ。

第二十六話 タイムリミット

時計の短針は四を指していた。長針は三。秒針はすぐ変わる。

この時点で僕は、千羽鶴を束にしていた。グラデーションにするのがよいでしょう、とマニュアルに書いてあったが残念ながら色合いはバラバラだ。

残す束は十本。ここまでは僕の眠れる力を覚醒させ、残像が見えてしまう程のスピードを再現したかったけど、僕には格好いい特殊能力はなかった。本当に残念だ。残り四十五分で十本は、奇跡でも起きない限り不可能だ。こういう時に超能力とか目覚めればいいんだけど。一本を五分で仕上げてても時間が足りない。サイカイ、戻ってこないかなあ。

「そうだ、あらしはどこ行った」

確か、誤解をしたまま……。

「わらわが手伝おう」

生温い風が吹き、声の主は姿を現す。風にたなびく長い髪、神秘と言うより他はない鮮やかな十二単、そして何よりもその手に握られていたものが彼女を象徴している。

「釘バット……」

木のバットに無造作に打ち付けられた釘が格好いいと感じるか、ダサいなど感じるかは趣味によるが、僕は何故だか風情があると感じられた。

「釘バットは美徳じゃ」

「てゆうか、きょうこ？」

十二単の美人の正体は、他でもない淀見恭子だ。

「何故わかった？」

「釘バット」きょうこの方程式がこの身体に染みついてるらしくって」

そもそも、その釘バットで自分の正体を明かしているに等しい。

「んー、まあ……久しぶり」

きょうこはそつばを向きながら、再会の言葉を焦れったそうに言う。

「久しぶり」

僕の手は千羽鶴作りに夢中だ。

「さあて、手伝うとするか、あと少しなんだろ」

きょうこは本来ならサイカイが座っているはずの丸椅子に腰掛け、テグスを引っ張る。

「ちづるに少しでもお前の顔を見せてやりたい、からさ。べ、別にお前の為じゃないんだからな、ちづるの為だからな！勘違いするなよっ」

そこでツンデレをする理由はわからない。しかし、口はそんなことを喋っているものの、きょうこの手さばきは神業としか言えなかった。テグスに鶴を通し、すかさずビーズで鶴を留める。それでたった数分の間に鶴の束一本を作りあげるのだ。流石に僕の手も止まってしまった。上には上がいるんだなあ。

「何だ？」

きょうこの手を凝視していると本気で残像が見える。流石ゴーストマスター。人外パワーは計り知れない。

「いや、そのままでもいいよ」

時は刻一刻と過ぎてゆく。にしても、同室のご老人達には見えないのだろうか。この平安時代のお姫様っぽい人を。

「それは、わらわが幽霊で、見える人が限られているからじゃ。もう死期の迫った人にしか見えぬ。なんて、和風口調で言ってるのもアレか。ちづるとの契約も切れかけて、力を失いかけてるってのも一理あるかな」

幽霊、か。その幽霊が見えるのも僕があと数分で死ぬからか。こんなことがあると、本当に実感するよ。自分の死を。

「怖くはないのか？」

きょうこは手だけを動かし、僕にたずねた。

「これ以上、望んだら僕はすごく強欲だよ」

ちづるに逢えた。みんなに逢えた。それだけで、嬉しくて……………

「ホント、変わらねえよな、おまえはさ」

白い歯を見せて笑うきょうこは、幸せそうだった。

「お前が幽霊だったらゼツタイ偉くなれるのになあ」

「残念ながら僕はあんまり、地位とか興味ないんだ」

いつも僕が求めているのは遠いものだ。普通の生活だって手に入らないし、夢みたいな特殊能力だって手に入らない。僕が、望んで与えてもらったものは「友達」と、「好きな人」だけだ。七人の友達をもらって、心から大好きと思える「好きな人」を手に入れた。

「本当に、ロマンチストだよなっ」

もう一度元気よく笑うと、僕が制作進行中の千羽鶴の束を奪った。
「あとは、これだけだ。十分、話せる時間があるぜ」

最後ということもあって、手の動きは肉眼では確認できなかった。
「しかし、どうしてだろうな？」

きょうこは指をパチンとならす。まさにイリユージョンだった。

真っ黒な車椅子が一台、種も仕掛けもなく現れたのだから。きょうこは、車椅子に千羽鶴をくくりつけながら独り言を。

「なんで、サイカイを狩らなかつたんじやろーな。やろっと思えばいくらでもおまえとちづるをくつつけられたのに」

「それは……………」

仲間だからだよ…………。友達を殺すなんてできないから。

「おっと、急がないと時間がなくなるぞー？」

僕の身体が宙に浮く。複雑な気分だ。逆お姫様だったことは…………。男性にお姫様だったこされるよりも、普通の女性にされるよりも、非常に複雑な気分だ。だって、きょうこの見た目は平安時代のお姫様だから。

「きょうこジェットコースター！ スタート！」

車椅子に固定される間もなく、きょうこの足は高速で動き出す。自動ではない自動ドアも衝撃波でものすごい音を立てて開けられる。

「なあ、幽霊つて見えないんだ」

「あ……」

他人から見れば僕は、単独で車椅子を動かしているように見えるのか。もしくは、きょうこが作った車椅子だから、僕しか見えないのだろうか……。どちらにしても変な人に見えるのは間違いない。

「でも安心しろよ？ 車椅子は普通の人にも見えるからさ」

ここで、階段とエレベーターという壁が立ちふさがる。きょうこは、集中治療室のある五階へ行くべく、上の階へ行くのボタンを押す。

「え？」

しかし、エレベーターではなく、階段の方へと車椅子を押す。ビガー、とエレベーターが開かれるも、入らない。

「なんで入らないの？」

「押したつていいじゃないか」

遊びだったのか。にしても車椅子でどう階段を上ろうというのか。しかし、異変は起こる。車椅子が奇妙な音を出して、浮いたのだ。

「え？ え？ え……？」

「ホバリング移動だ！」

そこまでは考えていなかった。ホバリング移動を開始した車椅子こと、サイバー車椅子は階段を上ってゆく。しかも、速さは自転車並み。なにより、一番の弱点は酔うことだ。

「うげえ……」

「酔うなよ」

酔っている間に五階へ到着。サイバー車椅子はホバリング移動を止めない。

「着いたぞ」

「早い、ね……」

もう喉まで胃の中のアレが遡ってきているというのに。こんな体験は一生したくない。いや、それはまずないなあ。

それはそうとして、松崎千鶴様、というネームプレートのついた

部屋の『面会謝絶』の紙は剥がされていた。

「もう、お前だけで入るといい」

くくりつけられた千羽鶴を手渡すと、きょうこは扉を開けた。

「お姫様が待っているからさ。従者は必要ないだろう?」

車椅子から降りた僕の背中を強く押すと、シャツと扉を素早く閉めた。そして、時計を見る。四時五十六分。タイムリミットまであと四分。

「ちづる……」

僕は、ベッドに仰向けで寝ている彼女に声をかけた。僕が目覚めたときと一緒に、色々な機械につながれている。

「やっと、逢えたのにさ。意地悪だよ……」

こうなってしまったのは、全部僕がお人好しだから。お弁当を食べて倒れて、サイカイの為にちづると近づけなくて……。

心電図は、リズム良く音を奏でている。

「ずっと、待っていてくれたのに……。僕は」

いつの間にか、時計が五八分を示している。

「君に何も言っていないから……」

君が倒れたのは、あらしのせいではない。元は僕のせい……。僕があらしをちゃんと見ていられたら……。

「だから、僕は……言うよ」

意識を保つのがだんだんと、難しくなっていく。でも、これだけはちづるに言わなきゃいけない。

「大好きだよ……。ありがとう……」

そして、僕はちづるの寝るベッドの脇に倒れ伏す。後悔はない。

——タイムリミットだよ——

私が目を覚ますと、そこに彼はいた。彼は、私のベッドの近くに倒れていた。夕日が私を照らす。私は、ゆっくりと彼に触れる。石のように冷たかった。

「……おい」

嘘だと信じた。

「冗談だろう？」

やっと逢えたのに、やっと再会できたのに。

こんなの、あんまりだ。

「助けてくれるんだろう、きょうこ」

部屋の外から、十二単の幽霊が姿を見せる。それは、ゆっくりと首を横に振った。

「言っただじゃないか……」

「あくまで契約して死神を退治したら、ということだが」

「そんなんなら契約なんかしないで、一緒にいればよか……」

そこで、私は気がついた。きょうこの表情が、いつもと違うことに。

「こっちだって、手は尽くしたんだ！ でも、できなかったんだよ！」

顔を赤く染めて、涙をぼろぼろ流しているきょうこを、私は初めて見たかもしれない。

「だって、だって……さいかを殺せるか、殺せるかあ……」

「っ……」

私は、それ以上何も言えなかった。冷たい彼を見て、目をそらす。それを何度も繰り返していた。

「なあ、これでいいんだよな、さいか」

「そうですよ、あとはさいかにお任せですう！」

「にしても、これはあまりにも残酷すぎるませんか？」

「でも、その代わり、ほしいものが全部手に入りますう」

「うーん、今持っている物を全て手放しても欲しいものかよ」

「これが、みんなハッピーになれる手段なのですよ、我慢しやがれ
ですう」

「でも本人の意思とは関係なしですよ、さいか。怒られても知り
ませんわよ」

「まず、全然ハッピーじゃないヤツがいるんだよ、分かるか？」

「死神が一人増えても別に大丈夫ですよ。こっちは狩られてるので
すよお？」

「あのですわね、私だけ話に乗れないのですけど」

「気にするな、いずれ分かるからさ」

ビル街の片隅で人外達が戯れる。

第二十六話 タイムリミット（後書き）

鰻河です。

最終回じゃありません。

次回、一応最終回。

最終話 奇跡の死神（前書き）

これは、僕の死後の話。

これは、彼の死後の話。

最終話 奇跡の死神

不思議な夢を見た

青い空と、純白の雲と、その中で踊る黒い鳥たち

黒い羽根がヒラリヒラリと舞っている

その羽根の一つを 掴んだ

その瞬間、空がずーっと遠くなって……

腰を打った。

「ぐえ……」

コンクリートに腰を直撃。これは、湿布で治りそうにない。

「あれ？」

すぐに痛みは和らいでいく。百メートル以上も上から落ちたのに

……って、死んでないのがおかしいよ！

「生きてるっ？」

なにより、僕はタイムリミットで死んだはずなのに。

「ああ、先月、木瀬夜久は享年二十五歳でお亡くなりになられたよ」

しかし、生きていたはずの僕とはどこが違う。まず、痛みがすぐ

消える。なにより、決定的な違いは、上半身に纏われた白い布と、

ぶつかぶかの黒いズボンだ。

「そして、本日、死神キセキが誕生したよ」

目の前には誰かが立っていた。僕と同じ、白い布とぶかぶかの黒ズボンの。僕と同じなのではなく、僕がその誰かと同じ服装なのだ。

「死神サイカイだ。今後ともヨロシク」

「いやいやいや」

僕がいつ死神になるなんて承諾した？

「はっはっは、はじめからキミに選択権なんてないのだった」

嬉しそうに仁王立ち。なんというか、すごく騙された気分だ。

「死神って……」

「キミが望んでいたものは全てその手にあるよ。友達、普通の生活、そして、何より強さ」

サイカイは僕に小さな手を差し伸べる。

「寒いんだけど」

「十一月だからね。寒ければ厚着すればいいよ」

白い布が風になびく。そして、奇妙に揺れるとその形を変えた。

灰色のコートと、雲のようなふわふわのマフラーに。僕がイメージした防寒着と全く同じだ。

「ちなみに僕は厚着は嫌いなんだ。太っているように見えるからね」

サイカイの手を握ると、サイカイはコンクリートの上に寝そべる僕を引っ張って、起こす。

「さて、キミの彼女に会いに行けばいいよ」

よく見れば、ここは病院の屋上だ。

「あの、ちづるの所？」

「あれ、愛人でもいたのかい？」

「いないいない」

サイカイはコンクリートを蹴って、風に乗る。続いて僕も風に身を任せる。

「風は気持ちいいだろう？ 空の中を飛ぶのはストレス発散になるんだ」

「そうだね、ちづると一緒に飛びたいくらいだよ」

「草食系卒業か、うんうん」

「そもそも、僕は草食系じゃないよ」

「そうだなあ、自惚れ系だったけ」

そんな会話を交わしながら、僕はサイカイと空を飛んだ。

「ここが、ちづるの住む、ボロアパートだ」

酷い言いようだ。ボロアパートではない、昔懐かしの木造建築アパートなのだ。

「ちなみに憎きゴーストマスターも居候している」

「あれ？ 幽霊に狩られるんだよね？」

その木造建築の明らかに火災対策が薄そうなボロアパートへと降りてゆく。

「大丈夫、狩らないように言っておいたから。あれでも、旧友への礼儀はあるから」

「そう……」

そして、サイカイは僕を玄関の前に立たせると、

「ボクが、出る幕じゃあゝないから。帰るわ」

「え？ ま、ちょ……」

「じゃあ、時間が経ったら迎えに来るから」

サイカイは、猛スピードで空を滑空する。

一人残された僕は、立ちすくむ。何分も何分も。呼び出し鈴がないので、どう、合えばいいかも分からない。何を言えばいいやら……。ここは定番の、ドッキリ成功！ かな？ いやいや、それはおかしいか……。うーん……。

そこで、僕の発達した悪知恵が働く。呼び出し鈴がないなら、ノックがあるじゃないか。ピンポンダッシュならずコンコンダッシュしよう。

というわけで、僕は古ぼけた木の戸をコンコンと叩いた。そして、死角へダッシュ。

「はい」

ちづるが出てきた。

「……近頃も物騒になったなあ。コンコンダッシュなんて今時流行ってるのか？」

流行ってません！

「よし」

今度は、ちづるが何かを思いついたらしい。

「おい、ガキ！」

犯人を締めようと、曲がり角へやって来て……。

「警察、呼ぶ……ぞ……？」

僕の顔を見て、言葉を止めた。

「あはははは、久しぶり……」

「や……」

笑っしかない。もう、笑ってこの場をやり過ぐすしかない！

「やく、なのか……？」

「う、うん」

ちづるは、疑問一つ抱かぬ顔で、走ってきて、

「……やく！」

僕の背中に両腕を回し、要は抱きついた。僕も、抱きついたちづるの顔を見てから、抱きしめる。

「ただいまっ」

最終話 奇跡の死神（後書き）

遂に完結です！

ここまで読んでいただけた方！ ありがとうございます！

がんばって次回作も書きますのでよろしく願いいたします。

霊1話 波乱の幕開け（前書き）

死神の位を決めるため、やく、こと死神キセキは死神霊位決定戦へ行かなければならなくなった。しかし、それまで時間がある。なので暇だからあらしの家へ遊びに行く。温かく迎えてくれるあらし。しかし、やくは驚きの事実を突きつけられる。

霊1話 波乱の幕開け

「死神霊位決定戦？」

サイカイにそのことを言われたのは、2週間ほど前であった。流石にちづるの家に居座っているわけもなく、ぶらり死神一人旅に精を出している頃。サイカイとも音信不通になりかけ、ようやく僕も独り立ちかフッフ、とうぬぼれている頃でもあった。

「霊位決定戦？」

「そう。霊位決定戦。君の頭でもわかりやすく例えるなら、なりたてベテランおかまいなしの戦いだ。トーナメント戦で行われ、勝ち数によって死神としてのランクが決定されるわけだ。第一位を魔神、第二位を魔王……といった具合にな」

「どこの悪魔だよ」

「世の中悪魔なんて存在しない。死神が姿を変え、人の前に現れたものを勝手に人間が悪魔って呼んでるだけなんだ。……ほら、君のせいですぐ話がそれる」

ブランコに座りながら、サイカイは僕を罵る。

「で、世界中の死神は強制参加」

「参加したくないんだけど」

「ほう、参加しない物の末路を教えてやろう。魂が消滅する。つまり、死神人生に幕を下ろすことになるのさ」

死神でも悪魔でも何でもいいからどうかしてこの「僕」を保たなければ！

「そりゃ、イヤでも参加しなくちゃね」

「参加するなら、それなりの成績にしてね。ボクが笑われる。そうそう、まあ最低ラインで第16位だね」

「それがすごいのかどうか、死神がどのくらいいるのか……」

「全世界で1000はいるんじゃないかな？」

さらりとすごいこと言ったよこの人。1000人中ベスト16つてどこの超人ですか。

「まあ数はいるが、それだけ質が悪いのも多い。一回戦目は楽勝だと思う」

サイカイはそんなことを口ずさみながら、目線を上げた。僕も習うように、上を見上げる。灰色の空。太陽の光さえ雲に遮られるようだった。

「霊位決定戦は、次、空が灰色になったとき。その時、ボクたち死神は空へ誘われる」

しかしその後、2週間経っても空が灰色になることはなく、僕はたそがれていた。

どこでだつて？

「もう、やく……。何で生きていると教えてくれませんでしたの？ちづるから、『やくを見た！やくがピンポンダッシュ』した、と聞かされたときはちづるの頭がイカれたとは思いませんでしたわ」

「ごめんごめん。ややこしい話で」

あらしの家で。

「ったく、命日から3ヶ月も経っているのに気がついていたのでしようね？御家族にも顔を見せてあげなさいな」

「いや、僕死んで、さいかに強制的に復活させられたって言ったじゃん？」

「まあ、さいかが人外になったのはわりと察しがついていましたわ」
あらしは、温かいコーヒーを出してくれた。ARSみたく今日はメイド服じゃなく、セーターにロングスカートとはこれまた清楚なイメージを醸し出している。

「それにしても、三人は？」

「きりと、しな、さつきでして？こちらもややこしいお話ですの

よ？ 相当の覚悟が必要ですよ」

「死んだと言わないでね」

まさか……、とあらしは優しく微笑んだ。

「まず、誰から聞きたいんですの？」

「じゃあ、しな」

「しな……は、一番シンプルですわね。これ、ご覧なさい？」

あらしから手渡されたのは一冊の雑誌。20代向けの雑誌のよう
だ。

「まあ、あれも一応は美女ですわ。その美貌を生かして、この雑誌の専属モデルになっちゃいましたのよ。顔がよけりやなんでもいいのかしら」

表紙に大きく、しなが映っていた。それもポーズを決めて。そして、化粧などで、いっそう美しく見えた。

「じゃあ、きりと」

「きりとは、修行のため、山籠もりですわ。将来的には坊さんになるようですのね」

「は？」

ロックバンドとかそういう類だと信じて止まなかったきりだが、まさかの、神の道へ？

「あはははは……面白い冗談だね……」

「自分の罪を償って、いつかまた、きょうこに会ったためらしいですわ」

「そうか……」

すると、あらしは立ち上がり、奥の畳の方へ僕を手招いた。なんだろうか。

「びつくりしましたわ」

通された和室には仏壇があつた。豪勢な仏壇。流石、一流企業のSP兼使用人。

「なら、話が早いですわね」

その仏壇の奥で笑ってる、茶髪の少女。長い髪をツインテールに

結って、満面の笑みを浮かべた彼女は。

「え……？」

痩せ細った身体で、一生懸命立って、笑っている。

「一ヶ月前ですわ。さつきは短い命でこの世を去りましたわ」

白いワンピースに白いつば付きの帽子をかぶったさつきだった。

それは、写真でもわかるくらい儚くて。

壺1話 波乱の幕開け（後書き）

久しぶりです！

鰻河です。

自分でもびっくりなくらいの急展開になってしまいましたorz
続きをお楽しみにしていただけたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7126w/>

元・殺人鬼の日常

2011年10月8日03時18分発行